

2023年に計24回にわたり「編集室から」で紹介したアブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」

(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010) をここにまとめて再掲載する。2月から10月まで足かけ9か月におよぶ長期連載だったため、脚注などの表記の仕方に若干の変遷があるが、「初出の尊重」という趣旨からオリジナルのままとする。ターリバーンとは何か？を考えるにあたり参考していただければ幸いである。(金子明)

(2023年2月25日)

ロシアがウクライナに攻め入って、もう1年か。すぐに屈服すると思ったウクライナの大統領だが、誰かの手助けもあって粘りに粘り、悪役プーチンを長きにわたり苦しめている。国民にしてみれば、取って食おうという訳でもなかろう大国に(いや、民を取って食うのはどんな国家も同じかな)下手に抗い、物理的に殺されまくって迷惑至極だろうと同情する。戦争は景気を良くするので、「ワハハ」状態の輩もいるんだろうね、と思うと歯がゆいばかり・・・

さて、そうなるへとそ曲がりの私は、どうもロシアに肩入れしたくなる。この点、青ポチ覚悟。みんなが右と言えば、左へ行きたくなる・・・この性分は死ぬまで変わるまい。日清戦争の戦果に狂奔する教室で、「日本はきっと負けます」と言い放った小学生、中勘助の気分かな。

そしてアフガニスタンである。これまでこのサイトで、アメリカや女性代議士の声はさんざん紹介してきた。そこでへそ曲がりにとって気になるのが、プーチン並みの悪役たるターリバーンの内幕である。西側の学者やジャーナリストによる解説本はいくつかあるが、ターリバーンその人が書いた書物(われわれにも読める

という意味では'英語'の書物)は無いのだろうか？

これがあるのだ。著者はアブドル・サラム・ザイーフ

(1967~)。あのオマル師よりも先にターリバーンの創生に関わった人物だと言う。第1次ターリバーン政権では最後、駐パキスタン大使だったが、2001年秋アメリカの侵攻で政府は崩壊し、翌年イスラマバードにて逮捕。結局アメリカに引き渡されグアンタナモで3年間(2002~2005)お勤めしたという大物である。

モスレムの政治家はたびたび優れた詩人でもある。ザイーフもこの著書「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/2010)の冒頭に自らの詩を寄せている。

この「自由」は誇りある国民を鎖に繋ぐ

そして自由な人を奴隷に変える

「独立」はわれわれを弱くし

われわれを屠殺する

親切の名前で

これは鞭と

鎖の恐怖による民主主義

その核には突風が舞う

この詩を受けて、英語翻訳に携わった編集者2人によるやや長い解説や、読み方ガイド、登場人物一覧ほかがあり、やっそこさ著者本人による序文が始まる。それは2007年、生まれ故郷のカンダハールを訪れたときの短い旅行記である。

ザイーフが最後にここに来たのは2001年。当時は米軍機が無慈悲に街を爆撃し、黒い煙が立ち上る中、市民たちは子どもを連れて逃げ惑っていた。6年たった今はさすがに平穏だが、話を聞くと生活は苦しいと言う。仕事が少なく失業者が多いのだ。

「アメリカ人はここで寄贈された金を使うのだが、自分たちのた

めにだけ。アフガン人で恩恵にあずかるのは、その手助けをした者だけ。あげくに彼らは外国の援助がアフガン人を殺しているのさ、とうそぶく。」

続いて、第3地区で起きた肉屋の悲劇をレポートする。証言者は肉屋の子どもたちだ。

「外国人が家の玄関を爆破した。みんな寢床から飛び起きたよ。2人の兄さんが『おー神様』と叫び、そのうちの1人が事態を把握しようとして中庭に走り出た。まさか米兵がいて、屋根やその他の場所に陣取っているとは思っていなかった。奴らは待ち伏せしていたのさ。米兵が兄さんを蜂の巣にした。尋問しようとするしなかった。兄さんが何かに関わっているかどうかには興味がなかった。ただ無慈悲に撃ち始めた。」

銃声を聞いたもう1人の兄も中庭に走り出て、同じ運命となった。その後、米兵は家に踏み込み、野獣のごとくあらゆる家財道具を滅茶苦茶に壊した。だが怪しい物は何も見つからなかった。家にいた男はみな中庭でうつ伏せにされ、妻たちと子どもたちが震えながらそれを見ていた。米兵が怖くて隣近所も、政府ですらも何の手出しも出来ない。

去り際にアメリカ人は「すまんね、戻っていいよ」と言った。

「問題なし」と。だが、そのわずか数メートル先には殺された2人の死体が自らの血の海で泳いでいた。ターリバーンの戦闘員が幾人かの兵士を殺したとき、彼らは報復として一般市民を殺した。ザイーフはわずかな滞在期間だったが、日に日に国民の怒りが高まっていくのを感じたと言う。

敬虔なモスレムの例に漏れず、神をあがめ、敵味方関わらず生命の大切さを説いた後、ザイーフはこの半生記をしたための4つの目的を開陳する：

1. 王だろうが乞食だろうが、若かろうが年寄りだろうが、男だろうが女だろうが、黒だろうが白だろうが、生命は平等であることを知るのには皆の責任だと理解させる。

2. 自分自身およびその持ち場と名誉を守ることは、真つ当な権利であると考える者に、この地球の別の場所にいる他人も、生きて、その持ち場と名誉を守る権利を持つと理解させる。

3. 真のアフガン文化に疎い人々に、その知識を増し理解を深めさせる。

4. 世界にアフガンの現状のひどさを理解させ、いかに抑圧されているかを知らしめ、人々の親切と同情を引き出す。

なかなか立派な4つの狙いである。

これに沿ってこのあとの全21章が書かれている。

われわれのスタンスは「反ターリバーン」で間違いなからう。とは言え、闇雲に毛嫌いしては何も変わらない。かつて日本と戦った米国は「日本の文化」なる短編映画を劇場で公開し、一般市民に敵国への興味を持たせたと聞く。そのおかげばかりではないが、米国は勝ち、敵性語を禁じたわが帝国は敗れた。

敵を知ることは大切だと思う。次回からこの本を少しずつ読み解いていくのでご期待あれ。

(2023年3月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010)を紹介する第2弾。今回はその第1章「故郷での死」から抜粋・翻訳する。

物語はザイーフが生まれる6年前の1962年に始まる。当時は「やがて滅びる運命とは言え、その強さに国民が満足している」ザヒール・シャー国王(在位1933~1973)の治世だった。カンダハールとカーブルの間にあるジャルダックという村(ザーブル州)で土地がらみの部族闘争が起こり、数10人の死者が出

た。16人を殺害したとの容疑をかけられたムッラー・ネザムは砂漠に逃げたが、政府軍に襲撃され銃撃戦の末に殺された。

それで事が治まる訳ではない。「パシュトゥーン人の名誉の掟は、敵討ちを強いる。」それを避けるためネザムの兄弟3人は一族を従え、隣州カンダハールの小さな村ザンジャバードに移り住んだ。その3人のうちの1人が宗教学者だったが、やがて4人の子ども（男2女2）に恵まれた。著者のアブドル・サラム・ザイーフの父親である。

本文でザイーフは「母の3番目の子どもだった」と書いているが、巻末の年表によると母親はザイーフが7か月のときに死んでいる。父親はその後、妻をめとらなかったというから、ザイーフが末っ子なのだろう。子どもたちに決して手を上げず、怒鳴ることさえない優しい父親だったと言う。

「アフガン人ならば、決して1人だけの存在ではない。家族、部族、民族、生まれ故郷、全てが我々の一部である。大都市カーブル、パキスタン、世界へと出て行って久しいパシュトゥーン人は、それを忘れているのかも知れない。部族、一族、家族、そして親類たちと共に、真のアイデンティティーは存在する。外国人はアフガン人であることが意味することを本当には理解しきれない。」（下線ママ）

この思いを強くザイーフに抱かせたのは、その生い立ちであると言えようか。子どもたちは母の死後、叔父の家に引きとられ、その妻が面倒を見た。当然、父親も一緒にその家に移り住む（大家族）。しかし子どもたちは、父の姿をほとんど見かけなかった。村のマドラサで、教育に没頭していたのだ。

例の宗教学校「マドラサ」である。この自伝の優れている点のひとつは、脚注の詳しさ、およびその視座である。過激派たるター

リバーンを生み出す”虎の穴”的存在と紹介されがちなマドラサだが、以下を読むと若干印象が変わる：

「南アフガニスタンとパキスタンで、（特に田舎の貧乏な人々によって）教育の最初的手段として普通に選ばれる宗教学校。概して男子のみが対象だが、女子を教育する所もある。教育内容は主に宗教学の全般を大まかに。卒業すると聖なる書物（特にクルアーンそのもの）を暗記できると、しばしば期待される。」

ザイーフが2歳になると、父は3人の子ども（ザイーフと2人の姉）を連れてムーシャムという村に引っ越した。ちなみに長男はすでに別の村で学業にいそしんでいた。父は村のモスクで1日の長い時間を教育と研究のために費やした。ムッラーとなったのである。

脚注「ムッラー：アフガニスタンの都市を1歩出ると極めて幅をきかせている宗教的役職または聖職者。各村に普通1人だけいる宗教の権威（子どもの頃マドラサに通ったか、おそらく若干のアラビア語、つまりクルアーンの言葉を読めるので）。その性質からして、ムッラーの権威は宗教的な事象に普通は限定される。」

1971~72年は国中を干ばつが襲い、村でも多くの犠牲者が出た。脚注によると、当時の農業相は「貧農どもが草を食おうが決して大事ではない。奴らは獣だ。慣れたものさ」と言い放ったらしい。2人の姉のうち次女がその時期に死んだ。気落ちした父は3度目の引っ越しを行い、ラングレザンという村の小さなモスクでイマームとなった。

脚注「イマーム：宗教的理解者を指し示す別の呼び名。どこにいてもイマームは日に5度の礼拝で指揮をする。」

4歳のザイーフはこの村のモスクで、父から読み書きを教わるようになる。その際使用した教科書がアル=カーイダである。

脚注「アル＝カーイダ：宗教を学ぶ生徒が最初に使う基本かつ初歩の教科書。アラビア語のアルファベット、イスラームのいくつかの句、極めて初歩の算数を紹介する。後の時代になるとパシュトゥー語に訳されたが、ザイーフが学んだ頃はすべてアラビア語で書かれていた。アル＝カーイダと言えはこちらが本家。1988年8月になってやっと創設されたオサマ・ビン＝ラーディンのグループとは何の関係もないので混同に注意。」

やがて父はイマームとして有名になり、遠くの村からも多くの人とその教えを乞いに来た。ときおり病人や取り憑かれた者を家に連れ帰り、一緒に神へ祈りを捧げた。そんな場合でさえ、父はまったく代価を要求せず、ザカットすらも拒んだ。

脚注「ザカット：イスラームの5つの柱（信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼）の1つ、喜捨。特に南アフガニスタンでは広く推奨されている。また多くの場合、公式に認められた慈善寄付の1形態として、ある程度まで体系化されている。つまり財政手段を持つ者は、年収及び流動資産の2.5%を困窮者に施さねばならない。宗教上の聖職者は、政府から与えられる名目上の給金だけでは足りず、特に南部の田舎では他の村人が施すザカットないし寄付に頼らざるを得ない。アフガニスタンにはこの他にウシュールもある。それは利益の1割を仲間の村人に分け与え差し出す伝統である。」

そんな父だったが、かなり高齢だったようで、1975年ザイーフが7歳のときに病死した。残された姉とザイーフはチャルシャカという村で従兄弟を頼って暮らすようになった。そこでも従前通り朝はモスクで勉強した。午後は家の手伝い。羊と山羊の世話をし、牛舎を掃除して牛に餌をやった。そんな暮らしを1年半続けた頃、姉が父の決めた相手と結婚した。結婚式の日、ザイーフは心が乱れ、たくさん泣いた。

ひとりになったザイーフは、将来の不安から勉強に身が入らず、無為な日々を過ごしていた。心配した兄の計らいでサンジガールという村に暮らす母親の親類夫婦に預けられることになった。村のマドラサに父の教え子がおり、入学した。するとそこでニアズ・モハンマドという教師と出会った。

1978年にPDPA（アフガニスタン人民民主党）による四月革命が勃発。首相となったタラキをカンダハール州で強く支持していたのがニアズ・モハンマドだった。突如、共産主義を礼賛し、「タラキを救世主の仲間で、その使いであるとまで言う」教師の出現。こうなるとマドラサは混乱し、生徒の多くはパキスタンや周辺地域へと去った。

ザイーフの親類たちも宗教教育に嫌気がさしてか、彼を州都カンダハールの世俗の小学校に送り出した。ザイーフは入試を受け、4年生として編入された。そこで1年間学んだ。当時のカンダハール州は生き生きとしていた。穀物庫はいっぱい、水はどこも潤沢、人々はバレーボールに打ち興じていた。

ある日、サンジガールに里帰りしてニアズ・モハンマドに再会した。彼は変貌していた。そしてこう言った、「息子よ！もう登録は済ませたのか、それともまだか？」

革命以降、タラキの動きは速かった。まず、人民への土地の分け与え。登録さえすれば、誰もが最大2ヘクタールもの土地をもらえた。ザイーフはこう答えた。

「先生、その土地は他人の物だと言う先生たちもいます。他人の財産を奪うのは罪です。どうしてこの土地をもらえましょう？」

「これが世界の富の最後の分け前なのだ、息子よ。今参加しなければ永遠に土地無しだぞ。ほぼ間違いなく登録すべきだ！責任は



王がとる。王がこうしろと言ったら、それを疑うべきではない。従うのだ。」

まだ子どものザイーフを助けようとの親切心からだろうが、納得は行かない。その家で1晩泊まり、翌朝挨拶もせず、街へ帰った。

かつてマドラサで教えてくれた教師たちはパキスタンに逃げた。逃げ遅れた者は政府に罰せられた。この地方に住む高学歴者が共産主義者に助言した、「田舎で勢力を保ちたければ、地元の有力者を投獄せよ」と。多くが監獄に入れられたが、ほとんどが2度と帰らなかった。

タラキとアミンによる、土地改革の非道さもあって、内戦状態はすでに始まっていた。政府は名だたる司令官を捕まえ、「ターリバーン」を非難していた。ここで、著者は「ターリバーンとは何か」につき、下線付きで解説する：

「ターリバーンが1994年になって初めて登場したという一般的な誤解がある。実はターリバーンとは、ターリブという語の複数形である。その意味は学生。そうであるから、マドラサがあった限り、宗教的學生はいつもいて、つまりターリバーンもいた。ターリバーンは専ら政治的な分野を避けて存在していたのだ。それを政府が、土地改革を進めるために政治の舞台に引きずり出した。それに賛成しないのなら、今度は脅した。」

お返しにとばかりに、ターリバーンは政府の支持者を攻撃し始めた。ニアズ・モハンマドら賛成派は殺された。ザイーフもまた若き学生だったが、そうした事態には関心が薄く、ただ人々が「今は不信心者の時代になった」と言うのを耳にしていた。

ソ連は新政府を支援した。人々は恐れた。スパイの噂は絶えず、人々が忽然と消えた。政府は反対派を無慈悲に弾圧した。それに

武力で抗したのがムジャヒディーンだった。するとタラキとアミンは、カンダハールの南、砂漠にあるムジャヒディーンの陣地を戦闘機で襲った。またザイーフが育った村々も破壊した。

数千数万の人々がパキスタン、イラン、その先へと逃げた。共産主義者の攻撃は激しくなり、パキスタンとの国境地帯まで撤退したムジャヒディーンは、かつてのような戦果を上げられなくなった。

ザイーフは姉と、街のわずか数キロ西にあるムジャヒディーンの隠れ基地に引っ越した。戦いは村々を巡る攻防戦となっていた。政府軍がムジャヒディーンと対面する裏で、タラキの配下が村を巡って、市場に武器を卸し、小さな御用軍団を形成していた。それと知らぬターリバーンやムジャヒディーンは村々を移動中に待ち伏せを受けた。

時に戦いは終夜続いた。州の南は完全な戦争状態だった。そこで一族が最初にカンダハール州に落ち着いた村ザンジャバードにある従兄弟の家にザイーフは戻った。「毎日状況は悪化する」と一族の意見は一致し、即刻パキスタンに逃げることにした。2人の叔父はムジャヒディーンに加わった。

「闘争は広まった。流された血はやがて川となり流れた。1つの村から次の村へと。1つの地域から次の地域へと。1つの州から領域全体へと。そしてアフガニスタンという国全体が、その川に沈んだ。」

(2023年3月15日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010)を紹介する第3弾。今回はその第2章「難民キャンプ」から抜粋・翻訳する。

1978年に成立したPDPA政権による圧政に耐えかね、多くの国民がアフガニスタンから逃げ出した。その主な理由としてザイーフは2つの「布告」を上げる：

- ①布告8号・・・土地と財産を没収し、他人に分け与えることを法制化した
- ②布告7号・・・女性に教育されることを命じ、結婚の持参金を最高300アフガニ(約450ドル)に制限した

8号はともかく、7号がなぜ逃げ出す理由なのかと思うのだが、どちらの布告も国民は「ハラム」と判断して、拒絶したと言う。

(脚注：「ハラム：宗教的用語で、イスラームにとって許されないことを指す。反対語はハラルで、文字通りの意味は”許されたもの”。」)

人々はパキスタンやバルチスタンの国境地帯にある様々な難民キャンプに逃げ込んだ。後には各亡命政党が身分証明書を出すほどの活況で(脚注J)、難民にとっては国中の移動はおろか事業や商売も自由だった。「パキスタンは難民のおかげで、政治的にも経済的にもリッチになった。」

(脚注：1990年代初め、国外に暮らす難民数は600万超)

もれなく付いてきたのが、国連とNGO。中でもゲームの主要プレーヤーたるアメリカは熱心だった。ライバルのソ連を打ち負かそうと、パキスタンに急接近した。だがその後、「赤軍がアフガニスタンで地盤を失うと、西側諸国の援助も関心もしぼんだ。」

するとパキスタンも難民につらく当たり出すのは世の常か。難民の一部はアフガニスタンに強制送還されたり、中には不毛な地に追われ自らの手で家を建てさせられた者たちもいた。ここまで概説した後、著者は一族の逃避行について書き始める。

「1979年1月、村を出た。ちょうど南アフガニスタンの戦闘が激化した頃だった。」評判の悪い土地改革法はその前月に成立していた。「真夜中に、7台の車で出発。行き先は南のパキスタン。」荷物は極力へらし、父の本は置いて出た。砂漠を走り、国境を越えた。ザイーフにとって初めての外国。だが、その先が危険地帯だった。

「幹線道路は危ない。移動は夜のみで、見つからぬようヘッドライトを消して、脇道に行く。山の急坂に来ると、車から降りて歩いた。そして、ある所まで来ると車を捨てた。」その先は徒歩。たまに通りがかりのバイクに分乗した。1台に4人がしがみつく。道はアフガニスタンとパキスタンを結ぶ古来からの密輸ルートである。「3日3晩かけて目的地に着いた。」

そこはチャナンの郊外にある難民キャンプだった。(脚注↓) パキスタンはこの街を以降数百万に上るアフガン難民の通過拠点にした。

(脚注：「チャナン：当時で人口10万超の街、今も続く水不足のため、緑の庭は少ない。ゆるやかな山の懐にあり、周囲を村々が囲むなどカンダハールに酷似している。」)

「ここでどこに行くべきか指示され、次へと進む。我々は早朝について、数時間をキャンプで過ごした後、他の家族と一緒にトラックに乗った。後ろの荷台に、まるで家畜のように立って運ばれる。クエッタを通過して、ヌシュキに着いた。」これから大量にやって来ると見越されるアフガン難民を受け入れるためパキスタン政府が新たに準備したエリアで、一行はそこに落ち着いた。

キャンプでは難民の自治が認められていた。セクションごとに代表者が選ばれ、年配の者ほど高い地位についていた。彼らがパキスタン政府の役人と折衝したが、キャンプは最も基本の設備すら欠き、役人たちの反応は鈍かった。まともな水の供給も、健康チェックも、療養所もない。砂漠のど真ん中で、テントの布に触れると手を火傷するほどの暑さだった。

水は政府が時折トラックで運んでくるが、量が足りない。そこで近くの村にもらいに行く。すると、地元バローチ人とアフガン人は文化が違うので、些細なことで一触即発となる。難民キャンプが出来て以来、緊張が広がっていた。そしてとうとう衝突が起き、難民2人、現地人4人が殺された。以降、難民キャンプからの人々の出入りは禁止された。

それでも、近隣に難民キャンプを建てられたバローチ人の不満は収まらず、最後はキャンプの移転で決着した。ある晩、政府のトラックが連なってキャンプにやって来たのだ。難民たちはたった数時間の猶予で、荷物をまとめヌシュキを後にした。

まず運ばれた場所はシェル・ジャン・アガ。砂漠のオアシスで、そこにはジアラットもあり、新たな難民キャンプが決まるまでの2日間、そこで過ごした。

(脚注：「ジアラット：聖人が死に、その墓がある場所。南アフガニスタンやパキスタンの国境地帯では、ジアラットを訪れば聖人の御利益に預かるとされ、聖地として人気がある。例えば、訪れると子宝に恵まれる、女性に人気のジアラットもある。」)

オアシスで泳いだザイーフ少年は、とてもリフレッシュできた。また、聖人の霊験のお陰か、砂の中に10ルピーのコインまで発見し、今も印象に残る土地なのだという。そして3日目によく、新たなキャンプ地に到着した。そこはクエッタの75キロ西、パンジパイと呼ばれる場所だった。

(脚注：「パンジパイ：アフガン難民が来る前から、パンジパイ・キャンプと名付けられていた村。このエリアの5大難民キャンプは、スルカブ、サラナン、ジャンガル、パンジパイ、キルディ・ジャンガルにあった。」)

「もう太陽が沈みかけたころ、トラックは狭い未舗装路のドン付きまで来て止まった。何も無い林の中だ。即興で寝る場所をこしらえた。最初の数日は皆で木を切り倒し、平地を作るのに明け暮れた。倒した木で家々を作り、モスクも建てた。」

キャンプの周りには茨で柵を作ったが、サソリには効かない。毎晩ランプをつけるたびに3、4匹のサソリがはさみを振って侵入してきた。水は無く、持ち込んだ水に頼ったが、すぐに飲み干した。祈りの前の沐浴には砂を使った。

(脚注：「沐浴：ウドゥーとも呼ばれ、ムスリムには祈りの前に身を清める儀式がある。両手、口、顔、上腕、足を洗う。水が無ければ泥や砂で代用してもよい。」)

数キロ離れた村の井戸で水をくむのは、ザイーフたち子どもの役割だった。毎朝出かけるが、家に戻るのは、午後の喫茶の時間だった。道は長く、バケツは重く、みんなへトへトだった。

親類の15家族が最初このパンジパイ・キャンプで暮らし始めた。手作りのモスクに集まり、完璧なジャマートを行った。

(脚注：「ジャマート：文字通りはアラビア語で“集団”を意味する言葉だが、ここでは日に5度の祈りのうち、1度は皆がモスクにそろって祈ることを指す。」)

やがて難民の数は増え、「数百から数千に、即席のモスクは数十軒も建った。」その規模の急拡大にはパキスタン当局もただ驚くばかり。小麦粉、石けん、茶、脱脂粉乳などの必需品は足りたが、水はいつも不足した。そこで皆が力を合わせて井戸を掘った。すると31メートル下から水が湧き出した。そのときの喜びようは、まるでイードが来たかのようなだった。

(脚注：「イード：すべてのムスリムの例に漏れず、アフガン人も年に2度、イードと呼ばれる祭りを祝う。キリスト教徒のクリスマスに似ている。イードの日には、特別な



祈りと説教が行われ、家族・友人間で贈り物をする習わしがある。イード・アル＝フィトゥルとイード・アル＝アダハとして知られている。」)

やがて新たな難民たちがニュースを伝えた。1979年12月、ソ連がアフガニスタンに侵攻したと。以降国内ではムジャヒディーン対ソ連軍の戦いとなった。それに呼応してか、アフガン難民間では教育活動が盛んになった。難民に含まれる多くのムッラーが各地のモスクで教室を開いていたが、さらにシャー・モハンマド・カーンがマドラサを創設・運営した。

(脚注：「シャー・モハンマド・カーン：政党兼軍閥ヒズベ・イスラミの司令官で、後にガイラニ率いるアフガニスタン民族解放戦線が余った武器の分配にありつき始めると、そちらに鞍替えした。後のムジャヒディーン政権時はカンダハール州の教育長官。今も存命中で、2005年の総選挙に立候補した。」)

マドラサでは10年生（日本で言うと高1）までを教育した。ザイーフも入試を受けて6年生として通い始めた。パンジパイ・キャンプからは彼と合わせて7人がそこで学んだが、8年生の時には、級長に選ばれるなど、ザイーフは優等生だったと言う。しかし、別のキャンプから来た生徒たちと大喧嘩して、退学処分となった。以降はキャンプのモスクに戻り、学習を続けた。

アフガン内戦は4年目に突入した。ザイーフはムジャヒディーンが難民キャンプを出てアフガニスタンに向かい、一部は負傷して戻ってくるのを見た。しかし、戻らぬ者も多かった。彼の親類も多くが代わる代わるムジャヒディーンの前線に出向いた。

(脚注：「前線：戦いの起きる場所。カンダハール周辺の広い範囲で戦いは繰り広げられ、前線は常に変動した。戦闘員は基本的に少人数に分かれ前線ごとに配備された。」)

(脚注：「代わる代わる：ムジャヒディーンは指示に従って前線に赴くが、しばらくすると撤退して、パキスタンの家族などのもとに帰る。静養して傷を癒やし、再びアフガニスタンに舞い戻るのだ。似たような戦法をカルザイ政権への敵対集団（ターリバーン）も使っている。だからと言って、今の問題がパキスタンにその根を持つと述べているのではない。」)

モスクでは、ムッラーがジハードについてザイーフたちに説教した。

(脚注：「ジハード：訳しにくさで定評のある単語。元々のアラビア語の意味は、“奮闘”、“尽力”、“精進”など。そのため、文脈次第で別の物を意味する。あるときは、悪への傾倒を避ける奮闘。またあるときは、イスラームの法基準に沿って罰せられた者への戦争を指す。ボネイの著作『ジハード』(Jihad: From Qu'ran to Bin Laden/R.Bonney)などに詳しい。)」

すると興味が高まり、他の若者同様、参加したくなった。「アッラーへの義務を果たし、神の無いロシア人たちから我が祖国を解放したいと欲した。しかしそこへ行く金が無い。」ザイーフの親類も教師も、彼がそんな「奮闘」に加わるのを許さなかった。ジハードの考えには賛同しても、その息子たちの1人が命を危険にさらすのは嫌だった。

そこで、手に入る金すべてを貯金した。すると3か月で100パキスタンルピー

(脚注：それだけあると当時100キロの小麦粉か10キロの食用油を買えた)

が貯まった。親類にも友人にも告げず、ザイーフはこの金を手にアフガニスタンへと旅立った。15歳の少年は「自らのジハードを開始したのだ。」

(2023年3月25日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**)を紹介する第4弾。今回はその第3章「聖戦」から抜粋・翻訳する。



1983年夏、15歳のザイーフ少年はパンジパイの難民キャンプを後にした。国境の町チャマンまではバス。そこでカンダハールに向かう少人数の集団に紛れ込んだ。「真夜中に密輸ルートを歩き通した。国境に、しるしなど無い。いつアフガニスタンに入ったのか分からなかった。ただ嬉しかった。」結局2泊3日歩き通して、カンダハールの近郊パシュモルの谷に到着した。

その地域は戦場となって既に3年。優れた火器と空からの支援が頼みのロシア兵を相手に、地形を熟知し機動力に富むムジャヒディーンは、場所を変えつつゲリラ戦を挑んでいた。あとで知ったことだが、敵はこの手の戦いを得意とするスペツナズ（ロシアの特殊部隊）も投入していたらしい。「だが、それが戦況に影響したかどうかは分からない。」

アブドル・ラジクなる司令官が谷での戦いを率いていると知り、その部隊に加わった。最初は良き司令官かつ良き男だと思ったが、すぐにその正体に気づいた。「彼の本当の目的は自分の土地と財産でしかない」ことに。その上、2か月間配下にいたにも関わらず、戦いに出されたのはたったの2回。普段はラジクやその部下たるムジャヒディーンたちの身の回りの世話を受け持った。

毎週1度、ザイーフは銃を掃除し、時おり標的訓練にいそしむ。確かにラジクとその部下たちのもとで最初の「聖戦」を味わった。兵器の取り扱い方法や、戦地での身の処し方を習った。しかしすぐに幻滅した。「聖戦をしようとアフガニスタンに来たのに、気がつくや他人の世話という雑事をしていた。」

まだ15歳の少年は、勉強もしたかった。「ラジクの部下には教師がいなかった。だから自分が武器の取り扱い方法以外にも身につけていないことに気をもんだ。」そこにターリバーンが登場

する。その語の意味は「学生たち」であるから、向学心を持つザイーフが彼らに惹かれたのは無理もないだろう。

ネルガムという村にターリバーンがいて戦っていると知った。だがその村には親類が多く、中にはターリバーンに加わった者もいた。見つかりと家族に報告され、間違いなくパキスタンの難民キャンプに引き戻される。躊躇したザイーフだが、ここでターリバーンの魅力を列挙する：

- その頃ですら、ターリバーンは人々の噂の的だった。
- 他のムジャヒディーンから一目置かれていた。
- ターリバーンの法廷に紛争解決を託す者や、助言を求めて来る者もいた。
- 紛争解決能力は高く、パシュモルの谷のほか支配各地に刑務所を備えていた。

「聖戦は単に戦うだけではない。我々の考えでは、正義の規定に加えて強い教育的視点が必要なのだ。」そう述べたあとザイーフは、彼らの特質を次のように表現している：

「前線で戦うムジャヒディーンのほとんどは、同じ仲間の集まりだった。ほとんどが同じバックグラウンドを持ち、同じ部族で、同じ家族で、はたまた同じ地域の出身だった。ターリバーンは違った。バックグラウンドがそれぞれ異なる宗教学者と学生の集まりだった。普通の同盟や派閥を超えていた。戦う原動力はジハード（聖戦）への深い宗教的確信と神への信頼だった。存在する唯一の理由がアッラーだった。方や、他の多くのムジャヒディーンは金と土地のために戦っていた。」（下線ママ）

逡巡したのも一時、まだ夏が盛りの内にザイーフはネルガムへ向かい、ターリバーンに加わった。何人かの知り合いがいて、密告されないかと不安だったが、学習しながら戦えるという興奮が勝った。

だが、その喜びも一瞬だった。ネルガムに来て数日と経たないうちに、ソ連軍とアフガン陸軍が村を包囲した。火器と空襲が夜を昼に変えた。村は瓦礫と化し、死が至る所にあった。無数の葬儀で悲しみに歪む男と女の顔をザイーフは今もおぼえていると言う。最後まで残ったわずかな住民たちも村を去った。その家や畑にロシアの飛行機がまるで水を注ぐかのように、爆弾を降らせた。

ターリバーンは敗走し、ザンジャバードへ。だが、ソ連軍は全地域を落としながら前進し、戦いの舞台はザンジャバードに移った。わずか10日ほどの戦いは、何百人ものムジャヒディーンと住民が戦死してソ連側の圧勝。その勢いで敵はパシュモルへと転戦した。ザイーフら生き残ったムジャヒディーンはその後を追う。この戦記で、ザイーフが「ターリバーン」と「ムジャヒディーン」を同義語として扱っているのは興味深い。

さて、そのパシュモルも2週間で陥落。「ザンジャバードとパシュモルの戦いは、ソ連とムジャヒディーン間の戦争の典型例だ」とザイーフは解説し、その特徴を次のように述べている：

- ムジャヒディーンは常に兵数とその熟達度で劣り、年代物の武器に頼らざるを得なかった。しかし、ゲリラ戦を展開し敵を出し抜いた。

- 相手は不動の第40陸軍（脚注：8万5千の空陸混成兵からなるソ連の侵略軍で、ソ連の正式資料によると「限定的即応部隊」）

- ムジャヒディーンは補給路と撤退路を確保し、1か所で敗れても各地を転戦して力を回復し、最後は元の前線に戻って抵抗する。「ターリバーンが今（2010年当時）やっているのとほぼ同じ戦い方だ。」

ザイーフがターリバーンを好んだ理由は、その教育システムだった。そこでは、お互いが教育しあう。入隊して2、3年も経てば、普通の文盲の「ムジャヒド」（聖戦士）が立派な「ターリブ」（学生）になれた。ザイーフは前線で戦い方を学びつつ、また戦友に読み書きの基礎を教えた。「我々はターリバーンで、これが我々の道だった。」逆に学びたくない者は他の司令官の下へと去った。

1年後、ザイーフはパキスタンに戻るよう命令された。戦車砲で撃たれ脚をケガしたムッラーを退避させるのが任務だった。この頃になると、国境越えは車などまったく使えないくらい危険になっていた。頼れるのはラクダ。辿るのは密輸ルート。その山道に行くのは何もムジャヒディーンだけではない。住民、家族、外国人、ジャーナリストも旅の仲間だった。

ラクダに乗った5人がゆっくりと国境を目指す。キャラバンのリーダーはザイーフ。日没までにさらに2人のムジャヒディーンがその列に加わった。彼らのラクダは大きな荷物を運んでいたが、中身が何なのかは決して言わなかった。やがて、ド・ラレーという場所に着いた。

そこで大変な情報を得た。わずか2日前にその先でロシア人が待ち伏せをし、30人と7頭のラクダを殺したと言うのだ。ザイーフは「まだロシア人はいる、正しく準備しないと同じ罠に落ちる」と確信した。別ルートは時間がかかりすぎ、ケガしたムッラーの命が危ない。進めば、待ち伏せに遭う。しかも武器が無い。

その夜、ド・ラレーを出たときキャラバンの規模は30～40人に増えていた。ゆっくりと罠の待つ道を進んでいると、例のムジャヒディーンの1人がこう持ちかけて来た、「あなたにカラシニコフ3丁とRPGを1つあげよう。残りのカラシニコフ2丁は我々が使う。」あの秘密の積み荷は武器だったのだ。

そこでザイーフはキャラバンを二手に分けた。ザイーフ側はムッラーと元からの同行者たちの大半。2人のムジャヒディーン側についた者もいた。密輸ルートには2つの脇道があったので、それぞれ別の道をとることにした。

しばらく行くと、約1キロほど先からRGPの飛翔音と機銃掃射の音が聞こえた。ロクサナ（ロシア軍の照明弾）があたりを眩しい夏の日に変えた。数機のヘリが空に舞い、ロクサナの発射に合わせて爆撃する。パキスタンから来た別のキャラバンが襲われたのだ。ザイーフたちは見つからぬことを祈ってただ身を隠した。

やがて静かになったので、別の脇道を通して、その難所を越えた。途中いくつかの村をたどり、別の待ち伏せの危険を回避しつつ、国境の町チャナンに到着した。「旅のあいだ何もなかったかのようにだった。我々はあの恐怖をまるで遠い記憶のように感じた。」

ザイーフは急ぎムッラーを病院へと運んだ。不運にも彼のケガは感染症を誘発していた。すぐにクエッタの赤十字病院へ転院させたが、やがて殉教者として亡くなった。

一方、ザイーフには家族に会うほかすることも無かったのでパンジパイのキャンプに足を運んだ。すると、クエッタに移ったと言う。そこで懐かしいキャンプで1泊した後、クエッタに向かった。時は1984年の夏。彼は13か月、祖国アフガニスタンにいた。久しぶりに会った家族はザイーフが家出したことを咎めるのも忘れ、彼を喜びで迎えた。

(2023年4月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**) を紹介する第5弾。今回はその第4章「ISIの教え」から抜粋・翻訳する。

15歳で難民キャンプを後にしたザイーフは、翌年パキスタンにいる家族のもとに戻って来た。ただし新しい暮らしの舞台はクエッタ。キャンプを出た大勢のアフガン人が暮らす都会だった。そこで学生に戻り、マドラサに通い始めた。

やがて1年が経ち、17歳になったころ、彼は決断を迫られた。「祖国でのジハードに参戦せよ」と檄を飛ばす学友に賛同するか。はたまた「お前がパキスタンに留まるなら、家も妻も仕事も世話しよう」と説得する家族に従うか。

結局「ジハードの呼ぶ声」には逆らいきれず、またも内緒で家を出た。ところが彼ら「小さなムジャヒディーン」の一行は、直にアフガニスタンを目指さず、まずはパキスタンのザンガルにある難民キャンプにやって来た。そこには、ジハードの前線に兵士を送り込むとあるムジャヒディーン一派の基地があった。

ところでムジャヒディーンはパキスタンとアフガニスタン両国において、どう関連しつつ戦闘を維持したのか？この疑問をザイーフはその経験から、以下のように解き明かしてくれる：

- ムジャヒディーンの司令官は、アフガニスタンとパキスタンを行き来しつつ、その時間をほぼ均等に両国で費やす。
- 組織のナンバー2は「マネージャー」として機能し、その自宅がムジャヒディーンのパキスタン（ザイーフが属した集団の場合はザンガル）基地である。
- 前線の維持に欠かせないのが、政治的・財政的援助で、そのた

めには他のムジャヒディーン集団および政党との関係を確立せねばならない。(パキスタン側の仕事)

●実際の frontline における戦果は、カンダハールの「地で」戦う司令官たちの働き如何による。(アフガニスタン側の仕事)

●パキスタンとアフガニスタンの両輪が 1 つのユニットとして複雑に機能して、資金と武器を集め、コミュニケーションを維持し、兵員を動かし、新たなムジャヒディーンを調達・訓練する。

さらに、彼は初期のジハードの弱点をこう解説する：

●ロシアのヘリや戦車には太刀打ちできない。ましてやミグ戦闘機や長距離爆撃機が出てくればお手上げ。

●中でもロシアのヘリは脅威で、難攻不落のムジャヒディーンの溪谷基地をも一掃できる。

そこで登場するのが ISI※である。

※脚注「ISI：正式名称は統合情報局で、パキスタン軍随一の諜報部門。アフガニスタンのムジャヒディーンに資金と武器を提供することに特別熱心で、政治的各方面へのパキスタン軍の強い介入を示す代名詞となっている。」

ISI は 1980 年代初頭に、ムジャヒディーン向けの特殊兵器教練を開始した。つまりザイーフによると「我々に約束された新兵器はロシアの戦車を破壊し、そのヘリを空から撃ち落とすと期待された。」

司令官がその教練生※にと選んだのが、ザイーフだった。そこでクエッタに戻り、ある男の事務所に参上する。

※脚注「元 ISI 局員によると、約 8 万のムジャヒディーンが 1980 年代を通じてパキスタンで教練された。1983 年末には 2 カ所のキャンプで 200 人を教練していたのみだが、翌 84 年半ばには、1 度に千人を教練するシステムを立ち上げ、87 年には、7 つのキャンプを同時に運営した。」

そこはアブドゥル・ラスル・サイヤフの事務所。イテハデ・イスラミ※を組織したばかりのサイヤフがムジャヒディーンと ISI の間を取り持っていたのだ。

※脚注「イテハデ・イスラミ：正式名称はアフガニスタンの自由のためのイスラーム連合で、サイヤフが 1981 年にペシャワールで旗揚げした政党。当初は各政党を繋ぐ連合組織として意図されたが、1980 年代ペシャワールにおける政治的野合の泥沼の中で頭角を現し、正統性を確立した。」

「サイヤフが ISI から支援、武器、教練を引き出すためのキーパーソンであることは当時の常識だった。」こう記したあと、ザイーフはアフガニスタンとパキスタンの違いについて詳述する：

- カンダハールの前線においては、どの派閥に属するかなどまず問題にされない。
- ムジャヒディーンは何があろうと助け合う。
- 特にターリバーンもしくはターリバーン風の前線では、人々が同朋兄弟として協力することがよく知られている。
- 派閥や部族がもつて揉め出すのは、後のジハードにおいてのみ。
- ところが、パキスタンでは派閥政治がすべてだった。

さあ、パキスタン政府のトラックがサイヤフの事務所に到着し、下りてきた役人が集まっていたザイーフたちを荷台に詰め込んだ。窓が無く、どこに向かっているのか分からない。山道に行くこと約 3 時間。皆が山間の秘密基地に着いたと思った。しかし出てみると、期待に反してそこはバザールと難民キャンプに挟まれ見慣れたトラットの町だった。

ザイーフの前線から参加したのは 12 人だったが、中庭には 80 人を超えるムジャヒディーンが立っていた。教官はパシュトゥー語でしゃべったので、北から参加したムジャヒディーンのために、皆でダリ語に翻訳した。教練はこんな具合：



- 着いた初日に、いろんな武器を見せられる。
- 翌日から教練が始まるが、最初の 10 日間は理論を学ぶ座学のみ。
- それが終わると 10~12 人のグループに分かれ各グループが 1 個の武器を与えられる。
- 最初に実際手にしたのは多弾頭ロケットランチャー BM12・・・アルミニウム製、軽量高性能、中国製、射程 8 キロ超。
- 次に、扱う武器は BM14 へとグレードアップする、などなど。

こうして初期教練は 1 カ月で終了。次にトラックに乗せられ走ること 6 時間。今度は砂漠の射場に着いた。ヘラート、クンドゥズ、ジャララバード、ガルデズ、カーブルのムジャヒディーンも集結した。ここで最後の実弾訓練を行い、評価される。ザイーフのカンダハール組は芳しい成績を残せず悔しかったが、前線は待ってくれない。クエッタに戻ると即アフガニスタンに向けて出発した。

途中の村でアラブ出資の組織がトラクターを 1 台提供してくれた。23 人がそれに乗り込み、2 日後、例によって夜闇に紛れて国境を越えた。やがて、またしてもロシア兵の待ち伏せにあった。ザイーフは腰を撃たれ大量に出血した。途中気を失いながらも数日かけて逃げおおせた。出発からわずか 1 週間。特殊教練の成果もほどほどに、ザイーフはパキスタンに帰還した。

(2023年4月15日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaef/2010**) を紹介する第6弾。今回はその第5章「苦い絵」から抜粋・翻訳する。

1985年に試みた自身2度目の越境攻撃で負傷し、我らがザイーフはあっさりと亡命先のパキスタンに逃げ帰った。だが、行ったり来たり戦いのこそがムジャヒディーンの本骨頂。その上、ザイーフは体力と気力に満ちた10代の若き戦士。そんな彼は仲間たちとともに、結局ソ連を敗走させるまでカンダハール州で戦い抜くことになる。だが、その戦いの情景はあまりにも苦いものだった。

悲しい統計を著者は第5章の冒頭で紹介している：

「ソ連が送り込んだのは合わせて10万の兵士。対したムジャヒディーンの本死者は約100万※を数えた。」

※脚注：「アフガニスタンの戦死者に関するある統計（カリディ、1991年）によると、1978年から1987年までの9年間にアフガン国内で生じた不自然死の総数は87万6825件に上る。また1995年に出されたWHOの統計では、戦争が原因の身体障害者数を'150万弱'と見積もっている。」

特に自ら参戦し活躍もした戦争末期の数年間※においては、1度の戦闘に数千のムジャヒディーンが加わる場面もあって、ソビエト軍とそれに与するアフガン政府軍の残忍な行動が目立つようになり、絶え間なく空爆を仕掛けてきたと言う。

※脚注：「1985年の1年だけで、米国はムジャヒディーンに2億5千万ドルを提供したが、その額は、1980年から1984年まで、つまり過去5年間の援助額の合計と同じだった。その結果1980年から1992年までの間に米国は総額20億~30億ドルをムジャヒディーンに与えたことになる。またアラブ系の資金提供者からも、ほぼ同額が与えられた。」

以下この章では「ザイーフの戦争」が活写されるのだが、お馴染みの有名人も登場し、なかなか興味深い。

### 【カレーシュ包囲網突破】

神出鬼没のムジャヒディーンに対し、ロシアは幾重ものセーフティゾーンで取り囲み、退路を断って殲滅を目論む。カレーシュでどうにか保持しているザイーフたちの前線だが、このまま援軍が無ければやがて陥落する。包囲網の外には別のムジャヒディーンがいるが、連絡手段がない。そこで敵線を突破する伝達者が必要となった。司令官はザイーフを指名した。

敵線の裏に出て、秘密裏に仲間を集め、後ろからロシア兵の不意を突き、蹴散らして隙を作り、本隊の包囲網突破を可能にする。だが、まずもって「どうやれば外に出られるか？」そこで農民に扮し、村人のバイクに乗せられて、ロシアの前線へと向かうことにした。

ロシア側の検問所で待っていたのはとあるアフガン兵。カラシニコフを突きつけ「見たぞ、村でお前が農夫に化けるところを」と探りを入れる。しらを切るザイーフと村人。問答無用とばかり、男はザイーフの腕にペンを突き刺した。血が吹き出る。しかし口は割らない。体中をまさぐっても兵隊であるとの尻尾は何も出ない。とうとう男は根負けし、通行を許した。

バイクを飛ばしながら村人が肩越しに言った、「あれがビスミラー※です。ここ数か月で35人が後ろから撃たれて死んだが、ほとんどが奴の仕業なんです。」

※脚注「ビスミラー：当時その残虐さで恐れられていたアフガン兵。現在（2010年）もその記憶はカンダハールに根付いている。」

その日のうちに目的の村に着いた。そこで3日かけて200人のムジャヒディーンをかき集めて本隊の援護に向かった。背後から不意を突かれたロシアとアフガン政府の混成軍は2つに分断され

た。武器を捨てて逃げ出す敵兵もいた。こうしてザイーフの活躍で、カレーシュの包囲は解かれた。

### 【サンジサール塹壕戦】

劣勢のロシアはサンジサール目がけて総攻撃に出た。地域のムジャヒディーンが一致団結してそれに対抗する。3日間絶え間なく、ロケット砲、地対地砲、空からの攻撃が続いた。戦闘になれたザイーフたちですら恐怖した。戦車に続いて、陸戦隊が侵入してくる。圧倒的な物量を誇るロシア兵とアフガン兵の混成軍をムジャヒディーンが迎え撃った。

4、5日後、敵は包囲網を完成させた。するとムジャヒディーン側は食料すらも乏しくなった。ロシア兵は徐々に包囲を狭めて来る。陣地の周囲に塹壕を掘った。その塹壕から姿が見えるところまで敵が近づいてきた。夕方近くには距離が100メートルにまで縮まった。そして衝突。わずかな間だったが、戦場は死体で埋め尽くされた。ムジャヒディーン側の戦果は機関銃が2丁といくつかの小型兵器。北側の塹壕を守っていたムッラー・モハンマド・オマール・アークンド※に、機関銃の1丁が託された。

※脚注「ムッラー・オマール：1962年生まれと伝えられ、ウルーズガーン州出身。1980年代のジハード（聖戦）においてはハラカテ・エンケラベ・イスラミ（イスラム革命運動）と共に戦っていたが、1994年に、生まれたばかりのターリバーンの指導者に選ばれた。（2010年時点では）広く存命中と信じられ、おそらくパキスタンかアフガニスタンのどちらかで暮らしているとされる。」

次の敵襲は「まさに手と手で競う戦いとなり、手榴弾が頭上を飛び交った。」ムジャヒディーンの1人がそれを空中でキャッチし投げ返す。手放す前に爆発して戦死した者もいた。敵の空爆もあって、ムジャヒディーンは4人の戦死者と4人の負傷者を出した。その負傷者の1人がムッラー・オマールだった。

彼はザイーフから20メートルほど離れたところ、壁の陰から味方を援護射撃していた。ちょうど角から顔を出したとき、近くに

爆弾が落ちた。破片が顔に当たり片目をえぐり出した。すぐに室内に運び込む。そこにはすでに負傷した先客がいたが、どんどんとその数が増えていく。「だが、誰ひとり戦意を失う者はなかった。」ムッラー・オマールは自分の手で負傷した目に包帯を巻いた。

その夜、生き延びたムジャヒディーンたちは素敵なパーティーを開いた。皆が何かを叩いて打ち鳴らす中、ムッラー・オマールが歌い出した：

私の病気は、手の施しようが無い  
おー、花のような我が友よ  
私は生きられぬ、あなた無しでは  
おー、花のような我が友よ

その夜の感動を反芻してザイーフはこう記す：

「神よ崇められよ！何というムジャヒディーン間の兄弟愛であることか！世事や命に執着せず、生きる意図は純粹で、全員が殉教者となることを目指した。我々が互いに抱き合った愛と尊敬を今になって思い返すと、まるで夢のように思える。」（下線ママ）

翌日、部隊はザンジャバードへ逃げ出し、2、3日休息した。その間、ロシアとアフガン政府の混成軍はパシュモルへと転戦した。パシュモルのムジャヒディーンが助けを求めてきたので、ザイーフの部隊は敵の後を追った。ムッラー・オマールも参戦を希望したが、説得されて治療のためパキスタンに帰還した。

### 【アルガンダブ包囲】

南アフガニスタンでロシア軍が仕掛けた最大の戦闘。山を越えて4千台の戦車が侵攻してきた。肥沃な緑の谷で、5週間を超える戦いが繰り広げられた。各地からムジャヒディーンが参戦し、殉教者は数百を数えた。ザイーフの隊だけでも、70人が戦死し

た。ターリバーンもやって来て、ムッラー・ナキブ※が率いる軍団と共に戦った。

※脚注「ムッラー・ナキブ：ジハードに加わったことで、特にアルガンダブ地域では今でも高く評価されている司令官。その軍団は勇猛果敢さで知られるが、同時にならず者で残虐だとの批判もついて回る。」

最後はロシア軍がメインの基地がある空港まで敗走した。すると戦いは、空港基地へと至るルートを巡る攻防戦となった：

#### <ロシア側>

- 高速で移動可能な幹線道路に検問所をいくつか設けた。
- ヘリで定時パトロールを行い怪しい動きに目を光らせた。
- 夜間単独で移動する車両は必ず停止させ、場合によっては銃撃した。
- 山間の密輸ルートを使ってアフガニスタンとパキスタンを行き来するムジャヒディーンに対しては、待ち伏せ作戦をとり、しばしば空挺隊による攻撃も実施した。

#### <ムジャヒディーン側>

- 検問所を一つずつ制圧し、敵を外へと追いやった。
- ターリバーンが活躍し、制圧した地区では独自の司法制度を導入した。
- 裁判所が機能し、コミュニティ内の紛争を解決していった。

このように地元民の支持を得た兵力は強かろう。そこへ持ってきて、極めつけはムッラー・ネック・ムハンマド・アークンドの活躍である：

- この男はムッラー・オマールの親しい友人。
- 自転車のタイヤチューブを使って呼吸をしつつ、道路脇を流れる川に潜り、戦車隊が通ると、RPGで攻撃する。
- 彼は「たとえ死んでも、ロシアにこの道は使わせない」と豪語していた。



- あまりの被害の大きさに、ロシアは彼を殺そうと空から攻撃を仕掛けた。
- そのため結局は爆死により殉教し、その遺体は遺言通り道路脇に埋葬された。
- それからわずか3日後にロシア軍は空港基地へと追い込まれ、彼らがその道を通うことは2度となかった。

### 【カンダハール空港攻防戦】

「私にとってこれほど強烈な戦闘はなかった」とザイーフに言わしめるのが、1988年夏のカンダハール空港襲撃である。この戦いでムジャヒディーンは空港から逃げようとするロシア軍に引導を渡したことになる。とは言え、その抵抗は凄まじく、58人からなる部隊を率いるザイーフも相当苦しめられた。

時はラマザン※であった。

※脚注「ラマザン：ラマダンとも呼ばれる。イスラーム暦におけるある月の名称で、ムスリムはその間、日中は断食を強いられる。しかしこの義務には例外もある。例えば病人や旅人の場合がそれに当たる。」

ウレマー※はザイーフに断食を止めても良いと助言したが、彼自身が断食を行っていないときに死ぬのを嫌がった。すると空港襲撃において彼は、指揮する58人のうち50人を失ってしまった。ただし原因は断食ではなく、強敵の存在だった。

※脚注「ウレマー：文字通りの意味は‘知識を持つ者’で、宗教学者を指す（本来的にはスンナ派の聖職者）。つまり宗教‘科学’（クルアーン、スンナ、ハディースなど）を学んだ者。」

その敵こそが、あのドスタム※の部下たちだった。

※脚注「アブドラシード・ドスタム：ウズベク人司令官で、アフガニスタンの戦争を通じて何度も寝返ったことから評判が悪い。1980年代は、ソ連に味方する専らウズベク人からなる軍閥の首魁だった。ところが最後に寝返ってムジャヒディーン政権で地位を授かった。彼の兵力は1980年代のアフガン軍事力の中で最も有名かつ恐れられていた。現在（2010年）も、カーブルおよび北部においてアフガン政治の要職についている。」

またロシアにとっては、この空港が守るべき最後の砦。不退転の決意で応戦したことだろう。その結果、多くのムジャヒディーンが犠牲となった。そんな中、特に若いターリバーンが命を落とすことに心を痛めた司令官がいた。その名はハッジ・ラティフ・アークンド。この戦いにおけるムジャヒディーン連合のトップで、西側のジャーナリストには「カンダハールの獅子」として知られていた。

「ターリバーンとウレマーこそが、我が国の精神的支柱であり、守られねばならない」と宣言した彼は、続けてこう嘆いた、「私の前線にいる戦士のほとんどは、ハッシッシをふかし、髭を剃り、イスラームについてほとんど何も知らない。私が許せば、ムジャヒディーンの敵に平気でなるだろう。ここにいさせているから、政府軍に加わらないだけの連中だ。それに比べて社会におけるターリバーンの役割は大きい。」

その後ある作戦会議で、実際のターリバーンにまみえたハッジ・ラティフは、「部下たちをターリバーンに変えて見せよう」と心から誓った。そして会議から帰るや否や、部下の散髪や着替え、そして教育に乗り出した。その結果どうなったか？

ザイーフが伝え聞いた所によると。ある女性がハッジ・ラティフの行動を見て、こう批判した：

「そんなことをしても、ターリバーンにはなれないわ。放っておきなさい。彼らは若いし、欲望もある。彼らに残された命はあと2日だけよ。幸せに死なせるべきです。」それを聞いたハッジ・ラティフは即座に先の決断を撤回した。

なるほど、ターリバーンは1日にしてならずか・・・

この示唆に富むエピソードに対しザイーフは「神はより良きことを知り給う！」との1文を添えて、第5章を締めくくる。



(2023年4月25日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**) を紹介する第7弾。今回はその第6章「撤退」の前半から抜粋・翻訳する。

長かった戦いだが、ザイーフによると「80年代末になって、我々はやっとテーブルをソビエトに向けひっくり返した。」犠牲の多さに耐えきれず、モスクワが撤退を決めたのだ。その理由の一つは「ムジャヒディーンが戦場だけでなく国際舞台でも優位に立った」ことだった。

それを可能にしたのは：

- 主権国を暴力で侵したロシアに対する国連の度重なる非難
- パキスタンから「反対側」へ潜入し、戦争を目撃したジャーナリスト
- 欧米に生まれたアフガニスタンを支援する組織や社会的風潮などであった。

ムジャヒディーンは多額の援助金を受け取り、高性能の武器を手に入れた。80年代半ばでは既にロシアに対し優勢だったと言う。片やソ連は国際的に孤立し、国内でも市民や退役軍人たちが、政府に内側から圧力をかけ始めていた。

アフガニスタンをソ連の第16共和国にしようとしたバラク・カルマル大統領※1が辞任し、クレムリンの傀儡であるナジブラー※2がその後任となった。彼は前任者よりも力で劣り若かったが、さすが Khad※3の元長官だけあって寝技に長け、大統領へと上りつめた。

※1 脚注「バラク・カルマル：1929年カーブル生まれ。ソビエトのアフガン派兵に合わせて帰国し、79年12月から86年11月まで大統領職。96年、モスクワにて没。」

※2 脚注「ナジブラー：1947年カーブル生まれ。86年11月から92年4月まで大統領職。共産主義政党アフガニスタン人民民主党（PDPA）の重要メンバーでパルチャム派に属する。96年、ターリバーンによるカーブル掌握に際し、拷問の末処刑され、その遺体を公衆の面前にさらされた。」

※3 脚注「Khad：アフガニスタン国家保安局の別名。ナジブラー大統領がWADと改名したが、今でも諜報機関である国家保安局の通称として人口に膾炙している。」

そのナジブラー期に、ロシアはアフガニスタンから兵力を引き揚げることを発表した。それにザイーフは大喜び。「聖戦は終わったようだ。我々は勝ったのだ。生きているうちにソ連が撤退するとは思っていなかった。」彼にとって戦うことは死への誘いだった。「死を望みさえもした」と強弁する彼にとっても、この勝利はありがたかったようだ。

しかし、勝利が平和を呼ぶという単純な話ではなかった。「違うグループが違うゴールを目指し、ムジャヒディーン間の緩やかな同盟が見る見る揺らぎ出した。次に起きたことは戦いの成果をぶっ壊し、ムジャヒディーンと聖戦そのものの名誉を辱めた。」

戦局は次のように変化した：

撤退の発表→ロシアによる軍事作戦の数が急激に減少

→山岳部でも砂漠地帯でも、彼らのパトロールがほとんど停止

→すぐに都市部や幹線道路からも姿を消し、空港と滑走路にだけ軍備を集中

→そこから退路への空爆だけは引っ切りなしに続けた。

そんなロシア軍の撤退は「村々の生活を格段に向上させると共に、新たな問題も生み出した。」1990年※に米国はムジャヒディーンへの資金援助を減額し始めた。金にありつけなくなった司令官たちは、他の金づるを求めて右往左往した。「ムジャヒディ

ーン戦士に金を払っていた司令官もいて、金の切れ目は部下の喪失を意味したのだ。」

※脚注「1989年10月から翌90年10月までの1年間で、CIAの隠密アフガン計画への秘密の予算割り当てを、米議会は約60%減額させ、計2億8千万ドルにまで落とした。(2004年、コルによる)」

活動を続けるためにナジブラーの新政府に尻尾を振った司令官もいた。大統領はここを先途と、自慢のKhadに彼らの部隊を登録した上で、金を与えた。こうしてムジャヒディーン多くは政府の諜報部門の出先機関に成り下がり、「もはや政府にとっての脅威ではなくなった。」

政府の犬となったムジャヒディーンは、奇妙な戦争ごっこに明け暮れた。それは手の込んだ芝居で、次のような筋書きだ：

- 当時のカンダハール州知事ヌール・ウル＝ハク・ウルミ※が、トラック何杯もの金をいくつかのムジャヒディーン集団にばらまく。
- 条件は、お互いが戦い合っていると見せかけること。
- 戦闘にあたっては事前に「お知らせ」を交わすので、死傷者は1人も出ない。
- その金の出所はナジブラーを操るソ連だった。

※脚注「ヌール・ウル＝ハク・ウルミ：カンダハール州の出身で、元共産軍の陸将。1980年代末の政権移行期間に州知事を勤めた。ナジブラーが打ち立てた『従えば現ナマ』方針に沿って、巨額の資金をばらまき、好戦的だったムジャヒディーンを骨抜きにした。」

これはムジャヒディーンの変節である。こんなことでは求めていた「イスラームによる政権」など絵に描いた餅にすらならない。ザイーフはあきれて、ムジャヒディーン全般と「我々のように本来の方針通り共産主義に対し聖戦を挑み続ける前線部隊」との間に一線を画す。こうして「ターリバーン」とその他のカンダハール系ムジャヒディーンは決別した。

(後付けの分析は以上。)

とは言え、1988年8月、最後のソ連兵がカンダハールを後にしたとき、ザイーフの心は晴れかつ躍った。そう、文字通りアッタンを踊った。皆が古いストーブの蓋を叩いてリズムを奏でた。歌い出すムッラーもいた。「イスラームによる政府」を打ち立て、死者を弔い、孤児を食べさせ、未亡人を援助できると夢見た。だが、実際に登場した新政府は別物だった。

ナジブラーによるラジオ放送：

- 平和、安全そして兄弟愛を語った。
- 聖なるクルアーンから予言者ムハンマド（神に平穩あれ）のハディース※の数節を引用した。
- 和解への道はまず許すこと。真の和解はその先にしかない。
- 起きたことを忘れ、生じてしまった敵意や衝突を記憶からブロックしよう。
- 「君は何もしなかったし、私も何もしなかった」が彼の常套句。
- 私に加わり、共に政府を確立しよう。

※脚注「ハディース：予言者ムハンマド（PBUH/彼に平穩あれ）の言行録。一連の証拠（アスナッドと呼ばれる）をもって特定され聖文化されている。口承で伝わったイスラームの神髄で、後の宗教学者たちが収集し一定の書式に従い書き留めた。」

確かによい話を聞いた。しかしザイーフたちは「新大統領が弱く、その政府には力がなく、永続させる援助も来ない」ことを知っていた。

さて、そこはさすがに学生を意味する「ターリバーン」。ロシア人がカンダハールを離れると、多くはザイーフのように宗教の研究を再開した。もちろん治安活動は続け、ときに僻地においては共産主義者の残党どもと戦いつつ。

仲間たちとカンダハール近郊に暮らし、住居にマドラサよろしく人々を集めた。そこで教えながら学問に勤しむ。そして稼ぐため

に、建築現場で働く。やがて2台のクルマを所有し、さらなる収入を求めてトラクターもレンタルしたと言う。学生でありつつ、いっぴしの事業家でもあったようだ。

ところが先述の変節したムジャヒディーンにとって、正論を説くターリバーンは目の上のたんこぶ。やがて、事件が起きた。

(2023年5月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**)を紹介する第8弾。今回はその第6章「撤退」の後半から抜粋・翻訳する。

ターリバーンのリーダーたちがカンダハールにある穀物貯蔵庫で会議※を開いた。ロケット弾や迫撃砲の傷を残しながらも、街の西部郊外に今(2010年)も建っている倉庫だ。ロシアが出て行った後、ターリバーンがほかのムジャヒディーンの派閥と街をどう分割するかを討論する会議だった。

※脚注「会議：当時のニュース記事が残されており、それによると1992年4月14日に開かれた。」

ちょうどその時、ムジャヒディーン各集団がカンダハールを目指して素早く進軍していた。彼らはナジブラー政権の側に寝返り、ターリバーンを新行政から排除しようと企んでいた。瞬く間に街は分割。ターリバーンが会議で次の出方を探っているまさにその隙に、倉庫の外では街中が彼らによって分割統治※されてしまった。

※脚注「分割状況：グル・アガ・シェルザイが州知事に納まり、ムッラー・ナキブラーが陸軍基地を掌握。アミール・ラライは市内のイード・ガー門まで迫り、紡績工場と織物職人の工房群を手に入れた。ハッジ・アフマドが空港、ウスタズ(師)・アブドル・



ハレームが KhAD の事務所・警察署・刑務所、サルカテブがバグエ・プル地区（カンダハールの約 10 キロ西）と穀物倉庫周辺を押さえた。」

会議の場を一旦離れ、所用のためバイクに乗って市外と向かったザイーフは、何十人もの武装集団が検問所を突破し、市内になだれ込んだのを目撃した。急いで倉庫に戻り、会議に乱入した。居並ぶ司令官たちに叫ぶ、「ここでのんびりしている間に、街は同盟軍に奪われたぞ！」この静かなる進撃に気づいた司令官は誰一人いなかったのだ。ターリバーンが、事態を收拾しようと街へと出向いたときは、もう遅かった。

対ロシア戦において、命を賭けて戦い、何千もの犠牲者を出し、「ジハードの最も重要な柱の一つだった我々ターリバーンは裏切られた。」ようやく確保できたのは、空港のそばにある古いロシアの家族向け兵舎※1 だけ。この失態はひとえに故ハッジ・ムッラー・ヤー・モハンマド・アークンド※2 の責任だった。

※1 脚注「ロシア兵舎：ファミリー兵舎と呼ばれ、政府役人もしくは軍人の家族が暮らしていた。現在では隣に建てられた集合住宅に比べて見劣りするが、まだそこに暮らしている家族もいる。彼らは建物と土地を政府から購入し、居残る道を選んだ。」

※2 脚注「ヤー・モハンマド・アークンド：1980 年代のジハードにおいて、ヒズベ・イスラミのために戦った大物司令官。ターリバーンが政権を取ると、ヘラート州、続いてガズニー州の知事に任命された。しかし 1999 年、会議の最中に殺された。殺害犯は不明で、彼が殺された状況は（多勢が目撃したにも関わらず）ある種の謎となっている。」

こうしてターリバーンはかつての仲間にも裏切られ、その取り分も少なかった。「だが、我々は戦いを続けようとは思わなかった」とザイーフは言う。ほとんどのターリバーンは故郷へ帰り、学業を続けた。「アフガニスタンからロシア人を追い出したという事実だけで満足したのだ。」

ここでアフガンの政況を見ておこう：

- どの地域でもムジャヒディーンの一部が隆盛を極めた。
- ナジブラーは辞任を強いられ、1992 年 4 月 16 日にカーブルの

国連庁舎に亡命。

●2週間後、シブガトゥッラー・ムジャッディディー※1率いる暫定政府をISIがペシャワールに擁立した。

●ムジャッディディーの任期は2ヶ月のみで、その後はブルハヌッディン・ラッバーニ※2が引き継ぐ手はずだった。

※1 脚注「シブガトゥッラー・ムジャッディディー：1925年カーブル生まれ。アフガニスタンとカイロ（アル＝アズハル大学）で教育を受け、1980年代には亡命先のペシャワールにて主要なムジャヒディーン政党の一つを率いた。1992年7月に暫定大統領に就任。カーブルで今も（2010年）、アフガン政治の一角を担っている。」

※2 脚注「ブルハヌッディン・ラッバーニ：1940年生まれで、出身地はファイザバード（アフガニスタン北東部にあるバダフシャーン州）。カーブルで教育を受け、カイロのアル＝アズハル大学に留学した後、1968年に帰国。1980年代ジハードにおける主要政党の一つ、ジャミアテ・イスラミの党首。1992年に大統領に就任し、ターリバーンがカーブルを制圧した96年まで在職。カーブルで今も（2010年）、アフガン政治の一角を担っている。」

ムジャッディディーの大統領就任についてザイーフは「暫定とは言え、たった2カ月とは奇妙に思えた。羊飼いですら4カ月より短い仕事は受けない」とニヒルにコメントしつつ、そのニュースを朗報と捉え、大いに喜んだと言う。それは次のように伝わった：

●ある日、ザイーフはカーブルからのラジオ放送に耳を傾けていた。

●それは以前、ムジャッディディーをISIとアメリカの召使いだと非難した局だった。

●ところが番組の司会は平坦な調子でこう口を切った、「ハズラット・シブガトゥッラー・ムジャッディディー教授閣下はジャブハイエ・ミリ※の党首ですが、このたびアフガニスタンイスラーム政府の大統領となりました。」

※脚注「ジャブハイエ・ミリ：アフガニスタン国民解放戦線。1980年代にペシャワールでムジャッディディーが旗揚げした。ジハードの主要政党の一つ。」

「この瞬間が私の人生最大の幸福だったかも知れない」とザイーフの語気は荒い。1989年のハッジ（聖地巡礼）でメッカとカーバ※を見たこと、結婚したこと、学習及び知識の喜びを知ったこと、アラビア語で書かれた聖なるクルアーンの恵みに触れたこと、後に政府の役職を頂いたことと比べてすらも、「この日の喜びには及ばない」と言うのだから、相当なものである。

※脚注「カーバ：サウジアラビアのメッカに位置する。全ムスリムが日々の祈りを捧げるとき、顔を向ける精神的焦点。ムスリムはイブラヒム（アブラハム）がカーバを建てたと信じている。ハッジの儀式においても大きな役割を持つ。」

ザイーフによると「あのとき私は幸せだった。これでやっと国民の願いが叶ったと。」ところが、その後に録音で登場した大統領本人の演説が「一句一句」彼を絶頂から引きずり下ろした。その極めつけがこれ：

「首都の北西に位置する肥沃な谷パンジシール※1から来た、シャー・アフマド・マスード※2を終身国防相に任命する。」

※1 脚注「パンジシール：カーブルの北にある渓谷地帯。レジスタンスの司令官シャー・アフマド・マスードと関連付けてよく紹介される。民族は主にタジク人。16世紀にはスンナ派へと改宗させられた。サラン峠に近いため、ソ連と戦うには理想的位置にあった。ソ連はこの谷を一度も制圧できなかった。」

※2 脚注「シャー・アフマド・マスード：1953年、パンジシール生まれ。ソビエトに対する1980年代のジハードにおいて、最も有名なレジスタンス司令官の一人。1990年代には政治面、軍事面両方で優れた活躍をした。1992年に国防相。1990年代末は、ターリバーンに対抗して『北部同盟』を組織。『パンジシールの獅子』と称賛された。2001年、世界貿易センタービルへの攻撃の数日前に暗殺された。」

「なぜ大統領は、国防相という要職を州レベルの司令官に任せるのか？ しかも大統領本人が2カ月の期限付き就任なのに、その地位を終身にわたり保証するとは？ なぜ、よりによってマスードなのだ？ ムジャッディディー自身がジハードにおいて神の名のもとに大変苦勞し、多くの犠牲を払った。なぜさらなる苦勞を呼び込むようなことをするのか？」



一緒になって手強い共産軍を蹴散らしたあとだけに、ザイーフの失望は大きかった。聞いているうちに涙が出て頬を伝い、やがて大声で泣き叫んでしまった。一緒にラジオを聞いていたムジャヒディーンが驚いて声をかけた、「この幸せな日になぜ泣くのだ？アフガニスタンは解放され、望みが叶ったではないか。」ザイーフは犠牲となった戦友のことを思うと、この人事が唾棄すべき暴挙と思えたのだ。

案の定、カーブルではマスードとヘクマティヤール※の戦闘が勃発した。前者が首都の全掌握を宣言したが、首相たる後者は認めなかった。「まるで共産政権時代のハルク派とパルチャム派の戦いだっただけだ。」繋がりはないものだったが、概してハルクがヘクマティヤール、パルチャムがマスードを支援した。

※脚注「グルブッディン・ヘクマティヤール：1954年、クンドゥーズ州生まれ。政党ヒズベ・イスラミの党首。ソ連侵攻前はイスラーム主義者の間でのみ有名だったが、1980年代のジハードで広く脚光を浴びた。その間、ムジャヒディーンへの援助から、身に浴わぬほど多くを懐に収めた。1992年5月カーブルで首相に就任。2002年に逃亡。北東アフガニスタンの山中に隠れ、アフガン政府と外国軍に対し、軍事行動を展開していると信じられている。」

2人の戦闘はすぐにカンダハールに飛び火した。ムジャヒディーン同士が血で血を洗う抗争劇を繰り広げた。ターリバーンはそこから身を引き、ほとんどの戦士が故郷に戻った。ムッラー・オマールは、サンジサールにあった陣地をマドラサに模様替えした。しばらくザイーフも彼に従っていたが、「稼ぎがないので長く続けるのは難しかった。」

やがて妻と子どもたちが暮らす町へ帰ろうと決心する。彼は1987年に結婚していた。妻は実家に残り、既に子どもも産んでいた。戻ると義父が「働け」と勧めた。かつて戦友とつるんで、工事現場で金を稼いだのとは訳が違う。今度は家族を養うための孤独な労働である。

「生涯働いたことがなく、事業を始める金もなく、途方に暮れた」ザイーフだったが、近くで幹線道路を工事していると聞き、翌日駆けつけた。戦後の人手不足の時代。すぐにシャベルを渡された。道路に沿って水路を穿つ。朝 8 時から昼 1 時までの仕事で、1 日のギャラは 250 アフガニ（約 600 円）と小麦 7 キロ。ザイーフは「家族を養うため一所懸命働いた。」

本題とは直接関係しないが、ここにアフガンの肉体労働者の面白い生態が描かれている。読者の皆さんの労働に対する視点が問われる逸話なので紹介しよう：

- ザイーフ以外の労働者たちは、放っておかれたり、見張りがいなくなると仕事を止める。
- 地面に座り込んで、お話を始める。
- 働き続けているザイーフに「やめな」と言いさえする。
- 見張りがいても、「忙しぶりっこ」をして裏で手を抜く。

勤勉を旨とする日本人の感覚からして、この労働者の態度はいかがだろう？「ほらコレだ、怠けは良くない、民度が低いね」と鼻で笑うだろうか・・・敬虔な宗教小僧だったザイーフ自身も「いかがなものか」と言わんばかりにこの状況を報告している。果たしてそうだろうか？

暑い砂漠にスコップ 1 本を渡されて毎日毎日水路を掘らされてみないと分からないだろうが、これは命を削る労働である。もちろん工事費用の大半は管理者側がくすねている。「だったら見張りくらい出せよ、こちとら命を賭けてんだよ、倒れたら助けてくれよ、見られてないときくらい自主休憩にするさ。」

これは至極バランスの取れた労働感覚、体のほか売るものを持たない人々の真っ当な防衛手段だと、「つぶやき子」には映る。

（何か隠れた悪事によって）日々の生活に困らない先進国の住人

や、共同体の情けで（いと高きところの神を崇め）宗教に打ち込める幸せ者に、この怠けを「悪」だと非難する資格があるか？

さて、この記念すべき労働の初日、昼になるとザイーフに都合良く白馬の騎士が現れた。父の生徒で友人だったハッジ・バハウッディンという知人がバイクで通りかかったのだ。たった数時間の労働で皮がすりむけ血をにじませた彼の手を見て落涙。「このような手は働いてはならぬ」と宣言し、即刻ザイーフをバイクに乗せ実家まで送り届けた。

家には6カ月の息子がいたが、病気だった。恥ずかしながらバハウッディンを歓待する食べ物も茶も備えがない。白馬の騎士はそそくさと姿を消した。「これは困った、どうお礼をしようか」と悩んでいると、ドアにノック。バハウッディンの息子だった。手には小麦粉が一袋。「これを中に入れてもいいですか？」と聞く。

中庭に荷を降ろすと、息子はポケットから封筒を出した。「父が言うには、あなたはこのお金であなたの問題をすぐに解決すべきです。」ザイーフが数えると6万アフガニ（約15万円）もの大金だった。バハウッディンの「想像を絶する気前の良さ」に驚き、その善意を一生忘れないとザイーフは記録する。

翌日、彼はバスに乗った。息子をカンダハール市内の病院で診てもらうためだ。しかし、このバスの旅が、ザイーフを窮地に陥れた。

(2023年5月15日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaef/2010)を紹介する第9弾。今回はその第6章「撤退」の最終部分から抜粋・翻訳する。

亡き父の友バハウッディンから6万アフガニもの大金を喜捨されたザイーフは、さっそくその翌日、バスでカンダハールへと向かった。息子を病院で診てもらうためだ。道中、刑務所のそばまで来ると、ウスタズ(指導者)・アブドル・ハレームとムッラー(師)・ナキブの軍勢がまだ小競り合いをしているのに出くわした。ハレームの手下とおぼしき薄汚い男たちがバスを止めた。

「全員バスから降りて、塹壕を掘り始めろ。」

「私は6カ月の病気の息子を連れて病院に行く途中です」とザイーフ。

「さっさと降りろ。聞かれていないことはしゃべるな。今度口をきいたら、30発撃ち込んでお前の体を蜂の巣にするぞ。ムジャヒディーンに協力しないとは何事だ。」

恥を知れ!この類いのムジャヒディーンよ。こんな連中がムジャヒディーンの名を貶め、全ジハードを辱めた。徴用され塹壕を掘っている最中に、撃ち合っている双方から銃撃を浴びる。こうして命を落とす民間人は多かった。しかも徴用した兵士たちは死者をまともに埋葬せず、その死を家族に知らせることもない。

バスから降りて塹壕を掘る場所に向かっていると、誰かがザイーフの肩を叩いた。

「おー、ムッラー様。ここで何をしているのですか？」  
兵士の一人だった。事情を伝えると、

「このゲス野郎め！ガジ※がどんな顔か知らないのか？バスから引きずり降ろしただと！いいかね、わが息子よ。この方はムッラー様だ。ロシア時代からのガジだ。それくらい知っておけ。」

※脚注「ガジ：文字通りの意味はイスラームの戦士。ムジャヒドと似た意味なので、代替語としてよく使われる。」

ジハードにおけるザイーフの人気は大きかったようだ。顔もよく知られていたのだろう。彼は運良くバスに戻ることを許された。最初に命令した男は「わが息子よ！どうすれば私のこの父が誰なのかを知り得たでしょう？」※と謝った。命がけの徴用を免れたザイーフを乗せてバスは再び走り出した。

※脚注「文字通りに訳すと意味をなさないが、パシュトゥー語で父と息子の関係を語ると、それは尊敬の意を表す。」

しかし、走ることもものの数分。またバスは止められた。そこはヒンドゥー・コタイという村で、今度はムッラー・ナキブの手下の出番だった。その1人が車内に乗り込み、見回してから降りた。無言だった。別の男が果物の入った袋を持って乗り込んで来た。ムッラー・ナキブの検問所で働く男だった。

その男を乗せたままバスは発車。ザイーフが尋ねた、  
「兄弟よ！その果物にいくら払った？」

男は笑って答えた、  
「幹線道路を走って果物を運ぶトラックからの上納金代わりさ。」

ザイーフが1台あたりの上前を聞くと、「10袋」とのこと。

「そんな取るなら、パキスタンまでの安全は保証するんだろうね？」と確かめると、

「俺たちがカバーするのはハザラジ・ババまで。その先はラライ※の領分だから、彼の部下がまた上納金を課すのさ。」

※脚注「アミール・ラライ：ワイヤン（シャー・ワリ・コット地区）出身。ハッジ・ミール・アフマドの息子で、1980年代のジハードにワイヤンにおいて参戦。現在（2010年）カーブルで国会議員を務めている。」

ヒンドウー・コタイとハザラジ・ババの距離はわずか4キロ足らず。数々の検問所を通るトラックは、その荷物をほとんど失うだろう、とザイーフは心配した。

その夕方、ザイーフと息子は無事に帰宅した。その日の経験から、家族に「アフガニスタンは最早安全ではない」と語った。彼が暮らすパンジャウイ地区の行政官はモアレム・フェダ・モハマド※。善人にしてムジャヒドでもあったが、市街への旅すら危険で困難なものになっていた。「モアレム・フェダは厳格で、任地においては盗賊、博徒、酒飲みを許さなかった。しかし、いつまでこの地を守れるだろうか？」

※脚注「モアレム・フェダ・モハマド：パンジャウイの中心地出身。1980年代のジハードで、カリスのヒズベ・イスラミと共闘したムジャヒディーンの大司令官。2001年のマザーリシャリーフではターリバーン側に立って戦うも、捕虜となりグアンタナモに送られた。後に釈放されアフガニスタンに戻った。現在（2010年）も存命中で、パキスタンに拠点を移し、アフガン国内の外国軍と戦っている。」

こんな事件もあった。イードの祝日に、ウスタズ・アブドル・ハレームは部下を従えてパンジャウイまで下ってきた。闘犬を催し、住民から金を巻き上げようとの魂胆だった。地区の警察官がそれを事前に察知し、止めさせようとした。そこで暴動勃発。すぐに地元のムジャヒディーンが警察に加勢し、「ハレームの喜びを悲しみへと変えた。」部下の幾人かが殺され傷ついたが、ハレーム自身はどうか逃げ延びた。

ザイーフはこれを見て、家族もろとも（再び）パキスタンへと逃げ出した。幹線道路は使わず、密輸ルートや裏街道に行く。南ア

フガニスタン一帯にはびこる、旅行者を銃で脅し、財産を奪い、妻をレイプするギャングたちを避けるためだ。「道中に安全も法もなかった。」元ムジャヒディーンが暴漢となり人々の血を吸って生きていた。「誰も彼らを訴追しない。旅は危険で高価な賭けだった。」

事件に巻き込まれること無く越境できたときはほっとしたと言う。クエッタ近郊の村に住む従兄弟が彼らの住む部屋を工面した。そうこうするうちにバハウッディンにもらった金も底をついた。「またも困った状況だ。」従兄弟から借り入れをして小さなヨロズ屋を開いたが、ほとんど稼ぎにならない。にもかかわらず、小さな家を借りて、イスラームの研究と教育を再開した。

窮すれば通ずか。やがて手を出した宅地開発の事業が当たり、「アフガニスタンは忘却の彼方へ。」

- 借金する
- 小さな土地を買う
- そこに何軒か家を建てる
- 数か月のサイクルで完成した家を売る
- 借金を返済する
- また借金して・・・

やり手である。一家の財政状況は格段に向上した。「仕事に精を出し、起きている間は1分たりとも惜しまず、労働か研究に捧げた。」この成功を経て、ペシャワールへと居を移した。その街で、ザイーフはイスラームの研究と教育の完遂を目指した。さらに、そこで政治への興味が育まれ、一層の精進を重ねた。

こうして第2の故郷パキスタンで経済的成功を収めた23歳のザイーフ。時は1991年。ソ連の撤退から2年以上が過ぎていた。やがて伝え聞くアフガンの惨状が彼を祖国へと引き戻すことになる。

(2023年5月25日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaef/2010**) を紹介する第10弾。今回はその第7章「行動開始」から抜粋・翻訳する。

「以後数年間、私はパキスタンで暮らしたが、しょっちゅうカンダハールを訪れた」とザイーフは第7章を書き始める。ナジブラーが倒れた後に、ムジャヒディーン政府が誕生し、「アフガニスタンがバラバラになるように思われた」と言う。ここで、鋭い読者ならば、ハタと気づくだろうか？

つぶやき子も騙されていたのだが、ザイーフは第6章で時間軸をごまかして記述している。つまり、あの穀物倉庫におけるターリバーンの会議は、ザイーフがパキスタン逃亡後に「しょっちゅうカンダハールを訪れた」ある機会に開かれたものだった。それは1992年4月14日の出来事で、ちなみに翌4月15日にカーブルでは軍事クーデターが勃発し、ナジブラーが失墜（16日に国連庁舎へ亡命）している。

さすがに自伝の編集者は正直で、上記「1992年4月14日」の日付もしっかりと脚注し、巻末の年表には以下のように記している：

- 1989年（21歳）ロシアとの戦争を終え、帰郷
- 1990年（22歳）ザイーフ、父となる
- 1991年（23歳）内戦を避けパキスタンに（再度）逃亡
- 1992年（24歳）ナジブラー失墜（4月）



ムジャヒディーン司令官たちがカンダハールを分割支配（4月）  
内戦本格化

長い自伝のため、単なる記憶違いによる前後か？執筆時（2010年）はまだ米軍とターリバーンが各地で戦闘中だったため、記述の順番替えに深い狙いがあるのか？そこは謎のまま残して、先を読み進むことにする。

最初カーブルで始まった戦いは、じきに南へと下ってきた。ウスタズ・アブドル・ハレーム、ハッジ・アフマド※、ムッラー・ナキブらの地方司令官が、カンダハールの市街入り口や周辺地域で衝突していた。

※脚注「ハッジ・アフマド：1980年代のジハードではムジャッディディーンのジャブハイエ・ミリ（救国戦線）と共闘。1990年代初期の南アフガニスタンにおける主要司令官の一人。ナジブラーの政府を引き継ぎカンダハール州を分割統治するにあたり、彼とその部下たちはカンダハールの空港を手に入れた。」

ザイーフがちょうどカンダハールに来ていたとき、デモがあった。何千もの人々が通りに出て司令官に戦いを止めるよう声を上げた。そこへ、かつてのムジャヒドであるバルー※が1台の戦車を駆り、手下たちを従え広場に現れた。デモ隊に警告もなく発砲。数十人がバルーによって殉教し、デモは解散させられた。

※脚注「バルー：サイヤフのイテハデ・イスラミ（イスラム団結）と共闘したムジャヒディーン司令官だが、今日（2010年）でも、カンダハールでは極めて評判が悪い。少女たちと結婚し父親から持参金をせしめる、1カ月後に離婚し、持参金の返還を拒否するという悪行を続けたことで知られる。ターリバーンは、カンダハール州を落とした最初の日々に彼を絞首した。」

デモが鎮圧されてから6晩を経てようやく、戦っていた双方が停戦に合意した。「街は変わった。道路は壊され、弾の痕ででこぼこ。壁は火薬で黒ずみ、家々は跡形もなく崩れ去った。通りには死体が放り出され、どこもかしこも血まみれだった。」

続いて「検問所」の実態が解説される：

- 内戦が始まるや否や、南部には検問所がキノコのように生えてきた。
- 通りを鎖で封じて、バス、車、トラックを止め金銭や品物を要求する。

とある検問所でこんな出来事があった。高価なチャマン帽※1をかぶり、マカロフのセミオートマチックピストルをさげ、L&M※2を吸っている15歳ほどの「童貞にしか見えない少年」がザイーフの乗るバスを止めた。運転手にナグマ※3のカセットテープをねだる。持っていないので断ると、バスのキーを抜いて嫌がらせ。「おいおい誰かこの子をしつけておけよ」と呟くドライバー。それを聞き咎めた少年は興奮して、蹄鉄を起こした銃を彼に突きつけた。

※1 脚注「チャマン帽：つばの無い多色の帽子で前の部分が開いている。南部のパシュトゥーン人がよくかぶる帽子だが、カンダハール州では当時とくに大流行した。」

※2 脚注「L&M：当時のタバコの人気ブランド（ケントとウィンストンに並ぶ）。重要人物や年配の司令官はL&Mばかりを好んでよく吸ったものだ（アメリカ製）。」

※3 脚注「ナグマ：ソビエト時代の人気女性歌手。パシュトゥーン人でカンダハール出身。ラグマン出身で、当時を代表する大物パシュトゥーン人歌手マンガルと一時結婚していた。ナグマはソビエト学校の合唱隊で歌い始め、後にマンガルとデュエットした。パキスタンに移り、そこでほとんどの楽曲をレコーディングした。ナジア・イクバルと並び、アフガニスタン中およびクエッタ周辺のタクシー運転手に最も人気のパシュトゥーン人歌手。」

検問所にいた他の3人の男が驚いて駆けつけ、少年の腕をとって何とか落ち着かせようとした。ザイーフはあきれて言った、

「何を優しく諭しているのか？ 司令官でもあるまいし、こんな子は殴って銃を取り上げなさい。年上の君がこんな態度なのは見るに忍びない。」

するとその男は力なくこう返した、

「我々には何も出来ないのです。この子はバルーの少年※ですから。バルーの大のお気に入り、殴るなんてとんでもない。苦言を述べただけで、バルーが怒るのです。」

※脚注「バルーの少年：カンダハールの社会は未成年者への同性愛虐待で評判が悪かった。犠牲者数は不明だが、決して少数ではない。ジハード期以前に始まった風習で、内戦の期間中ずっと、被害はより拡大していった。」

こんなやりとりを経て、ようやく少年は怒りを鎮め、キーを返した。スポイルされたこの少年を咎めることは容易い。だが、音楽が好きで、年端もいかぬうちからピストルで人を脅すことが当たり前だと教えられてきた彼も、戦争の犠牲者であることに間違いはないだろう。

やがてザイーフは帰国し、カンダハールの小さな村のモスクでイマームとなった。集まる信者の中には、内戦を憂い、すぐにでも検問所を攻撃し反乱の狼煙を上げようと提案する猛者もいた。ペシャワールで政治に目覚めたザイーフは、宗教儀式を司るイマームであると同時に、村のリーダーでもあったのだ。だが彼は「神に任せよ、時を待て」と慎重だった。

ところが、事態は急速に動き出す。当時、危険なのはもはや司令官同士の戦闘や検問所周辺ばかりではなくなっていたのだ。カンダハール市内で白昼堂々と強盗が跋扈している様子を被害者から直接聞いたザイーフはすぐに行動を決意する。「まず友人たちに意見を聞こう。それを全て集めて突破口を見つけるのだ。そうすれば成功する。」

「友人たち」とはムジャヒディーンやターリバーンというかつてのジハード仲間たちだ。数日後パシュモルにあるモスクで会議が開かれ、33人が参加した。討論の結果「通りから無法者たる司令官たちと検問所を一掃する」という行動計画を定めた。そのために使者を3方に送る：

- ①窃盗・強盗を行わない信心深いムジャヒディーン／戦いに参加するように。
- ②ターリバーンほかの高潔な人々／仲間になるかせめて邪魔をせぬように。
- ③ウレマ（宗教学者）たち、特に大物裁判官であるモハメド・パサナイ／有利なファトワ（布告）を出すように。

1 カ月後に各使者が結論を持ち帰り報告した（第2回パシュモル会議）：

- ①多くのムジャヒディーンが計画に力を貸すと同意した。
- ②ターリバーンは否定的で、協力しないどころか反対する司令官もいた。
- ③パサナイは肯定的だが、計画の全てに賛同するわけではないと言った。

小さな反発はあるものの大枠としての「計画」にはゴーサインの結論が出た。次にリーダーを誰にするかが議論された。部屋にいた多くはザイーフを暫定リーダーにしようと考えたが、「私がリーダーでは年配の司令官は、盗みに走らぬ者たちでも、反発する。もっと政治的に中立で司令官としては目立たない者がよかろう」とザイーフは反論し、リーダー選定は先延ばしにされた。

ただし幾人かのリーダー候補の名前が出され、それぞれ使者が会いに行くこととなった。ザイーフ自身が使者となり会いに行った1人が、ムッラー・モハマド・オマルだった。彼はサンジサールという村に住んでいた。ちょうど妻が出産した直後で、家には多くの知人たちが先客として祝福に訪れていた。

その一行が姿を消すのを待って、舞台は別室へ。ザイーフたち3人の使者がオマルに要件を切り出した。行動計画を伝え、リーダー就任を依頼したのだ。例によってオマルは沈黙した。それは彼の常套手段だった。相手に思いっきりしゃべらせ、決して口を挟

まない。しっかり理解した後で、ゆっくりと考えをまとめ、筋の通った意見を返す。

「計画には賛同する、何か手を打たねばならない。だが、リーダーの話は受け入れられない。」

こう言うと、ザイーフともう1人の使者に顔を向け、続けた、

「なぜ君たちがリーダーにならないのだ？」

ザイーフは理由を説明したが、彼の疑念は晴れなかった。

「これを束ねるのは難しい任務だ。うまく行かなくなったとき、皆がリーダーを見捨てないという保証もない。」

ザイーフたちは説得する、

「関係者は全員ホンモノのターリバーンでムジャヒディーンだ。」

使者たちの熱意にほだされ最後にオマルはこう結論した、

「実は、前にも似たような話がここに持ち込まれたことがある。ケシキナクドの行政官ハッジ・バシャーラ※が君たちと同じ計画を立て、本人も大いに乗り気だった。だから、協力は惜しまない。結局はすべて神の思し召しだ。仲間のウレマたちにも聞いてみよう。パサナイ先生にも伝えておこう。我々に何が出来るか楽しみだ。」

※脚注「ハッジ・バシャーラ：1964年、南アフガニスタン生まれ。1980年代にサイヤフのイテハデ・イスラミと組んでソ連に抵抗。その間、世界最大の麻薬王の1人になったと言われ、『アフガニスタンのパブロ・エスコバル』と称された。その後、ムッラー・モハマド・オマルおよびターリバーンとの関係を利用して麻薬貿易をさらに拡大した。ターリバーンが追放されると、米国に舵を切り替えようとする。アメリカへの忠誠心を示すため、ニューヨークに出向きローワーマンハッタン（金融の中心地）にあるホテルに数日間投宿。米政府の役人からの質問に答えていた。彼らに協力し、アメリカにもアフガニスタンにも有用な人物であることを証明しようとして。しか

し後になって、極秘起訴の形で逮捕され、2008年9月、わずかな審議のみで有罪判決を受けた。罪名は「国際麻薬密売陰謀」。量刑が伝えられたのは翌年5月1日。刑務所内で終身刑を言い渡された。」

(にもかかわらず、この麻薬王はターリバーンの報道官によると昨年9月、人質交換によって釈放され、帰国した。この人物、日本のマスコミでは「バシル・ヌールザイ」と表記される。)

(編集部注：ハッジ・バシャールについては本サイトの下記に詳しい。

- ・ [バシャール・ヌールザイ、グアンタナモ刑務所から釈放](#)
- ・ [アフガン解放をより困難にする麻薬王の釈放](#)
- ・ [汚れたゲーム＝テロリストの育成と取引](#)

(編集部注：オマルが指導者になれたいきさつと秘密については

・ [カンダハールの文盲のムッラーが、なぜ突然「アミール・アル＝ムウミニーン」になれたのか?](#))

こうしたターリバーン創設前夜の動きは、最初の反乱提案からわずか1カ月半のうちに素早く進展し、やがて運命の日を迎えた。この自伝では、次の文で初めて一般名詞のターリバーン（学生たち）に定冠詞がつく。つまり「ザ・ターリバーン」として知られるようになる運動の最初の会議は1994年の晩秋に開かれた。」

(下線ママ) 40人から50人が、サンジサールの「ホワイトモスク」に集結した。

この初会議で決定された人事：

●ターリバーンのアミール（プリンス）に指名されたのは、マウラウィ（大先生）・アブドル・サマド※。これはいわゆる名誉職。

●同司令官（実質的リーダー）には、ムッラー・モハマド・オマルが就任し、出席者全員が、彼へ忠誠を尽くし腐敗及び犯罪と戦うことをクルアーンに誓った。

※脚注「マウラウィ・アブドル・サマド：ウルーズガン州のチリンコット出身だが、先祖はカンダハール州のアルゲスタン地区から出た。ターリバーンが政権についてからは、カンダハール州スピボルダック地区初の地区長官、カンダハール州電力庁の長官、続いてヘルマンド州農業庁の長官を歴任した。現在（2010年）も存命中。」



ちなみに後に「ターリバーン」と呼ばれるこの集団は、初会議の時点ではまだ、運動自体の定款も呼び名もロゴも取り決めていない。ザイーフによると「我々はシャリア（イスラーム法）によって導かれるが、それを執行するのも我々だ。我々は悪を懲らし、善を勧める。そして国を流血させる者たちを止める。会議のあと間もなく、ヘラート・カンダハール間の幹線道路上の町ハウゼムダットに独自の検問所を設けた。そして直ちに、その周囲にシャリアを執行し始めた。」（下線ママ）

ターリバーンは自らが何者であるかを近隣の住民に告げ、パンとサワーミルク※を家々から集めた。メンバーの多くは地元でよく知られ、尊敬されていたので人々は喜んで支援した。

※脚注「サワーミルク：南アフガニスタンでは”シュルンバイ”と呼ばれる乳飲料を食事にあわせて飲む。成分はヨーグルト、水、塩。ときおり小さく刻んだキュウリも混ぜる。」

会議が開かれた翌晩、BBCが新たに起こったこの運動をニュースとして伝えた。それによると「ターリバーンは不法な武装集団が国民に強盗を働く地域を洗淨しようとしている。」マスコミの注目を浴びた。「ターリバーン」という単純明快な名称もつけられた。ザイーフはこの運動がしっかりと根を張るものと予見しつつ、一抹の不安を感じていた。

心配のタネは、古参の司令官たちであった。「彼らは我々の前に立ち塞がるだろう。その手下たちは未来の国民運動には加わらないだろう。いかにして彼らを仲間に組み入れるか。その道を我々は探らねばならなかった。」



(2023年6月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010)を紹介する第11弾。今回はその第8章「始まり」から抜粋・翻訳する。このあたりからターリバーンの今に繋がる習性が見え隠れし始めるので、注意深く読み進めよう。

1994年11月、カンダハール州。いよいよ、「古参の司令官」つまり悪辣な偽ムジャヒディーンたちへの攻撃と懐柔が始まった。岩波新書の「タリバン台頭」(青木健太著/2022年)で言うところの「世直し」の開始だ。ターリバーンの中枢にいたザイーフが見たその戦いはいかなるものだったか？

7章で語られた彼らの戦略を復習しておく：

- 独自の検問所を設置/まず敵の真似から始めた。
- 勸善懲悪を標榜/のちに悪名高くなるターリバーンの独善だが、当初は輝く旗印だった。
- 食料の現地調達/30年近くたった現在もこの遺伝子が残っているのは興味深い。

こうして始まった強敵たちとの戦いだ。ターリバーンは、とにかくつましい。「私は手持ちの2万アフガニ※を寄付した」というから軍資金は幹部らの持ち出しである。使える武器はごくわずか。車は1台もなく、高速移動手段はザイーフのバイク(作戦初日に故障しお釈迦)とムッラー・サッターのロシア製バイクの2台のみ。後者はマフラーを欠き、そのけたたましさから「イスラームの戦車」と仲間内で評判だった。

※脚注「2万アフガニ：当時約300キロの小麦粉が買える金額で、カンダハール市街のやや高級なレストランで10~15人の健康な胃袋を満たせるほどの資金。」(当時アフガニの対外価値は大暴落していたが、生活実感としては5万円ほど)

しかし、住民の集結は素早かったと言う。村々に使いを出すと、多くが検問所を見に来た。そして人々は「すぐに思いを理解し、何十人もが賛同した。こうして発足からわずか数日で400人の運動員を数えた。」話を聞きつけ西隣のヘルマンド州全域や東隣のパキスタンからはせ参じた者もいた。

こうなると資金の提供も増えてくる。匿名で9千万アフガニ（約2億2千5百万円）を寄付した者もいたというから彼らへの期待は大きかった。勢いづいたターリバーンは「既存の検問所をあちこち回って、こんな略奪と虐めは止めよと説いて回るが、ほとんど無視された。」それどころかターリバーンの検問所へ向かう車には呪いと脅しに溢れた警告書が渡された。敵はターリバーンを揶揄して「乞食、ムラ※の息子、野蛮なターバン男」と呼んだ。

※脚注「ムラ：ムッラー（聖職者）の妻への蔑称。」

ターリバーンの検問所が管轄したのはマイワンドとパンジャウイの2地区だったが、その地区では、6人の元ムジャヒド転じて盗人たちが検問所を設営していた。何度口説いても検問所を閉じない彼らに対し、とうとう実力行使に出る。最初の標的はダル・カーン※の検問所。武器はわずか1丁のRPGとカラシニコフが数丁。道路に沿って進む隊列と、側方から迫る隊列が検問所を挟み撃ちにした。

※脚注「ダル・カーン：パンジャウイ地区パシュモルに近いクルク村出身。ハラカット（パキスタンの過激派）と共にムジャヒドとして戦ったが、後にサイヤフのイテハデ・イスラミに宗旨替えした。今（2010年）も存命中。」

不意を衝かれたダル・カーンは懇願した、「神のお恵みを！私を殺しても何の得にもなりません。共に手を取りジハードを戦った仲でしょう。ここを離れるチャンスをください。どんな命令にも従います！」こう言ってターリバーンを騙し、彼はまんまと遁走した。それを聞いた他の盗人たちは戦わずしてそれぞれの検問所を放棄した。いわゆる腰抜けだったのだろう。

ただ手強いのが1人残った。道路のずっと先に検問所を構え、強盗と恐れられたサレーである。「ムラの息子の倒し方は心得ている、学生どもは1人残らず捕まえて殺す」と豪語するこの強盗の背後には、カンダハール市内に君臨する2人の司令官（ハレームとサルカテブ）がいた。彼らがターリバーンを市内に寄せ付けまいとサレーに戦闘員と武器を提供したのだ。

ターリバーンは、まず3度使者を送り、検問所の明け渡しを勧める。「24時間以内に放棄せよ」との最後通告にも、敵の反応は無かった。期限超過から2日目、業を煮やしたターリバーンは3手に分かれてサレーの基地を攻めた。たまたまサレーの一味はカンダハール市内へと逃げ出した。

ぶんどった基地には沢山の武器や弾薬があった。喜びも束の間、敷地内に掘られた穴に凄まじい物を見つけた。ヘラート出身と見られる女2人の裸の死体だった。ザイーフも「ヘラートからの女はバスから引きずり出されレイプされる」と旅人から聞いてはいた。

その通り、目の前の死体には殴られレイプされた痕があった。「この恐ろしい光景にみな怒りがこみ上げた。我々の使命にまだ納得がいかなかった者たちも、何をしているのか再認識し、さらに結束が固まった。」

敵がこれほどの悪なので、ひとたび打ち倒すと、ターリバーンへの支援はさらに伸びていく。例の行政官ハッジ・バシャーは管轄するケシキナクド地区を自らターリバーンに差し出した。トヨタ、ダットサン、ヒノのトラック、そしてランドクルーザーが寄付される。面白いのがムッラー・ナキブ。ロシア時代から名を馳せたカンダハールの大物ムジャヒドで、敵からは、ターリバーン掃討に乗り出すと期待されていたが、突如ヒンドゥー・コタイ村にある自らの主要基地をターリバーンに差し出した。

最初の勝利とナキブの協力がニュースとして伝わると、さらに多くが加勢してきた。ヒンドゥー・コタイの基地には、あのカルザイの父など大物政治家も訪れるようになった。赤十字も世界の報道機関も。ただ、ジャーナリストに対し口が堅いのはこの頃からの習性らしく、「ターリバーンは秘密主義だ」とザイーフも認めている。

ターリバーンはアフガニスタン南東部を支配するほどの勢いとなり、カンダハール市内では最後の大敵サレームとサルカテブを残すのみとなった。やがてサルカテブがムッラー・オマルの暗殺を企てているとの情報が入る。すると、彼は道路を使った移動を止めた。このことが彼に神秘のヴェールを纏わせたのか……。こうして集団の秘密性はさらに高まっていく。

ここで、もうひとつ見ておきたいのは、この集団の統一性だ。カンダハール市内に攻め入った頃、ターリバーンは「3つの派閥に分かれて戦っていた」と言う。それぞれの首領は①ムッラー・オマル、②ムッラー・モハマド・ラッバーニ・アークンド※1、③マウラウィ・アブドル・ラザク※2であった。ムッラー・オマルは後2者を集め運動統一の必要性を説いた。すると彼らは「ムッラー・オマルに従うことをクルアーンに誓った」と言う。何やら出来すぎた逸話だが、ターリバーンが発足当初から一枚岩ではなかったことの証左とも言えよう。

※1 脚注「ムッラー・モハマド・ラッバーニ・アークンド：1980年代のジハードにおいてカリスのヒズベ・イスラミの一員として戦った司令官。配下に6つの軍団を持ち、従える兵の総数は120名を数えた。ムッラー・ナキブに従いターリバーンに加わった。」

※2 脚注「マウラウィ・アブドル・ラザク：ハラカット（パキスタンの過激派）の大将司令官として1980年代のジハードを戦った。後にターリバーンが政権を握ると、ヘラート州の財務担当秘書官となった。現在（2010年）も存命中。」

カンダハール市内でターリバーンを苦しめたのは敵将ウスタズ・アブドル・ハレームだった。彼の部下は「ターバンの材料にする

布がいるって？いくらでも持っていきな、ターリバーンの死体から」と自慢するほどの猛者たちだったが、ムッラー・ナキブが前線のザイーフに手持ちの戦車を与えたことで戦局が逆転。最後は蹴散らされた。

最後に残った敵はサルカテブだった。この男は裏技が得意と見えて、ムッラー・オマルの義父（妻の父）を拘束するなど激しく抵抗したが、結局はターリバーンに敗れ去った。ターリバーンに味方したムッラー・ナキブは進んでカンダハール市を差し出した。州軍の司令官や州知事をはじめ、州内のあらゆる要職がターリバーンによって占められた。「少年を手込めにする悪趣味を持ち、淫行にふけり、盗み、不法な検問所で稼ぐ、銃による政府は消え去った。」

次に南部一帯で彼らが着手したのが司法システムの再構築だった。ムッラー・オマルに選ばれたザイーフはパサナイ師を法廷で補佐した。シャリーア（イスラーム法）による裁判である。彼はいろいろな興味深い事件を担当したが「そのうちの2つは特に抜きん出ている」と言う：

#### 【チャルシャカ村殺人事件】

- 冷血をもってナイフで1人の男を刺し殺した犯人がシュクールの丘に引き出される。
- 犯人の身内が「50丁のカラシニコフと相応の金を差し上げるので許してください」と懇願。
- 殺された男の父は動じることなくナイフを手にした。
- 犯人は両手両足を縛られ、父の前に差し出される。
- 父は「アッラーアクバール（神は偉大なり）」と大声で叫び犯人の首にナイフを当てた。
- しかし殺さず「神は喜ばれた。審判の日に復讐するのは神である」と宣言し、彼を放免した。
- 群衆は喜び、犯人は丸5分間身動き1つできなかった。

●ザイーフは「この男は2度と犯罪に手を染めないだろうと確信したが、しばらく後に再び殺人を犯した。それは強盗事件で、その場で彼も殺されたと聞いた。」

### 【バージャ全家族惨殺事件】

●別れた妻の姉妹の夫（ややこしいが「バージャ」と呼ぶ関係）の家に招かれた肉屋のナビが犯人。

●歓待され、夜になるとほかの客（1名）と共にその家の1室で泊まることに。

●夜中、ナビは肉切り包丁でその客の首を切り落とした。

●その後、家中の部屋をまわり、家族全員を殺した。犠牲者は計11人（女1、男2、半年の乳児を含む子ども8）。

●家を去る前に、全遺体を細かく切り刻み、地下室に放り込んだ。

●逮捕後も動機を一切語らず、ただ「殺してくれ」と懇願する。眠れないようだ。

●処刑は河原で行われた。

●殺された2家族の親類が1人ずつ復讐者として立ち会った。

●ザイーフが「カーバに向かって最後の祈りをしなさい」とナビに言ったが、返事は「早く殺してくれ。手足を切り落とした子どもたちの胴体が俺の手から離れないんだ。」

●さしものパサナイ師もあきらめ、相続人たちがナビを撃ち殺した。

●この出来事からザイーフは「残虐な者は祈ることすらできずに死ぬ、人は神によって導かれなければ、如何に苦しもうが正しい道には戻れない」と実感した。

やがて勝利を続けたターリバーンの軍勢は、大半がカブールに進軍するか、東部戦線で活躍していた。ところが1995年3月、イスマエル・カーン※が突如西側から襲ってきた。ザイーフも戦闘に駆り出されたが、あいにく脚を負傷した。そこでカンダハール市内にある中国人の建てた病院にしばらく入院した。



※脚注「イスマエル・カーン：1946年ヘラート州生まれ。ジャミアテ・イスラミと提携し、西アフガニスタンでソ連と戦った。アフガン政界では今（2010年）も健在で、電力相を務めている。」

回復しきらないうちに退院し、しばらくぶりにパサナイ師の裁判所に顔を出すと、どうも様子がおかしい。留守のうちにザイーフのサインを偽造してパサナイ師（高齢で目が悪い）をだました判事がいたのだ。ザイーフのサインした書類にならパサナイ師がすっかり確かめないで同意するのを知った上で、師を騙したのだ。

アフガニスタンとパキスタンの各都市で商業店チェーンを展開する富豪兄弟のすったもんだだった。そのうちの一方が「なぜアイツに営業許可を出したのか」と怒鳴り込んで来た。パサナイ師は「私を騙すとは見損ねた」とザイーフを叱る。あきれたザイーフは「筆跡をよくご覧ください」と天眼鏡を手渡し、やっと濡れ衣が晴れた。どこの国の判事にも悪い奴はいる。ターリバーンとて例外ではいられないようだ。

こんな司法界に嫌気がさしたザイーフは辞表を出した。再び軍関係の業務に就こうと画策し、兵站や無線連絡などをこなしていた9月のある午後、ムッラー・オマルに「事務所に来なさい」と声をかけられた。

（2023年6月15日）

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」（**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**）を紹介する第12弾。今回はその第9章「行政統治」から抜粋・翻訳する。どんな書物も紐解いているうち、ある所から急に読む速度が増す。この本も然り。さっそく、気軽につぶやきながら、前のめりで読み進めよう。



「今夜は家に帰り、荷物をまとめろ。明日われわれは出発する。」

ボスのムッラー・オマルにそう言われたザイーフは無用な質問（どこ？いつ戻る？）などせず、夜を待って帰宅。翌朝、基地に出向いた。待っていたのは4、5台のジープ。急いでカンダハールを出た。西に進み、ゲレシュクという村で昼食になった。茶を飲み終わると2機のヘリが空き地に着陸した。ムッラー・オマルは1機目に、ザイーフは2機目に乗った。この話、さらりと書かれているが、いかにオマルが行き先を（腹心にも）気づかれぬようにしていたかが垣間見えて興味深い。

北西へ飛び、ヘルマンドを越えてヘラートへ。兵舎のビルわきに見える広場へと急降下した。車列に乗り込み、バゲ・アザディ※に到着。そこには知事の迎賓館があり、中にはすでに大勢がいた。それはムッラー・オマルが招集した州政府高官の任命式だった。

※脚注「バゲ・アザディ：意味は、自由の庭。ザヒール・シャーの時代(1933年~1973年)に造られた庭園で、当初の呼び名はバゲ・シャーヒ（高貴な庭）。王はヘラート滞在中、ここで暮らした。王のいないときは、政府高官同士が顔を合わせる場所だった。共産政権が倒れムジャヒディーン時代になるとバゲ・アザディに改名された。ターリバーン時代にはバゲ・イスラーミ（イスラームの庭）と呼ばれたが、近頃（2010年以前）再びバゲ・アザディに。普段は警備されており、一般人は入場できない。」

その席でムッラー・オマルがヘラート州知事、州陸軍司令官、州警察長官らを任命し、ザイーフは銀行の監督を任された。これは中々重要な仕事だった。その理由はヘラートの持つ先進性にあった。ザイーフが上げるこの州の金融上の特色は：

●直前まで統治したイスマエル・カーンの影響。中央政府不在の間も、彼は「西部の王子」としてこの地に君臨し、領民の生活向上に尽力した。イランとの貿易に独自の関税を課し、その税収を

元手にヘラート市街とその周辺地域を広く開発した。ザイーフの最初の仕事は、州内に残存する金品の確認作業だった。

●金融的先進性。州内の4銀行は、アフガン中央銀行の支配下にあるとは言え、独立して機能していた。他州の銀行と比べると格段に優れた組織で、多くの人々が銀行口座を持ち、事業を興したり投資を始める目的で、銀行から借り入れをした。

ザイーフが手始めにアフガン銀行ヘラート支店の手元資金を確認すると、400億アフガニ(約120万米ドル)、30万米ドル、プラス相当量のパキスタンルピーという状況だった。「さらに金庫内に旧通貨、金、銀、および若干のプラチナを発見した。」

銀行の職員は概ね信頼に足る一般人で、中には諜報部員もおり、多くは元共産党員だった。彼らはザイーフが「執務を開始した数日のうちに、諜報部員も含め挨拶に来て、自己紹介をした。」そんな中、ザイーフは面白い男が行内にいることを知った。

彼の名はモハマド・アンワール。ターリバーンに敗れイランに逃げたイスマエル・カーンの兄弟だった。「みな根拠も無く、彼がイスマエルと連絡を取り情報を流している。投獄しろと非難した。」州知事というよりも「王」であったイスマエル・カーンに「人々がこうも早く背を向けるのか」と驚きながら、ザイーフは当のモハマドを事務所に呼んだ。

「君はイスマエルの兄弟だが、われわれの兄弟でもある。心配せず仕事を続けなさい。」

さすがに博愛主義者のザイーフである。彼はこのあと2年間、ヘラートで暮らすことになるが「イスマエル・カーンがこしらえた都市インフラには大いに世話になった。」追い出された「王」のお陰で、ヘラートはアフガニスタンで特に進んだ都市だったのだ。

最初はターリバーンを恐れていた市民も徐々に慣れてきた。やがてザイーフたちを「友として迎え入れ」るようになった。ザイーフは彼らが「故郷のため懸命に働き、平和を好み、教育を尊重し、目上を敬い、法に従う人々だ」と感心しつつ仕事に邁進した。

1997年、息子が病気だとの知らせが届いた。ザイーフは知事の許可も得ず、急ぎカンダハールの家族の元に駆けつけた（無断使用した公用車はあとで政府に戻したらしい）。故郷ではまたぞろ父から受け継いだ遺伝子のためか、「イスラームの研究」に邁進したい病が嵩じた。

「政府の側に立って働くことは、腐敗と不正にまみれた人生を意味する。そこには、人間の惨めさしか見いだせない。」もともと学生、後に兵士だった彼に、2年間の宮仕えは相当こたえたと見える。そんなときにこそ、神は優しく手を差し伸べてくれるのだろう。

家にこもって1か月が経った頃、ムッラー・オマルが車をよこした。「彼の称号は、アミール・アル=ムーミニーン※へと変わっていた。」オマルの事務所につくと、2人で話し合った。

「ひと月ばかり休みを取るのはいいことだ。しかし、もう仕事に戻るときだぞ。」

※脚注「アミール・アル=ムーミニーン：意味は信徒たちの王。1996年1月、ムッラー・オマルは1935年以降誰も目にしていなかったイスラーム予言者のマントを聖なる隠し場所から持ち出した。そしてカンダハールにやって来た1500人を超えるムッラーの前で、自らがアミール・アル=ムーミニーンであると宣言した。」（キャシー・ギャノン著「Iは異教徒（Infidel）のI」2006年刊より）

当時、ターリバーンはカーブルを掌握していた。アミール・アル=ムーミニーンはザイーフが国家防衛省の行政長官に就任することを欲した。もう政府のために働きたくないザイーフがそれに抗

えなかったのは、3年前の「サンジサールの誓い」があったからだ。

ヒズベ・イスラミ司令官グルブッディン・ヘクマティヤールとアフマド・シャー・マスードが戦いを繰り広げ、破壊し尽くした首都カーブル。ザイーフは他の仲間同様、そこに初めて足を踏み入れた。見ると、「ターリバーンは既にシャリーア法の施行も始めていた。女性は官職を解かれ、男性はみな髭を伸ばし出した。市内の生活は通常に戻りつつあった。」（下線ママ）

幸い防衛省のビルは壊されていなかったが、金庫は空っぽで、役人は誰もいなかった。ほとんどの者が北部同盟と関係があったためカーブルから逃走し、そうでない者は省庁が再開したことを知らず出勤しなかった。そんなカオスの中、「役所間のいがみ合いの地雷原を手探りで進まねばならなかった。」

それでも努力の甲斐あって、やがてザイーフは副防衛大臣へと上りつめる。防衛上の全財務及び兵站を任される要職だ。防衛大臣がケガをしてパキスタンへ治療のため退いたときは、9か月に渡り「防衛大臣代行」まで務めた。

当時のターリバーン戦線：

●北部での戦いに協力するというマリク※1の誘いに乗って6千の兵を送り出したが、サラン峠付近でマスードとマリクの軍勢に挟撃された。兵たちはからくもバグラーンを抜けクンドゥスへ脱出（1997年）。

●その後のクンドゥス攻防戦では、片脚の司令官ムッラー・ダデューラー・アークンド※2がマスードをパミールの山中に押しとどめて勝利（1997年）。ダデューラーの口癖は「男として死ぬ。決して敵の捕虜となるな。」

●バーミヤン制圧（1998年）。

※1 脚注「マリク：ドスタム軍の第2 指令官だったが、1996 年7 月に兄弟が殺されたことで、自分の身を案じるようになり、翌年ターリバーンに寝返って北部を与えると提案した。しかしその合意を反古にし、ターリバーン兵を襲い殺害した（アムネスティインターナショナルの推定では死者数約2 千）。彼が北部アフガニスタンにおける事実上の上級司令官だったのは1997 年5 月以降の数か月間のみ。同年11 月なかばに国外に逃げ出したと言われている。」（この衝突はドスタムがトルコ亡命中に起きている。）

※2 脚注「ムッラー・ダデューラー・アーケンド：1966 年ウルーズガン州生まれ。1980 年代のジハードで活躍し、ターリバーン運動のリーダー、ムッラー・モハマト・オマルとは強い結びつきがある。1994 年西部アフガニスタンにおける戦闘で片脚を失った。それでも戦い続け、2001 年以前のアフガン中部および北部における戦闘で大きな役割を果たした。2006 年、彼が『スパイ』と決めつけた男たちの首をはねたビデオが出回ったことで、『南部の肉屋』と呼ばれ（特に西側メディアから）注目された。2007 年5 月、国際治安支援部隊(ISAF)によって殺害。」

こうしてターリバーンは支配地域を広げていったのだが、ターリバーンの「戦術には常に交渉の重要性を強調する部分があった。」この姿勢は2001 年の政権崩壊まで続いたと言う。その証拠としてザイーフが記すのは、自ら出席したマスードとの和解交渉である。それは、次のように進んだ：

●まず、マスードからアミール・アル=ムーミニーンに電話。

「われわれの違いについて交渉の席で論議したい。」

「では、ザイーフを送るのもっと詳しく話し合おう。」

●マスードからの指定で交渉地点はバグラム近郊の「サラケ・ナウ」と呼ばれる場所に。月明かりの下、屋外での4 時間に渡る話し合いだった。マスードからの提案は「軍事連合として連携しよう。」前もってムッラー・オマルは「彼に政治的、民事的部門で役割を与えてもいいが、軍事力を分け与えるのは危険だ」とザイーフに伝えていた。そのため交渉は平行線。ターリバーン側が狙った「捕虜の交換」まで議題が進むことはなかった。

●数か月後に第2回交渉が持たれた。マスードは出てこず、代理人が2名。ターリバーン側もザイーフ他3名。場所は双方の前線からほぼ等距離の中間地点だった。マスード側は「50人ずつのウレマ（イスラーム学者）が出席する会議を開こう」と提案した。その会議の狙い（しぶとく双方の軍事的提携）を見抜いているザイーフは「軍事力の分割はさらなる衝突と流血を招く」と突っぱねる。逆に捕虜交換の話を出すと、今度は向こうが拒絶する。こうして2度目の交渉も徒労に終わった。

カーブルに来て1年半。ザイーフはまたぞろ任務に飽きて来た。その頃、命じられていた仕事もかなり辛気くさい。「共産党時代にアフガン人を殺したのを讃えられて名誉勲章やその他の褒美をもらった人物の特定」とか「ショマーリ事件※の調査」とか。

※脚注「ショマーリ事件：ターリバーンとカーブルの北方にいたマスードの闘争により、1997年9月までに、18万もの民間人が逃げ出していた。そこへショマーリ平原でターリバーンが井戸に毒を入れ、さらに灌漑水路を破壊するという事件が起きた。この破壊工作については、いまだに元及び現ターリバーンが熱く議論している。しかし、当時ショマーリ平原でとられた戦術を非難するターリバーン高官は極めて少ない。」

戦争が20年近くも続けば、国家防衛の仕事もきれい事では済まされまい。血塗られた部分を掘り起こすのは憂鬱な作業だろう。そんな仕事の連続にザイーフは嫌気が差しとうとうエイヤ！と辞職してしまう。但し今度はしっかり「後任に後処理を託してから、家路についた。」



(2023年6月25日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010)を紹介する第13弾。今回はその第10章「資源と産業」から抜粋・翻訳する。

副防衛相という要職を自ら投げ出し、カーブルの自宅に隠遁して3か月が過ぎたころ、ターリバーンのナンバー2、モハマド・ラッバーニが訪ねて来た。しつこく復職を迫られたが、「不本意な職務を押しつけられ疲れた」と固く断った。すると数日後に、またやって来た。今度は「カンダハールに行き、アミール・アル＝ムーミニーンに会いなさい」と言う。「同意しなければ、無理矢理にでも連れて行くぞ」と脅され、しぶしぶ翌日、アリアナ便でカンダハールに飛んだ。

空港から直に知事公館の裏手にあるムッラー・オマルの事務所へ。数人のボディガードに守られたボスと対面した。「復職せねば投獄するぞ」と脅されたが、「お気に召すままに」と返答すると驚き、続いて「復職すればこの40万パキスタンルピー※の証文をやろう」と迫る。それも拒絶すると、「カーブルに帰れ」と告げられ、話し合いは物別れに終わった。

※脚注「40万パキスタンルピー：当時としては極端な大金。3～4の寝室がある家か、最高の車を2台は買えるほどの金額。」

カーブルに戻って2日後、ザイーフはラジオで布告を聞き、自らが「資源産業省の副大臣に任命された」ことを知った。ムッラー・オマルによる実力行使。どこまでも例の「サンジサールの誓い」は効力を持つらしい。ただし、本人も「すぐに新しいポジションに慣れ、省での仕事を楽しむようになった」とのこと。アッケラカンと言うか、ボスの部下を見る目の鋭さと言うか。

さて、今度は国の屋台骨たる経済の発展を司る仕事である。最大の問題は「州知事たちとカーブルにある省の軋轢」だった。当時「ターリバーンが90%の国土を押さえてはいたが、統治に関しては中央と地方が覇を競っていた。この状態は2001年にターリバーンが失墜するまで続いた。」

化学工場、水力発電所、天然ガス、石油、石炭、セメント、大理石、貴石、塩、その他重工業は北部州に集中し、様々なムジャヒディーン司令官が分け持っていた。しかも長引く内戦によって施設は損傷し、その機能は低下していた。そこでザイーフがまず手をつけたのが、情報収集。その結果の一部は：

●マザーリシャリフのクドウバルク工場（水力発電と肥料生産）は80%減産。理由は修理をせずメンテ不足のためで、管理する司令官は自らが潤えばそれでいいとのスタンスだった。その結果、18MW あった発電量は6MW に。4000 袋の肥料生産は700 袋にまで落ち込んだ。

●サーレポルの油田は枯渇寸前。毎夜べつべつの司令官がやって来ては、ありったけの石油を無計画に汲み上げたため。その他、北部の油田地帯では数百の油井が勝手気ままに掘削され大きな損害を出した。「地震で損傷し朽ちるがまま」の油田もあった。特にサーレポールではドスタム配下の司令官たちが、高圧をかけて吸い上げた結果、水がシャフトに染みこんで、ザイーフが実地調査をした際も頻繁な微震動にひどく悩まされた。

解決策としてザイーフはまず「コミュニケーションの構築」を急いだ。放っておくとてんでんばらばらに行動する地方の司令官たち（実際の管理者）に、省の意向を伝達する方法の確立だ。各州に無線連絡機器を配り、省が計画した生産割り当てに達しているか否かを毎日報告させた。他にも様々な刷新を行い、やがて事態はかなり改善された：



- 上記のクドゥバルク発電所は、間もなく以前のレベルに回復した。
- レンガ焼成工場、製氷工場、浄水場などが再建された。
- サーレポルでは既存の油井を技術者が調査し復旧させた。
- シバルガンからマザーリシャリフまで天然ガス網が延長された。
- セメントの生産量が増えた。
- 北部全域で工場が再建され工業が盛んになった。
- 外国の投資家がカンダハール州に新たな精油所を作る契約を結んだ。

ところがザイーフ入省の翌年、1999年になると国連がターリバーン政府（アフガニスタン・イスラーム首長国）に広範な経済制裁を科すようになる。国内におけるいわゆる「テロリスト」の存在を咎めての処分だった。その影響の一つが、「トルクメニスタン、アフガニスタン、パキスタンを通る天然ガスパイプライン構想」の頓挫だった。それはザイーフが逃がした大きな魚だった。

とは言え、めざましい成果だったことに間違いはない。「1999年単年で我が省は国庫に350万ドルを納めたが、以前なら個人のポケットに消えていった金だった」とザイーフは自慢している。その勢いで先の「外国資本による精油所新設」について、ザイーフはかなり詳しく解説しているので付き合いっこ。

まず登場する会社は、ユノカル※とブリダス（アルゼンチンの石油企業）。後者は1997年3月に早くもカーブルに事務所を開き、後にカンダハールにも進出。ユノカルも負けじとカンダハールで事務所開設の準備を始めた。ザイーフは両社と個別に契約し、いいとこ取りしようと思ったが、ユノカルは強硬に独占契約を主張した。その姿勢をいぶかったザイーフは逆にブリダスと独占契約を結んだ。

※脚注「ユノカル：米国資本の石油天然ガス会社で、1890年から2005年（シェブロン社に吸収）まで存在した。米国政府と関連のある多くの人物がユノカルで働いていたが、その中にはハミド・カルザイやザルメイ・ハリルザドも含まれる。」

さて新精油所がカンダハール州に作られ始めてしばらく後、ギリシャの会社が100万ドルを投資して、周辺の地形を衛星解析した。するとカンダハールとヘルマンド両州にかなりの埋蔵量が見い出された。ユノカルは悔しがったか？ ザイーフの答えは「怪しい。」ターリバーン政府の失策に乗じて最後は横取りできると思っていたに違いない、というのが彼の見立てだ。そうすると、後に国連制裁を採決させ興味を示した外国企業を撤退させたのも、何とも怪しい話ではある。

米国以外にもザイーフにとって目の上のたんこぶとなった国がある。まずはイラン。例の「パイプライン構想」に名の出たトルクメニスタン、アフガニスタン、パキスタンの3国すべてと国境を接している。「この国はアフガニスタンを不安定にさせ、投資家を怖がらせて追い出すためなら何でもする。」イランにとってパイプラインはアフガニスタンではなく自国を通るべきなのだ。やがてイランはイスラーム首長国に敵対する北部同盟に対し、資金、弾薬を提供し、兵站を支援するようになった。

次にパキスタン。イランと並びアフガニスタンの最大の貿易相手国なのだが、やることがえぐい。パキスタンから原材料を仕入れて加工貿易を営むアフガニスタンに対し、原材料の「輸出税」を高める。すると製品そのものをパキスタンから輸入した方が安くなり、結果、アフガン国内の産業が立ち行かなくなる。

逆に、パキスタン国内の製造業者には「特別免税」の恩恵を与え、製品をさらに安く輸出させる。その上、低品質の商品を輸出するのでアフガン国内の損失は大きい。例えば肥料。窒素分46%をうたっているが、ザイーフたちが検査するとたったの20%。アフガン農家は安い物にとびつき、病疫に悩まされ生産量

を落とす。とかく経済は競争とは言え、何とも倫理観に欠けた隣国の姿勢である。

こうした厳しい環境の中、ザイーフはアフガン産業振興のため様々な激務をこなして行く。当時のターリバーン政権の懐具合は：

- 国家予算は年 8 千万ドル。
- そのうち「ライオンの取り分」は軍事支出に。
- 資源産業省の予算は年 700 億～750 億アフガニ。（約 7 百万ドル）
- 「それはまるで熱い石の上に落ちた一滴の水。跡形も無く蒸発した。」

さあ、入省からやがて 1 年半。多くの実績を積んだザイーフは各省からスカウトの声がかかるようになった。するとアミール・アル＝ムーミニーンは彼を「運輸行政の長官に任命した。」この国で運輸とは主にトラック輸送。各地に組合があつて力を持ち、ターリバーンが派遣した役人の意見が通らない。

つまり組合の認める代理人が運搬業務を差配し、ドライバーを不公平に扱っていたのだ。友だちや身内にばかり効率のいい仕事を回し、あぶれた者が政府に訴えて、業界は混乱の極みだった。各地を視察したザイーフはカーブルに戻るや、「代理人を国選化する法律」を發布した。こうして運輸全般を行政の監督下に置くことに成功した。

もちろん実入りが減って苦情を言う代理人もいたが、「そんな奴らは、正義や公正に無頓着な盗人だとして切り捨てた。」ザイーフの面白いところは、「ここまでは第 1 段階、ゆくゆくは運輸行政自体を民営化しよう」と考えていたこと。しかし、彼がその結末を見ることは無かった。

時は 2000 年。運輸行政の大改革から 3 か月が経ったある日、彼は移動中の機内で聞いたラジオ放送に驚いた。それはアミール・アル=ムーミニーンによる布告だった。そのとき初めて、ザイーフは「新たなパキスタン大使」として任命されたことを知った。

(2023 年 7 月 5 日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**) を紹介する第 14 弾。今回はその第 11 章「大変な任務」、第 12 章「外交原理」、第 13 章「高まる緊張」から抜粋・翻訳する。

1978 年、親戚と一緒に国を捨て命からがらパキスタンに逃げた 10 歳の少年が、22 年後、大使となって舞い戻るとは、まさに神のみぞ知る運命だった。イスラマバードの大使はターリバーンのキャリア官僚の間では垂涎の職なのだ。「サラリーは良く、アフガニスタンよりも生活水準は高い。」しかし、ザイーフは「気乗りしなかった。」

なぜか？それまで外交とまったく無縁だったことから来る不安はあったろう。もともと、例の「学者になりたい」血筋である。しかし、嫌がるもっと実質的な理由があった。当時の「イスラーム首長国」は、国連によって制裁※を受けており、大使館が置かれた国は世界で唯一パキスタンのみ。それが国際社会と繋るための「最後にして唯一のよるべだった。」

※脚注「国連による制裁：アメリカの要求を受けて国連が初めて制裁を加えたのは、1999 年 10 月。しかし全く効果が無かった。そこで翌年 12 月 19 日、安保理は制裁をさらに強め（決議 1333）、武器の輸出を禁止した。さらに、この決議にはターリバーンの国外大使館を全て廃止すべしとの条項も加えられた。」（この制裁は、2022 年 12

月 16 日の決議 2665 まで、以降計 30 回を数え、現在まで上書きされつつ続いている。) )

「難しい状況だ」と懸念するザイーフはボスのムッラー・オマルに撤回を要求した。しかし「もう遅い。布告は出された。それにお前なら出来る」とにべもない。やがてパキスタン側も承諾しビザを出した。新大使は国連専用機で、イスラマバード空港に降り立った。

さっそく執務を開始したが、心配した通り外交は複雑怪奇。その主たる要因は例の組織だった。つまり、「パキスタンの政府内で大きな力を持つのが ISI (軍統合情報局) だと着任後に知った。他国の代表たちの間でも、ISI の隆盛は周知の事実だった。」かつて国防相代行を務めていた時、ISI は様々な貢ぎ物を手に近づいてきたが、ことごとく無視した。ザイーフはその性格からして「スパイ活動が嫌い」なのだ。

そして、主たる交渉相手であるパキスタンの外務省は伏魔殿だった：

●アブドル・サッター※が「外務省で打ち合わせしよう」と持ちかけた。ザイーフは裏にロシアがいることを察知し、「話し合うならパキスタン抜きで」と拒絶した。

※脚注「アブドル・サッター：パキスタンの外務大臣（在任 1999～2002 年）。以前にオーストリア、インド、ソ連で大使を務めた。」

●アメリカ外交筋には「3 か国協議によろこそ。でもターリバーンは来ない。彼らに交渉の意図はないようだ」と残念がって見せた。しかし呼ばれたはずのザイーフが協議の開催を知ったのは、その数日後だった。

この件に関しては、ザイーフも「知っていたとしても拒絶した」と言うから、どっちもどっち。しかもその情報を「内通者がもた

らした」とは、彼も徐々に大使職が板に付いてきた、と言うべきか。

国連も含めどの国と交渉するにしても「パキスタン抜き」がザイーフの矜持だった。パキスタンの後ろにはアメリカがいて「イスラーム首長国の孤立化」を狙っているのだから、至極真つ当な判断だ。但し、彼のいる場所はパキスタン。何とも歯がゆい状態である。

また、パキスタンの役人は「隣室にアメリカ人がいる」と恐れ、低い声で話をする。中でもザイーフが呆れたのは、彼らのアメリカへの妙なリスペクト。「ブッシュ大統領陛下」とか「コリン・パウウェル・サヘブ（閣下）」とか。同じモスLEMとして、聞くに堪えなかったろうと想像する。

さて、外務省はこんな具合だが、警察を担当する内務省も手強い。

300万もいたアフガン難民は様々な差別に苦しんでいた。なかでも「難民への警察の横暴」は目に余った。自身も難民の出だから、人ごとでなかったろう。特に「大使館の前の通りで、まるでオオカミ集団のごとく難民狩りをする」警察は許すことが出来なかった。

<悔しい事件簿>

●大使館で話し合いをするために難民キャンプからはるばるやって来たウレマ（イスラーム学者）の1人が、途中警察に金を奪われたと訴えた。「すわ！」とザイーフが現場に向かうと悪徳警官はまだそこにいた。とっ捕まえてふん縛り（さすが元軍人）、詫びるその男を警察署に突き出した。結果、内務相は彼を放免し、逆に大使を特権乱用で告発した。



●国防軍の司令官であるムッラー・セラージュッディン※が病気治療のためドイツに向かう途中、イスラマバードのホテルから警官たちによって誘拐された。すぐに解放されたが、持っていた1万ドルの旅費および治療費は奪われた。内務省に訴えると、マスコミの大キャンペーンが始まった。いわく「セラージュッディンはパキスタンの少年を虐待した。」話はどんどん膨らみ、アフガン側はついに訴えを取り下げた。

※脚注「ムッラー・セラージュッディン：ターリバーン政権下で国境防衛を指揮した強者ムジャヒディーン司令官。ヘラート市民の多くは、彼が市内で最も残虐なターリバーンの1人であると信じている。」

< 耳を疑う言い訳 >

抗議のため内務省に乗り込んだザイーフ大使はハイデール大臣に状況改善を直接訴えた。その返答は、「わが国の警察は何もアフガン人だけを苦しめているのではありません。金がありそうで無抵抗そうなら誰でも標的にします。これは一般的な問題で、特に難民に限ったことではありません。」

そんな中、「ターリバーンはパキスタンで人気があった」と述べるあたり、ザイーフもいよいよ大物政治家の貫禄を帯びてきたようだ。いわく「パキスタン国民の80%はイスラーム首長国を支持していた。」1999年のクーデターで独裁政権を打ち立てたパールヴェーズ・ムシャラフ行政長官はターリバーンに深入りしようとせず、多くの役人は支援に懐疑的だったにも関わらず。

それは大使館が「あるべきイスラーム」のプロパガンダに精を出した成果であろう。大使自身がカラチ、ラホール、クエッタ、ペシャワールと、国内を駆けずりまわった。自由に動けはしたが、危険を避けるため秘密裏に敢行された宣伝旅行だった。ジャマアテ・イスラミ党※1の「カルタバ会議」※2やジャミアテ・ウレマイエ・イスラム党※3の「デオバンド会議」※4にも参加して、数百万のモスレムに団結を呼びかけた。



※1 脚注「ジャマアテ・イスラミ党：パキスタンのメジャーな政党で、1941年にラホールで旗揚げ。パキスタンにイスラーム国家を建設することを提唱する。」

※2 脚注「カルタバ会議：毎年ラホールで開かれ、政治的、宗教的な問題を3日間にわたり討論する。」

※3 脚注「ジャミアテ・ウレマイエ・イスラム党：パキスタンの政党で、1945年にジャミアテ・ウレマイエ・ヒンドから分派して誕生。デーオバンド派（19世紀インドに起源を持つスンナ派イスラームの改革運動）の伝統を守る。」

※4 脚注「デオバンド会議：ペシャワールで2001年4月8～11日に、50万人が参加し開かれた。サウジアラビアに米軍が駐留し続けていることへの懸念などを表明。会場ではムッラー・オマルやオサマ・ビン＝ラーディンの檄が読み上げられた。」

特に後者の会議は「印象的だった」と言う。「200万人（報道のなんと4倍！）が参加した」会議だったが、最終日に登壇した大使はアフガニスタン・イスラーム首長国の代表として演説し、アミール・アル＝ムーミニーンの声テープを流した。

精力的に活動するターリバーンだったが、それを邪魔したのは常にムシャラフだった。ザイーフによると当初ムシャラフは：

- ターリバーンを嫌ったが、単に自らの政治的な生き残りのために擁護した。つまり、ますます巨大化するISIが彼の前にいてターリバーン政権を承認し、後ろにはターリバーン好きな国民が控えていた。

- ムシャラフのクーデターが成功した陰には隣国でのターリバーン勝利が少なからず影響したという分析すらあった。

- 世俗的な男で宗教心は皆無。ターリバーンが本気で「イスラーム首長国」を打ち立てるとは考えておらず、自分と同じく「宗教を利用して政治的目標に向かっている」と信じていた。

- インドの影響もあった。東西両面に敵を持つのは避けたい。そこで、西のモスレムを手助けして「パキスタン・ファースト」を旗印に東の聖戦に備えようとした。

こうして表面上は一応の仲良し。ところが、あることをきっかけに、ムシャラフは硬化する。その経緯は：

●アミール・アル＝ムーミニーンを自国に招待したが、断られた。

●そこで、自らをカンダハールに招待してくれと要望したが、返事はこうだった、「どうも訪問の目的が良くないようです。隣国の長として、安全保障や経済問題を語りに来るなら受け入れます。しかしビン＝ラーディンはわが国と米国の問題で、貴国が口を挟むものではありません。」

●ムシャラフはアフガン訪問をキャンセルした。

●トドメはアミール・アル＝ムーミニーンがムシャラフ大統領に宛てた親書、「共にイスラーム法を施行し、イスラーム政府を打ち立てましょう。」やっとターリバーンの「本気」を理解した大統領はその「忌まわしさ」に身震いした。

こうして大統領が豹変すると、次に出てきたのが **ISI** だった。

「悪いようにはしない」と懐柔してくる。何度も金で釣ってきたが、ザイーフは「1ルピーたりとも手を出さなかった。」逆に「**ISI** が北部同盟のアフマド・シャー・マスードに接触し始めた」との情報をつかんだ。「イスラーム首長国に対する陰謀として、パキスタンはアメリカ、イラン、北部同盟と手を結んだ。」

大使館対 **ISI** の諜報合戦だ。ザイーフにとって「スパイは嫌い」など既に過去の言葉。せっせとパキスタン政府内にスパイ網を構築し、**ISI** に近いとおぼしき大使館スタッフをクビにした。だがまだ「パキスタンの真意はつかみ切れていなかった。」

こうして両国間に緊張が高まる中、アフガン政府の「勸善懲悪省」のある行動によって、ザイーフたちは外交上の大きな危機を迎えることになる。バーミヤン石仏の破壊命令が出されたのだ。

(2023年7月15日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010)を紹介する第15弾。今回はその第13章「高まる緊張」の後半から抜粋・翻訳する。この長い自伝のちょうど中ほど(折り返し点)に来て、やっと、クルマ以外の「日本」が登場する。そのため、わが国の資料にも当たりつつ、やや詳しくつぶやきたい。

在イスラマバード大使となり、世界に開かれた唯一の窓口として、攻めては「真のイスラーム」の域内伝播を、守っては「ターリバーン政府の承認」獲得を目差し精進していたザイーフ。2001年の春、その足をすくったのが、例の「大仏破壊」である。

思い出して欲しい、1998年になってやっと(当時ザイーフは副防衛大臣だった)、バーミヤンが制圧されたことを。そこはターリバーンの支配に最後まで抗った地なのだ。それもあってか3年後、「パキスタンとの緊張が高まる中、勸善懲悪省のマウラウイ・アブドゥル・ワリ大臣※は、バーミヤンの古くて有名な仏像群を破壊せよと命令した。」

※脚注「マウラウイ・アブドゥル・ワリ：カンダハール州のシア・チュイ村出身だが、1980年代のジハードには参戦しなかった。2006年夏、パシュモルでカナダ兵士によって殺害された。」

この命令は「何らかの方法で事前に漏れ」、世界中の使節団がザイーフを通してアフガニスタンに文句を言おうと押しかけた。

「大使館前でデモをする」外交官すらも現れた。「ユネスコの抗議文は36通」を数えた。中でも活発に抗議したのが、中国、スリランカ、日本の3か国だった。

●中国：首長国は直ちに彫像群の破壊準備(刻一刻と大量の爆薬が仕掛けられていた)を停止せよ、と要求した。

●スリランカ：修理のために（事前に一部が砲撃によって壊れていた）、彫像群を国外に運び出そうと提案した。「仏教の指導者がパキスタンまでやって来て、イスラマバードで私に会った。アフガニスタンまで行きたいと要望したが、却下された。」

中でも日本の努力は最大だった。「国会議員、文化庁長官、さらに6人の外交使節」からなる一団をパキスタンに派遣し、2つの異なる解決策を提案した。

提案①：スリランカ同様、彫像群を分解し、日本に運んでから組み立て直す。

提案②：頭からつま先まで、彫像群をすっぽりと覆い、誰にもそこにそれがあるとは思わせない。その裏で保存する。

言い放っただけの中国。宗教心から奥座敷へと突き進んだ（しかし却下された）スリランカ。テクノロジーを開陳し、代替案も出しつつ説得に当たった日本（うまく行くと、関係企業の儲けになるぞ！も含め）。なかなか興味深い三者三様である。

ここで本自伝を一旦離れ、日本側の記録をあたっておこう。ネットを覗くと、さすがに政府の資料がシュレッターも溶解もされずに残っていた。

外務省資料：（[タリバーンによる彫像破壊令問題](#)）

これによると、どうやら日本の抗議団はアフガニスタンまでは到達したようだ（ただし当然ながらバーミヤンには行けず）。入国を拒絶されたスリランカとの違いは何だったのか、については、後ほどザイーフの著述に戻って考察するとして、つぶやき子には「これは、いかがなものか」と気になる点がある。それを先にやっつけておこう。

つまり、先の日本外務省のページは、「アフガニスタン・イスラム共和国」→「アーカイブ」と階層化されている。このアーカイ

ブの一番下、つまり最も古い資料がこの「タリバーンによる彫像破壊令問題」なのだ。その何が「気になる」のか？

ここで、さんざんつぶやいたファウジア・クーフィの自伝「お気に入りの娘（本サイト：金子つぶやきによるダイジェスト）」に戻る。以下の叫びはつぶやき子の耳を離れない：「われわれの内戦は終わり、ターリバーンがいま、われわれの政府だと世界は認識した。われわれは昨日の物語。一面に載るのは別の悲劇だ。でもわれわれの悲劇は終わっていない。なのに世界は続く数年間、われわれのことを忘れてしまった。われわれが漆黒の中で何かを求めていたそのときに。」

先の大戦でコテンパンにやられたからと言って、何でもかんでもアメリカ追従でいいのか？という疑問である。ファウジアたちがどんなに苦しんでも、国として何もしなかった我々が、すわ「あの大仏が壊されるぞ！」となって初めて「そういやアフガニスタンはどうなったの？」と気にし出す。「これは許さん、どうにかしよう」と国際的なブームに、ちゃっかり便乗だけはする。

余談ついでだが、確か中3のときに「日本沈没」がベストセラーになった。さっそく映画化されたワンシーンは今も目に焼き付いている。日本から数百万単位で難民を受け入れて欲しいと頼まれた豪州の前首相（たぶん）は、日本からの陳情者が帰ったあと、土産にもらった小さな仏像を手に、「こんなのが送られて来るのはいいが、日本人は困る」と本音を吐く。このフィクションに対して15の夏に感じた怒りが、数十年の時を経て変貌し、今度は現実に対して「困る」とうそぶく側にいる・・・それでいいのか？という問いである。

さて、2001年のザイーフ対日本使節団の邂逅に話を戻そう。先の2案を示したあと、使節団はこう付け加えた。「もしも我々の提案を飲むならば、彫像群に対し金を支払いましょう。」そう、

この資金力こそがスリランカとの違いだろうと、つぶやき子は邪推する。そうこうして交渉は「2、3時間も続いた。」

両者のやり取り：

（日本）仏教徒としての先達はあなた方、アフガン人です。我々は単にあなた方に続いて仏教を受け入れました。だからあなた方が先達として、歴史的・宗教的記念物を保全するよう期待します。

（ザイーフ）仏教の礎を私たちが築いたから、ある意味でいまだにこの宗教のリーダーであると考えるのは面白い見方ですね。でもアフガン人はその頃から進化しました。仏教が何の基盤も持たない空虚な宗教だと気づき、イスラームの光を見たのです。かつて私たちを先達とし、私たちに続いたのなら、なぜ真の宗教に出会った私たちの例に従わなかったのですか？ その上、仏像は人の手によって石から作られました。宗教的に真の価値はありません。その保全に何の意味があるのでしょうか？

（日本）メッカのカーバ神殿も人の手によって石から作られています。何百万のモスLEMが毎年巡礼し、周行するのはなぜですか？ モスLEMがそれを尊重し、今でもその方角に向け祈るのはなぜですか？

質問を質問で返されたザイーフは「それ以上理性的につきあう気になれなかった。」そこで「本国に伝えます」と述べて話を切り上げたと言う。この使節団が日本外務省の言う「3月7日の代表団」で、パキスタンを経てムタワッキル外相※の待つアフガニスタン（おそらくカーブル）へと向かった一行だろう。残念ながら成果がなかったのは周知の事実である。

※脚注「ムタワッキル：ターリバーン政権の最後の数年間で外務大臣を務めた。もともとカンダハール州出身で、父は地方では有名な詩人だった。」



それにしても、いくらザイーフの挑発に乗ったとはいえ、日本側が発した最後の2つの質問はかなりお粗末ではないだろうか？ 現在と過去を天秤にかけるのは「学者」の姿勢としてはアリだろうが、少なくとも「政治家」の言葉としては配慮を欠いたと言うべきだろう。

この爆破騒ぎの期間（2001年2月末～3月上旬）、ザイーフは大使として「つらく、苦しい体験をした。」誰の目にも、石仏の爆破はアフガン外交をさらに大きな試練へと導いた。この出来事に対し、「自分では何も出来ず、何の相談もなされなかった。」この一言は、自らを大使へと推挙したアミール・アル＝ムーミニーンへの恨み節とも聞こえる。

そして彼に忠誠を誓い、イスラームに詳しい大使はこの騒動を次のように締めくくる：「確かにシャリーアを逸脱した行為でないことには同意する。だが、石仏はただの宗教問題ではなかった。破壊は不必要で、間の悪い事件だった。」

国際世論は爆破が終わると「覆水盆に返らず」と諦念したのか、またもアフガニスタンのことを忘れようとしていた。しかし、その大騒ぎからちょうど半年後、あの大事件が勃発する。

（2023年7月25日）

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」（**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**）を紹介する第16弾。今回はその第14章「オサマ問題」、第15章「9.11とその余波」から抜粋・翻訳する。前回でいよいよこの自伝は折り返し点を越えた。すると、あの男が登場し、あの大事件が世界中を驚かす。当時一般に諸悪の根源と見なされたター



リバーンは、破滅への道をどう辿ったのか。後半に入りキンドル  
端末をいじくる指が一段と活発になった。

もちろん、米国の敵ナンバーワンのオサマ・ビン＝ラーディン※  
と在イスラマバード、アフガン大使のザイーフに直接の面識はな  
い。しかし、前者は後者の仕事を確実に難しくし、後者は前者を  
守り通す姿勢を貫いた。それはザイーフにとって、悩ましくも誇  
らしい「オサマ問題」であった。

※脚注「オサマ・ビン＝ラーディン：サウジアラビア人でテロのパトロン。1980年代  
のジハード期はアフガニスタン南東部で過ごした。その後しばらくサウジとスーダンに  
潜伏してから、1997年にアフガニスタンへと戻り、まず西部続いて南部で活動。米国の  
利益を損ねようと数々のテロ攻撃を立案・指揮したが、その総仕上げが2001年の  
9.11だった。現在（2010年当時）も存命中と信じられている。」

ここで久しぶりに年表を確認しておこう：

1988年（オサマ 31歳） ペシャワールでの話し合い中にアル＝カ  
ーイダ誕生。

1989年 ソ連撤退。オサマ、サウジアラビアへ帰国。

1991年 オサマ、ソマリアへ。

1993年 世界貿易センター爆破事件。ブラックホークダウン。

1994年（ザイーフ 26歳） ターリバーン旗揚げ。

1996年 ターリバーン、カーブル制圧。

1997年 オサマ、スーダンからジャララバードへ移動。

1998年 ターリバーン、バルフ州都マザールを一時制圧するも  
失う。

米国、アフガニスタンをクルーズミサイル攻撃（標的はアル＝カ  
ーイダ基地）。

2000年 ザイーフ、大使となる。

2001年 バーミヤンの石仏、爆破（アル＝カーイダが手伝った  
との噂あり）。

誕生から12年、アル＝カーイダは世界各地でテロを起こし、そ  
の名を轟かせていた。怒ったアメリカは、それを撲滅せんとミサ

イルを撃ち込んだ。そして首魁たるビン＝ラーディンの引き渡しを、米国のみならず、パキスタンのムシャラフ、「中立であるべきにも関わらず変質した国連までもが」しつこくアフガニスタンに要求した。

たまたま、ザイーフが在イスラマバードの米大使に出した提案：

- ①しかるべきテロの証拠を出せば、イスラーム首長国がシャリーアに従いイスラームの最高裁でビン＝ラーディンを裁く。
- ②それが嫌なら、イスラームの3か国の検事総長が4番目のイスラーム国で新たに裁判を開き、そこに米国も参加させる。アフガニスタンはパートナーとしてビン＝ラーディンの出廷を約束する。
- ③それも嫌なら、我々が力づくでビン＝ラーディンの全活動を抑制する。通信手段を奪い、他国を標的としたいかなる行動のためにも、我が国土を使わせない。

ザイーフの考えの根底には、「両国間に犯人引渡条約が結ばれていないからには、たとえ米国といえども、横車を押させない」という矜持があった。遵法精神である。よく言われる「パシュトゥーン人は客人を決して裏切らない」という民族の誇りとは若干異なるアプローチだ。

もちろん米国の答えはいずれの提案にもNO。彼らにしてみれば、「たわけるのもほどほどに」なのだろう。挙げ句に「従わないなら兵力の使用も躊躇しない」と脅してきた。なるほど、外交とは乱暴者の競技場なのだ。

そして、興味深い話がひとつ。ある朝、米大使が「今から話したい」と連絡してきた。失礼な「今日の今日」だ。いつもの「アメリカのお家芸、大山鳴動ネズミー一匹だろうと思った」ザイーフだが、夜の祈りの後でどうにか都合をつけた。すると敵は大使の自宅にまで押しかけて来た。そして極秘情報を口にした：

「我々の諜報員によると、オサマが米本土で大きなテロ攻撃を企んでいるようです。だから、こんな夜に駆けつけたのです。ぜひ貴国政府に伝え、阻止してください。」

ザヒール・シャー時代の国境警備隊司令官の轍を踏むまいと※、ザイーフは外務省を通すという手順を省き、直接カンダハールに情報を伝えた。すると待つこと 23 時間・・・ほぼ 1 日！なんとも長い待ちである。いらつくザイーフと米大使の気持ちになって、以下の脚注で時間つぶしをお願いしたい。

※脚注「これは人気の与太話；1970 年代に、パキスタンのジェット戦闘機が、南東部の国境を越えてアフガン制空圏を侵した。国境警備を担当する司令官は、手順を重視して速達を送り、どう対処すべきかと、カーブルに打診した。アフガン郵便の遅さは有名だ。政府から返事が届いたのは 6 か月後。いわく、撃ち落とせ。」

この脚注で思い出すのは、映画「トラ・トラ・トラ」のタイピングシーンか、はたまたベレンコ中尉か。サッカーワールドカップを応援に行って国の家族に絵はがきを出したスコットランド人の話（毎度とつとつ予選敗退し、予定より早く帰国した自分が、その絵はがきをいつも受け取る）みたいな何とも滑稽な話である。

カンダハールからの返事はこうだった：「現在もこれからも、アフガニスタンは合衆国を害する意図を持ちません。アメリカに対するいかなる種類の攻撃も我々は許さず、またそのような攻撃の計画および訓練を、我が国土で誰が行おうとも必ず阻止します。」

木で鼻をくくるとはこのことか。これを聞いた米大使は「ダメだ、こりゃ」になったこと請け合いである。1 人ザイーフのみが「これで我が政府の立場は明示された」と悦に入った。その後、アメリカ側は「奴を手渡したら、政府を承認しよう」と釣りを試みるほど折れてきたと言う。そんな矢先の 9 月 11 日、夜 7 時ないし 8 時の出来事だった。

．．．．

ニュースを知らされ、テレビのある隣家へ。仲間と画面を見ながら、「戦争が始まる」とザイーフは涙を流した。大喜びの周りの者がいぶかって聞く、「なぜ泣くのか？」その無邪気さがザイーフをさらに悲しませた。そして諫めて聞いた、「誰が米国と世界の怒りをまともに受けるのか？」そのときザイーフの「脳裏をかすめたのは、日本の真珠湾攻撃だった。」その結果どうなったか？「迷いもなく2発の核爆弾を落とされたのではないか。だから泣いているのだ。」

それでも、皆は納得しない。逆にこんなパシュトゥーンの諺を出して煽った、「襲われし場所、そこでこそ戦は起きる。」アメリカは遠くにありすぎて、とても自分たちに復讐などできない、と彼らは安心しきっていた。「次に何が起きるのかを心配しながら」ザイーフは自宅に戻った。

(2023年8月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**)を紹介する第17弾。今回はその第15章「9.11とその余波」から抜粋・翻訳する。

ターリバーンが世界に向けて唯一開いていた窓口が在イスラマバード大使館。大使はその夜から一大テロ事件の善後処理に追われた。

自宅に戻ると、大使館の政治担当チーフに電話し、翌朝の段取り(メディア対応、声明発表など)を決めた後、寝床に着いた。し

かし「オサマが米本土で大きなテロ攻撃を企んでいる」という米大使の発言を何度も思い出し、一睡もできなかった。すると午前1時、カンダハールから電話。ムッラー・オマルの副官に「アミール・アル＝ムーミニーンがお呼びです」と伝えられた。本国政府も眠っている場合ではなかったようだ。

簡単な挨拶に続き「およそ15分間」今後の国としての出方をボスと協議した。

翌朝早くに、大使館に着くや、大使は矢継ぎ早に行動した：

- モニタリングチームにテレビニュースを見ておくよう指示。
- 自らは、英字新聞に出ている各国の反応を確認。
- 午前10時に記者会見すると発表。
- 会見開始の直前になってやっと本国のムタワッキル外相から電話。
- 伝えられた公式スタンスを文書化して、会見に臨んだ。

会見では声明文を読み上げた、「慈悲深く哀れみくださる神の名において。米国での出来事に強く抗議し、犠牲になった方々のご家族に深い哀悼の意を捧げます。責任者は罰せられねばなりません。我々が望むのは正義の執行と、アメリカの辛抱強く慎重な行動です。」

ザイーフはイスラマバードの米大使館にもコピーを送った。「しかし、もう遅かった。恐れ怒ったアメリカは、復讐を求めている。」翌日から事態は大きく動き始めた：

- ブッシュ大統領がテレビで「首謀者はビン＝ラーディン、彼を匿うアフガニстанは共犯者」と宣言。
- その2日後、ムタワッキル外相がブッシュ発言を否定する声明を発表。
- 国連がアメリカへのサポートを表明し、ビン＝ラーディンの引き渡しを正式に要求。

- 他のイスラーム諸国は、アメリカの逆鱗に触れぬようと静観。
- ひとりイスラーム首長国のみが「証拠不足による不同意」を表明し、孤立。
- 対アフガン制裁が強化。
- パキスタンに支援を求めるべくターリバーン高官が訪れたが、拒絶された。
- やがて米国はビン＝ラーディンの引き渡しに加え、広範な基盤を持つ民主政府の樹立、人権特に女性の権利の擁護を求めてきた。

最後の項目になると、他国の政府の退陣要求、つまりもう宣戦布告である。ちゃっかり「人権」を持ち出すのは、うまいが卑怯。さらに、「米軍によるアフガン全域における自由な捜索作戦の展開」までも追加で盛り込んできた。こちらは治外法権どころか、武力による他国での刑事活動だ。当時米国（と世界）は狂っていたな、と今にして思う。

最近、ロシアも似たようなことをしているが、違いは核で脅す必要があったか無かったかだけと見るのだが、いかがか。ちなみに、ブッシュはムシャラフに対し「アフガン攻撃に協力しないなら、パキスタンは石器時代に戻りますよ」と警告した（とムシャラフは後に自伝に書いた）。どうも同じ穴の貉である。

さて、米国の怒りを静め、話し合いで解決したいザイーフは、かつて当選祝福の際に教わったブッシュ大統領の個人アドレス宛てにメールを送った、「ジハードと内戦で10年間疲れ果てたアフガニスタンはもう戦う気がなく、戦う力もありません。」同じ文面を米国の大使館と両院にも送った。

ブッシュ大統領の顧問、アフガン生まれのザルメイ・ハリルザド※には電話で伝えた、「アメリカは直接アフガニスタンと交渉す

るべきです。ターリバーンはパキスタンの言いなりではありません。パキスタンに、私たち両国の利益に沿う仲裁などできません。」しかし、大使の訴えを知ったはずのブッシュ大統領だが、聞く耳を持たなかった。

※脚注「ザルメイ・ハリルザド：1951年マザーリシャリーフ生まれ。2003~5年、アフガン大使、2005~7年、イラク大使、2007~9年、国連大使を歴任。現在（2010年当時）もアフガン案件に絡んでいる。」

世界最強の米軍といえども、陸封されたアフガニスタンを単独で攻め落とすのは難しい。そこでパキスタンの協力を必要とした。先のブッシュによる脅しは、その表れであり、実際の出来事だろう。9.11後の1か月、直接は探れない敵・米国の出方を、その子分パキスタンの動きから把握しようとザイーフは情報を集めた：

- パキスタンは共産主義者の将軍やムジャヒディーンの司令官としきりに顔合わせし、イスラーム首長国と戦うに当たって有望な同盟候補であると、ISIを通じて米国に伝えた。
- 米国は協力する司令官に数百万ドルを送り、通話無料の衛星電話ほか、想像を超える量の物資を与えた。
- アフガン大使館の職員にも金を与え、米国のために情報を漏らすよう誘惑した。
- パキスタンはシンド州とバルチスタン州の軍事基地を米軍に提供した。するとすぐに、対アフガン戦に備えて大量の武器と弾薬がそこに運び込まれた。
- 米パ両国の諜報機関は、アフガン軍、特に空軍基地を指揮するターリバーン司令官の情報を求めた。
- パキスタンは北部同盟と極秘に会談した際、ターリバーン掃討後のアフガンの軍事と政治について協議した。

あらゆる情報が「戦争は不可避」と告げていた。しかし、アミール・アル＝ムーミニーンは楽観的だった。開戦の前にザイーフは



カンダハールに出向き、ボスと直接話し合っている。その様子を、彼はこう伝える：

- 市内の新しい家でムッラー・オマルはザイーフを出迎えた。
- それまでに集めた米国の動きに関する情報をすべて伝えた。
- ボスはそれを受け入れない。アメリカには「ビン＝ラーディンが首謀者であるとの確たる証拠を見せよ」と要求したから、その提示無しで攻めてくるとは思わない、と言う。
- ザイーフの見立てによると、ボスは開戦確率を 10%ほどと思っているようだった。

不思議である。新居に移ったのも「まずはムッラー・オマルとビン＝ラーディンをクルーズミサイルで叩く」との噂を聞いた上でのことではなかったか？ その裏にはパキスタンの二枚舌があった。ザイーフには「戦争が近い」との情報を漏らしつつ、カンダハールのパキスタン領事館は正反対のことを言い続けた、「それは無い。ブッシュの好戦的物言いは米国民の怒りを静めるための修辞法だ。」

これを単純に信じたとすれば、ターリバーンの政治中枢はあまりにもナイーブだったと言わねばなるまい。学生だから法に従う。相手もそうするはずだ。もはや「やあやあ我こそは」の時代ではないということ、現在のターリバーン政権にも是非伝えなくてはならないように思う。

果たして戦争がどう始まったか、ザイーフの回想をもとに辿ってみよう。

**【10月のある朝、明日の夜侵攻を始めるとの一報を、パキスタンの高官から得た】**

敵もさる者。侵攻開始に備えブッシュ大統領は「証拠」を提示していた。ただし「その相手はアフガニスタンではなく、パキスタンだった。」つまり攻撃に全面協力する手はずのムシャラフが、

国際世論に問い詰められるのを想定し（その頃、少し熱が冷めていた）、アリバイ的証拠を与えておいたのだ。

ダルエスサラームのテロ※に加担したとされる「アラブ人アリの告白」である。「その後、アリは失踪。精神病院で見つかったが、薬の影響で正気にもどることはなかった。その言葉を真に受けたムシャラフは信用をさらに損なった。」

※脚注「1998年8月7日：ケニアのナイロビとタンザニアのダルエスサラームで同時にクルマが爆発し、米国大使館が襲われた。数百名が殺害され、ビン＝ラーディンは後に米国の『10 大お尋ね者』に名を連ねた。」

【翌晩 10 時、カンダハールから、いま空軍基地がミサイル攻撃を受けていると電話】

ザイーフが「アミール・アル＝ムーミニーンはご存じか？」と聞くと返事は「イエス。いやちょっと待て。アミール・アル＝ムーミニーンの家にはたくさんのミサイルが撃ち込まれている・・・」電話はプツリと切れた。ザイーフは侵攻を信じなかったボスの身を案じた。

【直後にカーブルから電話、空軍基地がミサイル攻撃を受けている】

すぐに電話を国防大臣のムッラー・オバイデュラー※に回してもらった。戦争のプランとアドバイスを手短かに伝え、こう言って受話器を置いた、「もう柔らかいベッドと宮殿のときではない。どこか安全なところへ逃げろ。あとは神のみが知り給う。」

※脚注「ムッラー・オバイデュラー：1980年代の有名なムジャヒディーン司令官。後に国防大臣となった。今（2010年当時）も存命中だが、パキスタンに拘束されていると信じられている。」（この本の執筆後、2010年にパキスタンの刑務所で心臓病のため死亡した。）

ザイーフは細かい日付を自伝の中で述べていないが、これは10月7日夜のことだ。深夜に大使は自宅の庭で会見を開いた。ブッシュ大統領による攻撃開始ビデオは「グッドアフタヌーン」で始

まることから、7日午後に出発。時差は9時間なので、詰めかけた世界のジャーナリストは、ホヤホヤのブッシュ発言の裏を、ザイーフの言葉で確認したことだろう。「これは戦争の始まりだ」と。

以後、ザイーフは毎日午後4時に記者会見を開いて「アフガニスタンで起きていること」を世界に伝えた。パキスタン外務省は「黙れ」と何度も脅してきた。ISIも3度に渡って正式に抗議した。内容を事前に伝えろと。

11月9日にマザーリシャリーフが北部同盟の手に落ちた。するとチャンス到来とばかりISIは、「しぶといオバイデュラー国防相とカンダハール州知事をパキスタンにおびき出せ」と要求してきた。逮捕する考えだ。敵にすれば大使の身柄なんかどうにでもなる、なんでも言うことを聞かだろろうと思っている。そのうえ後ろ盾はあの米国だ。いま寝返れば命の保証どころか、将来の地位も約束されそうな勢いである。そんな誘惑につぶやき子ならあっさりと負けるだろう。

もちろん我らがザイーフはきっぱりと断った。「逮捕されるから来るなと彼らに助言しました」とは何とも痛快な返答である。「政府はこうだがパキスタンの民衆は全く違った。」戦う隣国の姿は、やがてパキスタン人のモスレム魂を驚かすかみにしてしまう。

大使館に数千の志願兵が押し寄せた。別の数千の志願兵は直接、バルチスタンとNWFP（北西辺境州）からアフガニスタンに入国した。デュアランドラインを越えた強者は1万に達した。パキスタン政府を揺るがすほどの事態である。さすがに大使も扱いに困った。テレビに出て、「もう来ないでくれ。肉体のジハードより、金銭のジハードが欲しい」と訴えた。しかし効果は無かった。

それほどまでに「人々はイスラームへの熱望に突き動かされていた。」

(2023年8月15日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**) を紹介する第18弾。今回はその第16章「厳しい現実」、第17章「捕虜306」から抜粋・翻訳する。遂に戦争が始まった。多くのパキスタン人が義勇兵として参戦した。またザイーフの元に紙幣や財宝を届ける者もいた。だが、そんなことで戦況が変わるほど、事態は甘くなかった。

米軍による攻撃開始後のザイーフの動きを列挙してみよう。

### 【亡命画策】

攻撃が始まった翌日(10月8日)、主治医が自宅へ不意に現れ、「体調が悪いと伺い、往診に来ました」と言う。訪問した本当の理由は、自分の庭で匿ってあげよう、パキスタン政府はきっと大使を米国に差し出すだろうから、と提案するためだった。ザイーフは申し出を断ったものの不安になった。そこで、サウジアラビア、UAE、カタール、そしてパキスタンの4か国に亡命を申請した。しかし結果は、どこも却下。英国大使とフランス大使にも連絡したが、返事なし。ただ独り UNHCR のみが1か月限定の保護書類を出してくれた。

### 【戦況悪化、アフガニスタン孤立】

翌週にはもう形勢不利となった。状況改善を狙ってイスラマバードで多くの大使と面談していたザイーフに対し、サウジアラビアとUAEが国家承認の取り消しを通告してきた。

### 【11月11日、カーブル陥落】

ザイーフは、ちょうどペシャワール経由でクエッタに向かうところだった。すると機内で「全財産の半分をターリバーンに差し出す」という女性病院経営者と隣り合わせた。そして「唯一シャリーアを守るあなた方が米国に負けるなんて、神様はどうしたの？」と泣く。「神は我々をお試しなのです」と、道中ザイーフは彼女を慰め続けた。

### 【11月13日、カンダハールへ】

一度イスラマバードに戻ったザイーフだったが、2日後、今度はランドクルーザーを駆って、陸路カンダハールへと向かった。目的はアミール・アル＝ムーミニーンに「米国と直接話し合わないか」と秘密裏に相談すること。途中、チャマンで国境を越えるまですずっとパキスタンのスパイに尾行された。「再入国は許可されないかも」と心配した。

カンダハールは混乱の中にあった。ボスにまみえんと、新築なった政府の庁舎へ。だがムッラー・オマルは不在だった。しばらくしてそこを出たが、出てから1時間後に、米国空軍が庁舎を爆撃した。ボスは心配した、「お前は監視されている、会うと危険だ。」続いてムッラー・オマルの古い方の家に向かった。すると、乗っていたクルマのすぐそばに、爆弾が落とされた。その衝撃でザイーフが持っていた衛星電話が吹っ飛んだ。2度目の攻撃で「ムッラー・オマルは私の位置が追尾されていると確信した。」

それを傍証する事象が2つ：

- 携帯が破壊されたあとは、もう襲われなかった。
- 数分後、ロシアのタス通信が「アフガニスタンの駐イスラマバード大使が、カンダハールでクルーズミサイルによって殺害された」と報じた。

結局、ボスには会えずじまいだったが、副官に要件を伝えて5日後、クエッタに向かった。案の定、再入国は渋られ、ウェシュの国境でビザが出たのは夜の9時。その日はクエッタの領事館に泊まり、翌朝空路イスラマバードに到着した。空港では「幽霊か」といぶかった報道陣の質問攻めに遭った。

### 【11月20日、パキスタンも承認取り消し】

イスラマバードの大使館に戻ったその日、パキスタン政府から「国家承認取り消し」の書状が届いた。ザイーフの行く先々で、スパイが見張っていた。ターリバーンを支援する人々の訪問は続いたが、ザイーフの活動範囲は日に日に狭められていった。

### 【12月7日、カンダハール陥落】

この一大事は、ザイーフの自伝に全く記されていない。よほど悔しかったのだろう。盟友でありボスでもあるムッラー・オマルは、杳として行方が知れなくなった。先の11月13日に起きたニアミスがザイーフにとって最高指導者との最後の邂逅となるのか。これ以降、ザイーフは米軍に協力する「ドスタムやイスマエル・カーンらと交渉し、ターリバーンの捕虜を帰還させる」ことに精を出した。

### 【12月24日、リビア独立記念日】

記念式典が市内のマリオットホテルで開かれた。ムシャラフ大統領も招かれていた。彼を一瞥しただけで通り過ぎたザイーフに、他のイスラーム国家の大使たちが盛んに話しかけてきた。イラン大使に至っては、隣席に陣取った。「アフガニスタンの状況と私の意見を聞きたかったのだ。」ザイーフは適当に食事を済ませ、そそくさと帰ろうとした。しかし、ロビーで待ち受けていた大勢の記者たちが「蜂のように群がって」ザイーフは式場に押し戻された。

マスードを殺したのも記者に化けた暗殺者だった。それもあってか、怖がったのは式典会場の賓客たちだ。ムシャラフは隣室に控えたボディガードたちのもとに逃げ込んだ。すぐに警察が現れ、ザイーフを裏口から逃がした。

翌日、パキスタン外務省の役人が大使館にやって来て、「ムシャラフが昨晚のマリオットの事件にいたくご立腹だ」と告げた。

「もう見過ごせぬ」と。実は以前、ISIは「ザイーフがムシャラフ暗殺計画を練っている」と騒いだことがあった。まさかの濡れ衣だ。ただし、そう思わせる要因もあった：

ザイーフは「700人のウレマによるファトワ※1」を世界の報道機関とパキスタン政府に表明していたのだ。それ以来、ザイーフはムシャラフ側にとって喉元の「トゲ」だった。そのファトワにいわく、「アメリカ人がアフガニスタンに侵攻するのを助け、ムスリムに対して戦い、その他いかなる方法でも彼らを援助する者は、誰であろうと罪を犯している。その者はムバフ・ド・ダム※2となり、殺しても良い。」

※1 脚注「ファトワ：イスラームの宗教学者が出した法的権威を持つ意見。1989年にアヤトラ・ホメイニが『悪魔の詩』の著者、サルマン・ラシュディの処刑を求めて出したファトワが最もよく知られている。」

※2 脚注「ムバフ・ド・ダム：文字通りに訳すと『許された流血』。法学者の意見は拮抗するが、例えばイスラームに反する行いをした者はムスリムを含めて殺しても良いとされる。さらに、そこにはアフガニスタンでアメリカ人に協力する者までも含むとの意見もある。」

### 【2002年1月2日、逮捕】

夜8時、自宅で捕虜の救出方法について思い悩んでいると、扉がノックされた。3人のパキスタン人が入ってきて告げた、「閣下、あなたはもう閣下ではありません。アメリカがあなたを尋問したく、われわれはあなたを合衆国に差し出します。」



ここから先の3週間、捕虜となったザイーフは辛酸をなめる：

- まず、10日間ペシャワールで監禁。
- 次に儀式（米兵による殴る蹴る、裸にされる）を経て引き渡され、へりで運ばれる。
- 飛行中も暴力は続き、着陸後、別のへり（少しモダン）に乗り継いだ。
- 船倉らしき場所で小さな檻に入れられる。そこで何人かのターリバーンの囚人を見たが、会話は禁止された。
- 船内の小部屋に引き出されて尋問、「オサマ・ビン＝ラーディンとムッラー・モハマト・オマルについて何か知っているか？」この船には5、6日いた。
- さらにへりを数機乗り継ぎ、殴られながら別の地へ。
- 気づくと新雪の積もった地面に裸で放り出されていた。
- そこはまだ、アフガニスタンだった。（バグラム基地）

### 【1月25日、赤十字登場】

赤十字の係員が捕虜を登録し、家族への手紙を預かった。捕虜となって初めて満足な食事にありついた。

### 【2月9日、カンダハールへ】

裸の写真を撮られ、医療診断。再び赤十字が現れ、今度は身分証明書を配った。カンダハールに即席で建てられたテント監獄に、7月1日まで収容された。

ザイーフが記録する捕虜生活は：

- 捕虜仲間は最初600人（テントは全部で30張り）。後で800人に増えた。
- 月に1度だけシャワーが浴びられる。
- クウェート産のミネラル水がボトルで配給されるが、体を洗うのに使うと罰せられる。
- 食事は、古くは第2次大戦の日付にまで遡る缶詰。
- 6月になってやっと改善され、ハラルのメニューが出るように

なった。

- 夜には抜き打ち検査があり。犬まで連れてくる。
- 捕虜は番号で呼ばれる。ザイーフは306。
- 捕虜は自分の番号が呼ばれると、うつむいて「ようこそ」と返事する。拒否すると罰せられる。
- テント以外に格納庫を改造した獄舎があるが、捕虜たちから懲罰房と恐れられている。
- もちろん、捕虜は何度も何度も尋問される。
- それは、「知っている」と疑っている一面もあったが、より多くは「捕虜を、若い兵士が逮捕尋問術を身につけるためのモルモットとするためだった。」

ここで、ザイーフは赤十字の3つの任務について解説する：

- ① 捕虜と家族の手紙のやりとりを手助けする。
- ② 20人の捕虜につき4冊のクルアーンを与える。
- ③ 最低でも4か月に1回はシャワーを浴びられるよう段取りする。またオーバーロールの捕虜服を洗濯して渡す。

しかし、この赤十字も油断ならない。噂によるとスパイが潜り込んでおり、うっかり漏らした言葉を米兵に告げ口されると言うから要注意だ。

そしてある夏の日、尋問の最中にこう聞かれた：

「ムタワッキルを知っているか？ 会いたいか？」

「彼が捕虜だとは信じがたい。どこにいるんだ？ どうすれば会える？」

すると数分後、本人が現れた。パキスタン製のビスケットを1箱くれた。ザイーフは両手が縛られているので食べられない。テントに持ち帰ることも許されない。10～15分話し合った後、彼は出て行った。

話の内容：

- ザイーフは近々キューバに送られる。
- ザイーフの身に何が起きるかは、アッラーのみが知り給う。

さすが大物政治家は捕虜になつたりはしない。うまく寝返って米国側についたのだろう。土産がタバコでなくビスケットだったのはご愛敬か。

果たして、翌日。尋問官の言葉：

- 君は7月1日にキューバへ送られる。
- 君の人生はそこで終わることになる。
- 遺体が祖国アフガニスタンに戻ることもない。
- 君の最後のチャンスだ。
- 今、決断しろ。
- アル＝カーイダとターリバーンの両指導者の居場所を吐いて国へ帰るか、一生われわれの奴隷として暮らすか。

ザイーフは「1日考えてみろ」と言われたが、即刻返事した、「私はここに捕らわれているどんな兄弟と比べても、より才能があり重要な人物ではありません。全能のアッラーの思し召しにただ従うのみです。私は罪を犯していません。だから罪を認めません。私をどう処分し、どこに送るかはあなたたち次第です。」

こう言い放ったあとは、「早く移送しろ」と願うばかりだったと言う。

(2023年8月25日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**)を紹介する第19弾。今回はその第18章「グアンタナモ湾」か

ら抜粋・翻訳する。2月にカンダハールに送られたザイーフは、そこで5か月弱過ごしたあと、遂にグアンタナモへと旅立つことになった。

「7月1日、私は床屋へ連れて行かれ、今一度剃り上げられた。」前回、ザイーフが受けた様々な虐待を紹介し、悪辣な捕虜の扱いを列挙したが、ここに1つ追加せねばならない。それは、ムスリムにとって一番耐えられない「髭剃り」である。「イスラームでは髭を剃ることを禁じている。ハナフィー※信仰では罪と見なされており、髭を剃られるなら殺された方がましなのだ。」

※脚注「ハナフィー：イスラーム法思想の4大学派の1つで、アフガニスタンでは主流派（世界的にも、支持者数は最大）。法学者アブ・ハニーファ（767年没）の名前からつけられた。イスラーム法やシャリーアをより自由に運用することを提唱する。」

体の毛をすべて剃り落とされたあと、他の捕虜ともども鎖に繋がれ、キューバへ向かう飛行機に乗せられた。機内の虐待：

- 両足を鎖で床に固定。
- 両手は背中に回して施錠、金属製の椅子に縛られる。
- 1インチたりとも、身動きできない。
- その状態で離陸まで4時間。
- 離陸直後から捕虜は苦しみ出し、うめき声を出す放置される。
- トイレの使用は許されない。
- どこかに一度着陸し、計23時間かけてフライト。
- 着陸後も機内で3時間待たされる。
- つまり、計30時間その姿勢をとる。
- 腕は膨れ上がり、米兵は食い込んだ手錠を外すのに一苦労した。
- 解錠後は「動くな」と命じられ、思わず伸びをした捕虜は容赦なく蹴られ殴られる。

「私自身も3度蹴り飛ばされた」後に、基地へと進み、まず医療診断を受けた。すぐに尋問室へ。過酷なフライトで疲れ切った頭に、いろいろ質問を浴びせる手はずだったが、「ここに来るまでは、キューバを脅し文句に使われたが、もう来てしまった。恐れる物は何もない」と覚悟を決めたザイーフは完全黙秘。根負けした通訳は尋問部屋を去った。

すると海運用木箱でこしらえた檻へ。手足は自由で個室。さらに「水があって何よりも私を喜ばせた。何か月も浄めの水に窮していたが、やっと満たされた。体を洗い、祈り、眠った。」夜の祈りにも起きないほど眠りこけた。

ここまでザイーフは一直線に、つまりほぼ体験したそのままに自らの半生を書き綴ってきた。それがこの本の魅力であり、俯瞰する学者やジャーナリストには到底描けぬターリバーンの内幕が、素朴な筆致で活写されている。その体験主義は、彼が最果ての地獄で目覚めた翌日から一段と鋭く輝き、あの悪名高きグアンタナモの真実を我々に伝えてくれる。

### 【檻】

ザイーフの檻はグアンタナモ捕虜収容所のゴールド棟にあった。捕虜の扱いはバグラムやカンダハールに比べれば良かった。檻の中は孤独だが、周りの捕虜仲間との会話は許され、自由の感覚があった。広さは1.2m×1.8mで横にいくつも並ぶ。ベッドは金属の1枚板。檻の中に水道と便器がある。隣の檻との壁は無く、仕切りは金網。身を清めたり排泄するのに丸見えなのは恥ずかしかった。

### 【ここはどこ？】

みんな混乱していた。「キューバじゃなく、ペルシャ湾のどこかの島だ」と言う者。「グアンタナモに行く途中の別の収容所だ」

と言う者、などなど。「メッカがどちらか分からないので、みんな別々の方角に向かって祈った。」

### 【赤十字】

アフガニスタンでお世話になった赤十字は、ここでも登場する。怪しい一面もあったが助けられた。

赤十字：「私たちが空港で見張っていたので、虐待が防げましたね。」

ザイーフ：「しかし、バスの中で兵士は私たちが太鼓のように叩きました。」

赤十字：「空港にはいましたが、バスの中は権限外でした。」

赤十字のインタビューには、茶とビスケットとジュースが出た。ドイツ人の通訳との間でこんなやりとりがあった。

ザイーフ：「どうしました？なぜそんな目で私を見るのですか？」

通訳：「君を見たことがある。どこかで会いしましたか？」

ザイーフ：「ここに来る前、カンダハールで何度か会ったのでしよう。」

通訳：「いや、それは無い。多分テレビで見たのか。顔も体つきも見覚えがある。お名前は？」

ザイーフ：「ムッラー・アブドル・サレム・ザイーフ。ターリバーンのパキスタンへの大使でした。」

そう聞くと驚いた彼は「ごきげんよう」と挨拶をして、唐突に切り出した：

通訳：「ムッラー・ダデュラーがどの棟にいるかご存じですか？」

マスードを封じ込めたあの片脚の猛者ムッラー・ダデュラー・アーケンドである。意表を突く質問だった。捕虜になって以来、ダデュラーに会ったことも、その名を聞いたこともない。もしグア

インタナモにいるのなら、捕虜の全名簿を持つ赤十字が居場所を知らない訳がない。「怪しい質問だ」と警戒した。

捕虜の中には片脚の男が2人いたが、どちらもムッラー・ダデュラーではなかった。恐らく米兵はこのうちのどちらかが悪名高き司令官だと疑い、通訳を介して探りを入れたのだろう。「赤十字の職員すべてがアメリカのスパイだと決めつける捕虜はさすがにいなかったが、米諜報機関が赤十字内に根を張り、スパイを潜伏させている可能性があると考えた者は多かった。」

赤十字への苦情が米兵を逆上させるのも困りものだった。例えば：

- 食事が少なくまずいと苦情→赤十字が米兵に改善を促す→翌週のメニューは改悪される。
- ザイーフが胸と耳の痛みを訴えた→赤十字が診断し軍医に報告→軍医は治療どころか診察すらしない。
- バドロザマン・バードル※が檻の中で赤十字にインタビューされていたが、英語だったために、外にいた下士官が怒って話を遮り、彼に全ての衣服と持ち物を差し出すよう命じた。赤十字の職員に無力感を味あわせるための見せしめだった。その証拠に、彼が立ち去ると、すべてをバードルに返却した。

※脚注「バドロザマン・バードル：ジャララバード出身（1970年頃生まれ）の英文学修士。米国とターリバーン双方を批判する文章を書いたとして、アフガニスタンで収監された後、グアンタナモへ。戦闘員地位審査法廷（CSRT）が始まる前にグアンタナモから釈放された。兄弟（2010年の時点でグアンタナモで再収監中）と共にグアンタナモに関する厳しい告発本を書き、アフガニスタンで2006年に出版した。」

このバードル事件以来、捕虜たちは「赤十字に苦情を述べなくなった。とは言え、みんな彼らとの話し合いには熱心だった。」気分転換になったし、ビスケットとジュースはとても魅力的だったようだ。



ザイーフが収監されていた後半の2年間、赤十字はパシュトー語の通訳2人をあてがった。彼らは手紙を家族に送り、文盲の者には代筆し、家族の居場所を探し出しさえした。「赤十字は、我々を助けようと試みた。一方我々は、アメリカによって拷問された。自由の大地が、全ての法律と人権をその軍靴で踏みにじった。」

### 【米兵の各グループ】

米兵たちは何組かに分かれて行動していた。それは「バッジに描かれたシンボルマークで識別できた」ようだ。

#### 3大グループ

##### [木組]

- 最も優しいグループ。
- 捕虜間で差別をせず、うまく扱う。
- 食料を十分に与え、時には果物まで出す。
- 就寝中に邪魔をしない。
- 捕虜が医者に会う必要があるれば、世話をし、なるべく早く情報を伝える。
- そんな訳で、彼らにはなるべく文句を言わないように努めた。

##### [十字組]

- とても厳格で、収容所に秩序と法を行き渡らせるのを指命とした。
- 時に差別的で、虐待も辞さず、懲罰として食料を減らすこともあった。

##### [三日月組]

- 粗野で常に差別的。
- いつも食事を減らし、衣服もろくに与えない。
- 毎晩、眠りを妨げる。
- すぐに逆上し、捕虜を罰する。

### 次の3グループ

#### [スペイン人組]

- グアンタナモで最も礼節を重んじ、尊敬すべき兵士たち。
- 捕虜に最大の同情と理解を示す。
- 彼らのかつてムスリムだった先祖について、捕虜とよく話す。
- 食料を追加し、石けんやシャンプーをくれる。
- イスラームを尊重し、祈りを妨げぬよう気にとめる。
- 聖なるクルアーンを決して粗末に扱わない。
- 収容所の外で何が起きているかを伝えてくれる。
- しかし、やがて全員がいなくなり、アングロサクソンの米兵に取って代わった。

#### [鍵組]

- まさに野生動物。
- ザイーフが解放されたときも、収容所に詰めていた。
- 粗野でイスラームを尊敬せず、捕虜の暮らしを貶めるためには、どんな面倒も厭わない。
- 深夜の点検を欠かさず、捕虜の眠りを常に妨げる。
- 上役にはウソの報告をし、捕虜を虐げ聖なるクルアーンを侮辱する。

#### [94組]

- 何の咎もなき捕虜を虐げ、聖なるクルアーンを侮辱する。
- 捕虜と94組の間の憎しみは増大し、捕虜はお返しに、出来るときは必ず反抗する。
- 兵士に水をかける、質問を無視する、常に非協力を貫く。
- 最後には、94組の排除を求め、彼らが去るまで不服従を重ねると宣言した。
- 収容所当局も折れて、組の解散を命じ、兵士個人を収容所中で別のグループに組み入れることにした。

どうやら結局は、3大グループと鍵組の計4グループが存在したようだ。そしてグアンタナモの兵士は半年ごとに異動していった。概して良い兵士が去り、悪い兵士が補充された。中には収容所の惨状に悲しみを感じ、帰ったら「キューバの捕虜に何がなされているか」を国際メディアに訴えようと言う者もいた。

また人種による兵士間の特徴もあった：

[ラテン系白人]

- 概して礼儀正しく、捕虜に同情を示す。
- 概して差別をしない。

[黒人]

- いつも疲れているように見える。
- 寝ているか食べているか。
- 低教育で、貧しい田舎者。
- 捕虜を差別する兵士は少ないが、差別する者は最も激しく差別する。
- 白人兵に悪態をつく。利己的で残虐で侮辱的だと。
- 兵士間に信頼関係は無く、捕虜に話しかけるとときや捕虜に何かを与えるとき、周りを注意する。

[アングロサクソン]

- 政府の中枢にいる連中だが、狡猾で、嘘つきで、詐欺師。
- 上官のほとんどを占め、上記2グループよりも教育的、財政的に優れている。

[インディアン]

- ほとんどいない。
- USAの本来の持ち主で、発見されるずっと前からそこに暮らしていた。
- 今ではアメリカの片田舎に住み、識字率が低い。
- 多くがドラッグやアルコールに依存している。

「彼らは最初にやって来たアメリカ人に殺され、土地を奪われ、山岳地帯に追いやられた。今でも、政府に満足な代表者を送り出せず、その兵士の多くは他のアメリカ人を侵略者と見て、合衆国のやることに同意しない。そんな彼らが現状を見て、我々捕虜を慰めた。」

以上がいわゆるグアンタナモ総論。以後ザイーフはこの刑務所における痛みを伴う体験から、米兵による捕虜の「非人道的扱い」を次々と暴露していく。

(2023年9月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**) を紹介する第20弾。今回はその第18章「グアンタナモ湾」の後半から抜粋・翻訳する。収容所の各施設の特徴、戦争捕虜の非人道的扱い、そしてその上手な隠蔽策が語られている。

ザイーフが初めてやって来たとき、つまり2002年7月時点での収容所の概要：

- グアンタナモは単一のキャンプ（収容所）で、8棟からなり、他に「監禁棟」が離れて建っている。
- 8棟内に監房の数は48。歩行スペースは2カ所。簡素な浴場は4カ所。
- 監禁棟には24の独房。

捕虜の衣装と持ち物：

- 赤い囚人服。素材は分厚く、肌を傷める捕虜もいた。
- （各自に）毛布2枚、水のボトル2個、タオル2枚、小さなビニールのカーペット、歯ブラシと練り歯磨き、聖なるクルアー

ン、マスク。

●一般的な懲罰は、カーペット以外の上記持ち物を取り上げること。

やがて、第2キャンプが出来ると、所長だった将軍は交替し、捕虜の待遇は悪化した：

- 監房数が300に激増（6倍以上）。
- クルアーンは没収。
- ザイーフたちは再び剃り上げられた。
- 捕虜への尋問が増え、よりひどく虐待された。

新たに所長となった将軍の名はミラー※1。「後にイラクに移り、そこでアブ・グレイブ収容所を統括した。」彼はグアンタナモにキャンプエコー※2をうち建てた。

※1 脚注「ミラー：ジェフリー・D・ミラー将軍（1949年生まれ）は2002年からグアンタナモ収容所で軍の上級司令官を勤めた。イラクでも捕虜の『軟化』を進言し、2004年3月に露呈したアブ・グレイブ刑務所における醜聞を彼のせいだとする者は多い。」

※2 脚注「キャンプエコー：グアンタナモ湾拘置施設を最終的に構成する7つのキャンプの1つ。捕虜を単独で拘束するために使われた。いわゆる『高価値』捕虜が、この特別なアクセス制限独房にしばしば収監された。」

そこには監禁のための様々な工夫を凝らした部屋があった。例えば、普通の部屋に檻をしつらえ、檻の前にトイレを置いたもの。扉などすべてが遠隔で操作され、四六時中ビデオで監視される。入れられると昼か夜かも分からない。何人かの「兄弟」は出てきた後、精神に異常を来し苦しんだ。

グアンタナモに来ると、捕虜の多くは数年で精神異常に陥った。そんな中の1人に、ザイーフの捕虜仲間アフマド※がいた。

※脚注「アフマド：アフマド・（アル）ラシディは1966年頃生まれのモロッコ人。ロンドンの多くのレストランでシェフとして17年間働いたのち、2001年10月にアフガニスタンに入国。2002年にパキスタンで逮捕された。獄吏がつけたあだ名は『将

軍』。ニューヨークタイムズのゴールデン記者(2006年)によると、彼の持つ強い『影響力と自尊心』から命名された。ラシディは『多頻度利用客マイレージ付与』と呼ばれた虐待の犠牲者だった。それは昼夜を問わず捕虜の収監場所を意図的に変え続け(移動マイレージを貯め)、移動時間以外は6時間におよぶ尋問を続け、捕虜を眠らせないというもの。戦闘員資格認定委員会によると、彼は『2001年7月(テロ組織)アル・ファルークの訓練キャンプにいた』とされるが、レプリーブ(法的虐待を指弾する国際NPO)の調査員が、その時期ラシディはまだロンドンにいたことの証拠を発見している。グアンタナモに2007年4月まで収容され、モロッコへ帰国した。」

アフマドはカンダハールでもザイーフの隣の監房にいた：

- 常時、重い鎖で繋がれている捕虜の1人だった。
- 虐待によって、やがて精神を病んだ。
- 治療されることは無く、何度も罰せられた。
- ザイーフは彼が気絶するのを数回見た。

そしてグアンタナモへ来たのだが、あるときザイーフの隣の檻に入れられた。すると彼は、クルアーンと詩を暗唱し、「ことし神に導かれしお方が再来される」と何度も唱えた。ある日、彼は米兵を食事の盆でたたき、キャンプエコーに送られた。そして3年間入れられていた。

アフマド以外にも精神疾患を抱えた者はいたが、誰も治療を施されなかった。「全能のアッラーの前では、狂者も精神異常者も許されるが、米兵の前ではそうはいかない。」

ここまで書いて、ザイーフはようやく自分の環境について語り出す：

- まずデルタ棟の15番檻に入れられた。
- 次にキャンプデルタ※が出来ると、そのゴールド棟8番檻へ。
- そこに2003年始めまでいた。
- さらにキューブ棟37番檻へ。

※脚注「キャンプデルタ：2002年4月に稼働を開始したグアンタナモ湾拘置施設の一部。施設全体は少なくとも7つのキャンプ

(キャンプ1から6、およびキャンプエコー)で構成されていた。」

最初、ザイーフの檻からは海が見え、行き交う船を眺めることも出来た。しかし、すぐに窓のない場所に移され、檻の中でたった1人の時間を過ごした。とは言え、締め付けはゆるやかだった：

- 週に1度のシャワー。
- 両手を縛った状態だが、2週に1度は歩行スペースで15分の散歩。
- 後に散歩時間は30分に。
- 囚人服は毎週交換。
- 髭や爪の手入れは禁止されていたが、やがて週1でカミソリと爪切りの使用が認められた。
- 食料は最初戦用品だったが、朝食と夕食は調理された新鮮なものに変わった。
- 翌年、昼食も新鮮なものになった。
- しかし、味はなく量も足りない。
- そのため、日に3度新鮮な果物が出るのは、大きな喜びだった。

宗教的な計らいもあった：

- 1日5回の礼拝が許された。
- 夜の礼拝の時刻になるとアナウンスまでして、捕虜たちを起こした。
- アザーン(礼拝の呼びかけ)のテープは米兵が流し、彼らはその口まねをした。
- しかし日中は、捕虜たちが正しい時刻を日の高さで判断した。
- 後には、集団での礼拝も許された。
- 但し監禁棟では、時刻など分からない。みな思い思いのタイミングで礼拝した。



第3キャンプができると食事が質・量ともに悪化し、懲罰が増えた。新築のキューブ棟を例にとると：

- 囚人は季節を問わず下着のみで檻に入れられる。
- 礼拝のときも下着のみ。
- 食事の量は大きく減らされ、米兵による虐待がひどくなった。
- 便所は皆に丸見え。
- 檻は狭く、捕虜はまっすぐ横になって眠れない。
- 冬は極寒で、捕虜はその場で跳躍して暖をとる。

こんな環境のなか「あるとき、下水が詰まって最悪だった。汚水と糞便が絨毯のように床を覆い尽くし、異臭を放った。」そんなトイレ事情としては：

- 排泄後、紙も水も使えない。
- 手で拭くが、その手は洗えない。
- 囚人はその手で食事をする。

「これが、人権を守ると主張する奴らによる我々の扱い方だった。」

つぶやき子の父は戦後シベリアで6年間捕虜として過ごした。父の葬儀で初めて会った先輩義勇兵によると、「永久凍土を開墾したが、夏でも1メートル掘ってやっと土が出てきた。それは並大抵のことではなかった。」よくぞ生きて帰ったものだが、本人がいっさい語らなかつた悲惨さ・屈辱は如何ばかりだったろう。グアンタナモよりはマシだったと信じたい。

さて、ザイーフはキューブ棟に入れられ辛酸をなめた：

- キューブ棟への収監は1度につき1か月から5か月まで。
- 自分を制御できない者ほど、長くとどめ置かれる。
- やや離れたところに精神病棟があった。
- そこに入れられる多くは、重患で自殺傾向があった。
- ザイーフのいる間、ほぼ毎日自殺騒ぎがあった。

- 自殺を試みた者は鎖で縛られ、精神安定剤を打たれる。
- そのため多くが薬物依存症になる。

それ以前に入れられていたキャンプデルタでは、囚人間に対立があった：

- 原因は米兵のスパイだとの疑惑。
- スパイは他の囚人に叱り飛ばされ、時には暴力を振るわれる。
- 近くの檻にいる者はスパイに唾を吐きかけ、檻を変えてくれと要求する。
- スパイの多くが檻の中で首つりを図り、精神病棟に送られた。

スパイ問題をより複雑にしたのが、人種と宗教の相違だった。

「アフガン人スパイの幾人かが、改宗しイスラームを捨てた。アッラーの名と既に取り上げられた聖なるクルアーンを蔑んだ。イラクやイエメン出身のスパイもいた。」不信者は首に十字架さえつけ、日々その数を増した。この事態は「イスラームを放棄させようとするアメリカの策略だと見る者が多かった。」

続いてザイーフは新築されたキャンプ4とキャンプ5を解説する。まずキャンプ5：

- 他から離れた場所にある懲罰専用キャンプで「墓場5」とあだ名される。
- 換気も窓も無く、壁はコンクリート。
- 小窓から食事が差し入れられるが、捕虜はその間後ろを向かされ、小窓の方を見てはいけない。
- よく食べ物が床にこぼれるが、替えは出ない。
- 入った者は、見る影も無く痩せ細る。

続いて独特なキャンプ4：

- 真っ当な食事が与えられ、捕虜は体重と体力を回復できる。
- 共同生活が許され、集団での食事や礼拝が可能。
- ゲームやスポーツも許される。

- 望めば1日何度もシャワーを浴びられる。
- 囚人服は白で各自に洗濯石けんが配られた。
- 週に1度は映画を上映。
- サッカー場、バレーボールコート、卓球台があり、運動が許可される。

話がうますぎるようだが、ここに「多くのジャーナリストや国会議員たちがやってくる。ビデオや写真が撮られるが、訪問者との会話は禁止された。」つまり、一片のパンにも窮する多くの痩せた捕虜の存在を隠すための装置だった。

さらにキャンプ4は「釈放を前に入れられる場所」と位置づけられていた。だから、ここに来た捕虜は「もうすぐ出られるぞ」と喜んだ。米兵たちも「ここで1か月も過ごせば、みな出て行く」と期待を煽った。だが、待つべき「ひと月がやがて1年になった。」それでも、ザイーフたちは驚かなかった。「アメリカ人は何かを言って約束しても、すぐに忘れてしまうからね。」

実際 2004 年 6 月にキャンプ 4 に移されたザイーフだが、1 年と 3 か月をそこで暮らし、充分すぎるほど体力を回復した。そして遂に釈放の時がやって来た。

(2023 年 9 月 15 日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」 (**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**) を紹介する第 21 弾。今回は、釈放のエピソードを記す前に置かれた第 19 章「生者の墓場」から抜粋・翻訳する。これは著者がグアンタナモにいた 4 年間で見聞きした出来事の総まとめ。米国による人権蹂躪のカタログである。

### 【ラマダーン事件】

2003年のラマダーン月の2日目に、ある米兵が捕虜を虐待した。48人の捕虜のうち1人が抗議のため兵士たちに水をかけた。彼はすぐに懲罰部屋に隔離されたが、翌日捕虜全員が罰せられた。34日間、新鮮な食事は与えられず、水も奪われた。上層部に向けようと、返事は「これが軍隊式だ。だれか1人が間違えば、グループ全員が罰せられる。」

### 【クルアーン侮辱事件】

女性兵士が監房検査の際、クルアーンを意図的に床に投げ捨てた。捕虜たちは彼女を罰せよと要求してストライキを起こし、着替え、シャワー、散歩を拒絶した。すると報復にガスを送り、捕虜を気絶させた。米兵はその隙に持ち物を奪い、髭を剃った。夜は大きな音を立てて、捕虜を眠らせなかった。

### 【マシャール殴打事件】

インディアナ棟で捕虜たちが「アッラーフ・アクバル（アッラーは最も偉大なり）」と唱え檻を叩き始めた。アラブ人の兄弟マシャール※がひどく殴られ、多くが死んだと思ったことによる抗議行動だった。米兵は「入院しているが危篤だ」と発表した。2か月後、彼が歩くことも、座ることも、動くことも、しゃべることも出来ない麻痺状態であると知らされた。2年半入院した後、マシャールはサウジアラビア政府に引き渡された。

※脚注「マシャール：マシャール・アワド・サイヤフ・アルハルビは（1980年頃）サウジアラビアに生まれた。2001年にアフガニスタンのマザーリシャリーフで逮捕。グアンタナモから釈放され、2005年7月19日にサウジアラビアに帰国した。」

ザイーフによると、「捕虜は世界で一番弱い人々」だが、グアンタナモに入れられた者は「もはや人ですらない。日に日に人間性を奪われていく。」

### 【捕虜仲間たち】

①イエメン出身のムフタール※1。彼はクンドゥーズ州のカライ

エ・ジャンギ※2から送られてきた。カライエ・ジャンギはウズベキスタン軍に投降したターリバーンらが収容されたが、捕虜同士に殺し合いを強いる、生きた捕虜の金歯を抜こうとするなど虐待が横行し、その挙げ句に捕虜による暴動が勃発した。

※1 脚注「ムフタール：ムフタール・ヤフヤ・ナジ・アルワラフィ（1976年頃生まれ）はイエメン市民。アラブ人向け野戦病院の運営を補佐し、ターリバーンを助けた廉で収監された。2008年12月時点で、いまだグアンタナモにいる。」

※2 脚注「カライエ・ジャンギ：『ターリバーンとアル=カーイダの捕虜』が収監されていた砦。2001年11月25日から12月1日まで暴動が起き、外国軍の特別作戦部隊による空爆でやっと鎮圧された。300人の捕虜のうち生き残ったのは86人だけだった。」

ムフタールによると、暴動は「決死の反乱だった」と言う。敵はドスタムの兵士だった。仲間に囲いを解かれ、少ない武器を手に6日間は持ちこたえたが、再び手錠をはめられた。

②タジキスタン出身のヨウスフ※。彼はターリバーンによってタジキスタンでリクルートされた。ドスタム軍に捕まったときは「故郷に送り返される」と思った。しかし、コンテナで何日も運ばれ、移動中に息絶えた捕虜の死体をかき分けて外に出ると、赤十字の代表者がいた。さらに目隠しされ、ジューズジャー州の刑務所に送られた。

※脚注「ヨウスフ：ヨウスフ・ナビエフは（1964年頃）タジキスタンのイスファラで生まれた。2004年7月に戦闘員資格認定法廷が設置されたが、その前にグアンタナモから釈放された。」

③カンダハール州クシャブ出身のアブドル・ガニー※。空港をロケット弾で襲った廉により、カンダハール州知事の命で、自宅にて逮捕された。容疑を否認したが、現場の空港に連行され、暗い部屋のなか鉄線で殴られた。なおも否認すると逆さづりにされ、昼間中なぐり続けられた。痛みを耐えきれず、自白した。その結果、アメリカ人に引き渡された。

※脚注「アブドル・ガニー：1984年頃生まれ。戦闘員資格認定委員会に出された証拠によると、『(2002年11月)カンダハール空港を離陸しようとした米空軍の輸送機をBM12ミサイルで攻撃するのに加わった。』2008年12月時点で、いまだグアンタナモにいる。」

### 【ウソ発見器】

ザイーフはあるとき、ウソ発見器を使った尋問を受けた。

尋問官：「これはウソ発見器だ。これを使って尋問してもいいか？」

ザイーフ：「もっと早く使えば、無駄な時間を省けたのに。」

尋問官：「君のことをすべて知っているのは誰だ？」

ザイーフ：「アッラーだ。」

尋問官：「ほかには？」

ザイーフ：「私自身だ。」

尋問官：「発見器を使えば私にもわかる。」

ザイーフ：「自らがアッラーだと言い張ってはいけない。父親ですら息子の心はわからぬものだ。」

こんなやりとりで始まった機械仕掛けの尋問もザイーフの「強い心には勝てなかった。」

### 【尋問官のバリエーション】

①フレンチ髭を生やした魔術師風の男がこう切り出した。

魔術師：「君を金持ちにしてあげよう。私を与える500万米ドルで君はアフガン1の大富豪だ。」

ザイーフ：「私はとても金持ちです。想像以上にね。お金はもう沢山、いま欲しいのは自由です。」

魔術師：「不信感のあまり私が言っていることを理解できないようですね。」

ザイーフ：「信じられるわけがありません。あなたに願うのは、ここから出るための手助けのみです。」

こんな実のない話に4時間も費やしたあげく、魔術師は退席した。

②続いて自らを「天使」と称する女性が尋問を引き継いだ。

天使：「私が誰か知っていますか？」

ザイーフ：「アメリカ人とお見受けします。」

天使：「ご存じないようですが、あなたの釈放、待遇、処罰、すべてについて権限を持つのが私です。実は、これまでの尋問結果をあまり信じていないのです。私にだけは初めから正直に語ってください。」

ザイーフ：「そうすれば、あなたの次に来た尋問官に、同じ事を繰り返さなくて済みますか？それとも、また最初から・・・」

天使：「しゃべっていいと言われなければ、お黙りなさい。教えてあげましょう。あなたのプライドを剥ぎ取りますよ。」

ここでザイーフは切れた。相手を非難しまくり、尋問は終了。

「彼らが再び現れることはなかった。」

### 【戦闘員資格認定】

グアンタナモのおかげでアメリカは国際世論の圧力を受けた。そこで「3年後に彼らは戦闘員資格認定委員会※をでっち上げ、世界と捕虜を騙そうとした。」捕虜の多くはその設立を喜んで迎えたが、実際は「どの捕虜がアメリカの敵か」を決するほどの役割しか持たなかった。

※脚注「戦闘員資格認定委員会：2004年7月に聴聞を開始。グアンタナモに収監されている各捕虜が『敵戦闘員』と定義するに値するかどうかを法的、一時的に決定する会合。574回ひらかれたうち、37回のみが報道機関に観察、公開された。収監者本人が出頭を義務づけられることは無く、多くが委員会に文書を提出する形で参加した。」

委員会は「みなお馴染みの尋問官によるでっち上げだった。裁判官、弁護側、告発側すべてが、CIA、FBIなど諜報機関に雇われていた。」あげくに誰も法の専門家では無かった。ザイーフにもひとり担当がついたが、あまりに無知なので弁護を断った。



## 【行政審査会】

案の定、戦闘員資格認定委員会は長続きしなかった。すると続いて軍内に行政審査会※なるものが持ち込まれた。しかし、これもザイーフは評価しない。ニセ情報で捕まった者は枚挙にいとまが無いのだ。「ムジャヒディーンの服を着ていたから、鏡を持っていたから、電話を持っていたから、家畜を見張る双眼鏡を持っていたから」無実の者が捕らえられた。

※脚注「行政審査会：米軍内でグアンタナモに収監されている容疑者の品定めを毎年おこなう聴聞会。収監された者が法的アドバイスを受けられないこと、自分がどんな容疑で収監されているかを知り得ないこと、容疑者に無罪の推定が認められないことを理由に、人権擁護の立場から非難された。初年度の聴聞会は2004年12月14日から2005年12月23日まで、数次にわたって開かれた。」

ある捕虜は「25年前の難民IDカードしか身分を証明できるものがなくて逮捕された。」これらが、行政審議会の言う真実であり「アメリカが言い張る証拠であった。」こうして、元ターリバーン、現政権のメンバー、靴職人、鍛冶屋、羊飼、ジャーナリスト、両替商、商店主、そしてモスクのイマーム（指導者）が閉じ込められ、「3年後にやっと無実だとされ釈放された。」もちろん、その間の補償はおろか、詫びる言葉すらない。

## 【ハンスト】

2005年の夏には大きなハンガー・ストライキが発生した。275人が26日間にわたり食事を拒み、捕虜の3分の2は、何らかの形でストに参加した。ザイーフを含む6人の捕虜代表団が収容所側と3度にわたり交渉し、「捕虜を人間として扱う」と約束させて、一旦は解決した。収容所長はラムズフェルド国防長官に、「グアンタナモの囚人にもジュネーブ条約を適用させるよう掛け合った」との甘言をたれさえした。しかしそれはアメリカのウソだった。

そのためストは再発し、2005年9月11日にザイーフが釈放されたときも、なお続行中だった。痩せ細ったハンストの実行者は

次々と病院に運ばれた。病床についても「死を恐れぬ」彼らは食事に手をつけない。病院長が彼らへの強制給餌を拒んだため、新たに5人の医者が派遣された。

こうした「生者の墓場」たるグアンタナモのハンストが、ようやく収束したのは翌2006年1月のことだった。

「さあ、国連はいまどこにいる。2千万のアフガン人を苦しめる制裁にかまけて、数千のモスLEMが不当に拘束され、正義と法と人権をもとめ叫ぶ声が聞こえないのか。何のための国連なのか。」

(2023年9月25日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaeef/2010**)を紹介する第22弾。今回は第20章「釈放」の前半から抜粋・翻訳する。ザイーフは4年以上も閉じ込められた「生者の墓場」から蘇り、祖国に帰る日をやっと迎えた。

2004年5月11日、ザイーフは別の部屋に送られた。「どうせまたどこかの尋問部屋に行くのだろうと考えていた」が、着いた場所はいつもと様子が違った。「まるで事務室のようで、机やテレビもあり、きちんとした部屋だった。」その上、入室すると米兵がザイーフの両手両足を解き放った。檻の外で4肢が自由なのは「グアンタナモに収容されて以来はじめてのことだった。」

しばらくするとアフガン人と3人のアメリカ人がやって来た。アフガン人は「アフガン政府の代表」だと自己紹介した。アメリカ人のうち2名は知った顔で以前優しく接してくれた尋問官。残りの1人は「新たな在アフガン米国大使館の職員」だと言う。何度

も騙され続けたザイーフは彼らが「本当に言う通りの人物かどうか疑った。」

この自称「アフガン政府の代表」は数日後ふたたびザイーフと面談した。今度はランチを食べながら。「うまい料理に新鮮な果物、ペプシまで。私は尊敬されていると感じた。」その席で彼は「キューバからの解放を確かなものにするためベストを尽くす」と宣言し、翌月の再訪を約束した。

アフガン代表が去った後、ザイーフは「あたかも人間として」扱われるようになった。週に1、2度の尋問は続いたが「何か欲しいもの、食べたいものはないか？」と聞かれる。ちょうど収容所の環境が悪化しているときだった。「もらったものを他の捕虜に分け与えた。香水、シャンプー、一級品のオリーブオイルなど。」

ところが、翌月になっても代表は現れない。2か月たったころザイーフは「疑いが増し、やがて失望した。」尋問官は「必ず戻って来るから待ちなさい」と諭し続けたが、ザイーフはもう信じなかった。多くの捕虜仲間は「釈放されると考えるのが、そもそもおかしい」と笑った。

こうして1年ほどが経ったある日、尋問官が言った、「アフガン代表が来週戻ってきて、あなたは釈放されます。」果たして翌週、ザイーフは部屋を移された。そこには、空調、冷蔵庫、テレビ、そしてバスルームまであった。別の尋問官が入ってきて伝えた、「おめでとう、あなたは釈放されました。将軍も祝福していましたよ。アフガン代表は明日ここに来ます。」

釈放されたことは嬉しかったが、後に残す捕虜たちのことが頭から離れなかった。「法も規則もなく、人間として尊敬されない」彼らをそのままにして独り出て行く。まして仲間のうちには処遇

改善を訴えてハンストをしている者もいる。正義感の強いザイーフにとっては、さぞ心苦しいことだったろう。

翌日、待ちに待ったアフガン代表が現れ、ザイーフの家族や国家の現状を伝えた。お返しにザイーフは収容所の環境を包み隠さず話し、アメリカ人と協議し改善するようアドバイスした。彼が部屋を出るとザイーフは再び、元の檻に戻された。そこで釈放前の捕虜を診察する赤新月のスタッフが来るのを待っていた。すると医者ではなく米兵の一群がやって来た。

ビデオカメラを携え、パシュトー語の通訳もいる。そして1枚の書類を差し出した。いわく「これを全て認め著名せよ。それが釈放の条件だ。」ザイーフはその各条項を鮮明に記憶し、この自伝に記している。

グアンタナモにいた者だけが知る貴重な文書資料である：

- ・捕虜は罪を認め、罪を許し収容所から解放する合衆国政府に感謝する。
- ・捕虜はアル＝カーイダおよびターリバーン運動のメンバーだったが、それらとの関連を今後すべて絶つ。
- ・今後いかなるテロ活動にも加わらないと捕虜は約束する。
- ・今後いかなる反連合、反米国の活動に加わらないと捕虜は約束する。
- ・上記の条項を破った捕虜は、再逮捕され死ぬまで拘束される。
- ・捕虜の署名

怒ったザイーフはこの紙切れを米兵たちに投げつけた。そして逆に「5項目」に分けて言い分を述べた：

①私は無実で、誰かから非難されることは決してない。私を解放するからと言って、米国を許したり、ましてや感謝することなどない。私が罪を犯したというのは、どこの法廷、裁判所なのか？

②私はターリブだった。今もターリブで、今後も常にターリブだ。だが、アル＝カーイダの一員だったことはない！

③私はテロ攻撃の廉で咎められたが、そんなことはしていない。どうすれば、してもいないことを認められるんだ。教えてくれ！

④アフガニスタンは私の祖国だ。私の祖国で私に無理やり何かをやらせる権利は誰にもない。私が家の主なら、他に誰が私に家の中ですることを命じられるのか？

⑤私はまだここに繋がれている、無実の身で。再逮捕は可能だ、どんな言いがかりをもってしても。だから、いかなる書類にも署名しない。

困った米兵たちは「署名しないと釈放は取り消され死ぬまでここを出られないぞ」と脅したが、ザイーフは受け入れない。彼らは何度も部屋を出たり入ったりして困った様子だった。最後に「しょうがない、何かお前の好きなことを書け」と諦めた。そこでザイーフは次の文章を記した：

「私は罪人ではない。無実だ。パキスタンと米国が私を嵌めた。特に咎もないのに4年も拘束された。これは仕方なく書いているが、今後いかなる反アメリカ活動にも軍事行動にも加わるつもりはない。ワッサラーム※」

※脚注「ワッサラーム：アラビア語の挨拶で、文字通りの意味は『平安に』」

文末に署名。米兵たちはその紙を持って部屋から消えた。しばらく独り残され「うまく認められるだろうか」と心配していると、赤新月のチームがやって来た。「おめでとう、釈放です」と言う。続けて「アフガニスタンに帰国できますよ。それをお望みですか？」

馬鹿げた質問にちょっと切れたザイーフ：「望まなければどうなるのですか？一生ここにいるのですか？」

赤新月：「我々には何も出来ません。アメリカ次第です。」

ザイーフによると「全てはアメリカ次第」。つまりここにいる赤新月は、米国の捕虜への仕打ちに若干の法的免罪符を与えるためだけの連中だ。くだらない質問もその一環だった。やがて彼らも姿を消した。

続いて元いたキャンプ5へ。ザイーフが不在の間に捕虜は個室の「墓場」から引っ張り出され、大きな檻にまとめて入れられていた。彼らへの最後の挨拶が許された。1時間半にわたって話をした。「彼らを最悪の状態のまま残して出て行くのは恥ずかしかった」が、みな祝福してくれた。キャンプ1とキャンプ4の仲間にも挨拶し、夜の11時にやっと部屋に戻った。

その夜中2時に起こされ、米兵に連れられ空港へと向かった。1機のジェットが離陸態勢で待っていた。チャーター機だ。機外に数名のアメリカ人とアフガン人がいた。彼らに引き渡された。

「おめでとう。さあ機内へ。」

搭乗口で米兵と別れ、機内へ。「米兵が肩に手を置かない状態で歩けたのは、その時が初めてだった。」将軍が乗り込み別れの挨拶をして去った。機内には4名の警備担当らしきアメリカ人。3時に離陸した。

機内で例のアフガン代表が伝統衣装とターバンをくれた。狭い機内だったが、「自由に歩け、トイレが使えた。」いっぱい食べて、ぐっすり眠った。10時間飛んでロンドンで給油。さらに7時間飛んで、カーブル国際空港に着陸した。

(2023年10月5日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaef/2010)を紹介する第23弾は、第20章「釈放」の後半と第21章「勝てない戦争」から抜粋・翻訳する。ザイーフを乗せたプライベートジェットはついに祖国アフガニスタンに降り立った。

カーブル空港周辺の様子にまず驚いた。「米軍がこしらえた道路とフェンス、そして米軍基地が、まるで小さな都市であるかのように見えた。」機外に出ると、すぐに「サジダ※を捧げて、アッラーへ感謝した。」グアンタナモを出たのが2005年9月11日。翌12日の到着だった。

※脚注「サジダ：ひれ伏して、額、掌、膝、足を地面につけること。イスラームの毎日行う祈りの儀式の一部。」

その日はアメリカ人によって、まず国家保安局へ連れて行かれ、次いで家族のいるムッラー・ムタワッキルの自宅へ。さらにムジャッディディーを表敬訪問※した。2日後、市内に家を貸し与えられた。アメリカ人は今後1年間、家賃を払ってやるという。そこまでは順調だった。

※脚注「グアンタナモから帰った者はみなムジャッディディー率いる『平和と和解委員会』によって公式に取り扱われた。2009年2月の段階で、63名がグアンタナモの元収監者だった。最大時で、グアンタナモには110名のアフガン人がいたが、今(2009年)は27名にまで減っている。元収監者のうち8名が、何らかの理由で再収監され、そのうちの3名は後に再釈放された。(いずれもカーブルにある『平和と和解委員会』が発表した数字)」

ところが5か月後、妙な事が起きてザイーフは「感情的になり動揺した。」ある朝、「アフガン国家保安委員会」なる組織から電話があった。「お伺いしてもいいですか？」ザイーフは答えた、「どうぞ、心からお待ちしています。」組織名を聞いて、てっきりアフガン人がやって来ると思ったのだ。



ところが午後2時、家の前に現れたのは防弾チョッキを着て武器を持った米兵たちだった。「2度と見たくない連中だった。」すぐに仮病。「返事よりも沈黙が勝る」との判断だ。その日は退却したが、2日後に同じ男から電話があった。

男　　：「また今日の2時に伺ってもいいですか？」

ザイーフ：「どなたが来られますか？」

男　　：「先日と同じ人たちです。」

ザイーフ：「グアンタナモで約束されました、『帰国後、こういう人たちが訪ねることはありません』と。自由な私を尋問するなら手錠と鎖を持ってきなさい。」

すぐに、別の男から電話。グアンタナモで釈放のために尽力してくれた1人だった。「彼らを家に入れてやってください。ちょっと質問したいだけです。1度きりです。」さすが「墓場」で世話になった男の頼みだ。ザイーフも断り切れず、気の向かぬまま同意した。

果たして午後2時、質問項目満載の紙切れを持って米兵たちは現れた。アフガニスタン統治の難しさに米国は困り果てていたのだ。

ザイーフ：「1度でも答えるときりが無くなります。だから答えません。」

米兵　：「怖がらなくても大丈夫です。出処は漏らしません。それに援助を増やす覚悟です。」

ザイーフ：「秘密保持も援助増額もあなた方の勝手です。でも私は協力したくないのです。グアンタナモであれだけ聞けば満足でしょう。」

米兵　：「あなたには未来があり、家があり、子どもたちもいます。」

アッラーに守られ、こんなワナとは無縁のザイーフは続けてこう言い放った。

ザイーフ：「ここが独立した自由の国だと言うなら、私も独立して自由です。これがもし自由の問題なら、『来ないでくれ』と言う自由を私は持ちます。これがもし権力の問題なら、お気の済むようにどうぞ。権力はあなた方のもの。さあ投獄するか、お帰りになるか、何なりとどうぞ。」

彼らは去った。

米国の質問には断固として答えなかったが、米国の傀儡と言われた「ハーミド・カルザイには、帰国後3、4度招待され」国政に関して言葉をかわした。「意見は違ったが、ともに解決策を探った。」

ザイーフのカルザイ感：

- 「平和と安定」が口癖だが、その真反対にいる。
- ウソのプロパガンダと空虚な約束で、国民を欺く。
- 意識してそうしているのか、気づいていないのか、謎。
- 取り巻きによって隔絶され、偽情報を信じさせられている。
- そんな偽情報に基づき行動する。
- 外国のスポンサーのお陰で権力に着いたため、元より地盤がない。
- 自らが虎と絶壁の間にいると自覚してはいる。
- 朝起きてどちらに進むか不明。
- 即席大統領の悲哀で、友と敵の区別が付かない。

ボロクソである。挙げ句にこう宣言する、「アフガニスタンの問題は彼の頭では解決しない。操られているポーンに過ぎないカルザイの時代は、じきに終わる。」

そこまで言えば、「ではお前だったらどうするのか？」と聞かれるのは当然だろう。米国も、カルザイもそれが知りたかったはずだ。ザイーフはその質問に以下のように答えている：

●そもそも、「ターリバーンとアル=カーイダを根絶やしにする、そして民主主義と自由をもたらす」と考えた米国には、笑うしかない。それは米国の「意見」としてはアリだが、私は同意しない。

●（手をパーにして開き）今はこんな感じ。

●（すべての指をクローにして）3年後にはこうなる。本当のバカでなければ、意味がわかるだろう。

●（固いゲンコツを握って）さもないと、6年後にはこうなる。ここで君が脳みそを使うならまだまだが・・・

●使わなければ、10年ですべてが制御不能となる。君らの試みは恥ずかしい失敗となり、我々は大災害を被る。

この自伝が書かれたのは2009年で、2010年には書物として世に出ている。10年後と言えば2019年ないし2020年あたり。2021年に米軍撤退だから、ザイーフの先を見る目は正しかったと言うべきか。

この本の紹介も、いよいよ次回で最後となる。

(2023年10月15日)

アブドル・サラム・ザイーフの自伝「ターリバーンと共にある私の人生」(**My Life with the Taliban/Abdul Salam Zaef/2010**)を紹介する第24弾。最終回となる今回は「エピローグ 今日のアフガニスタン」から抜粋・翻訳する。

ザイーフによると、アメリカは未だ自らが「唯一の世界のリーダーであるという仮定」にしがみついている、それが失敗の原因らしい。彼が列挙する就任したばかりのオバマ大統領の試練は：

●「雌牛として乳で手なづけた」パキスタンの大統領ムシャラフが、無実のアフガン市民の殺害を手伝ったことや、国内のイスラーム政教を抑圧したことで、国民から憎まれ始めている。

●アメリカがイスラエルを特に強く支援しパレスチナと敵対することを見過ごせないアラブ世界のリーダーたちは、アメリカに背を向ける。

●ジョージア、ウクライナ、チェコ共和国に防衛設備を築いた効果は大きい、ロシアの強化、中国の劇的進歩、イランの核軍備は今後アメリカの脅威となる。

こうした状況を前に、「変化」を標榜したオバマも詰まるところは諜報部門の判断に頼らざるを得ない。アフガニスタンでは「カルザイの首を新たな傀儡にすげかえようと企てているが、それはアフガニスタンの独立をさらに犯すだけだ」と斬り捨て、アフガン問題の独自性を語る：

●対アラブ諸国では「付かず離れず」に甘んじるアメリカにとって、アフガニスタンは「御し易い。」敵は世界中に散らばっていない「土着」の民族だ。いくら殺し苦しめても、世界から大きな反発を招くことは無い。パレスチナやイラクとの大きな違いだ。

●抑圧され続けたアフガン人は辛抱強い。「不幸なことに、世界も辛抱強く」その苦難や流血を見ながらも黙っているが。

●当初アメリカの介入に小躍りしたアフガン人も、今ではアメリカが人々を殺し、お互いを憎しむよう仕向けているだけだと気づいている。

●国内の治安は地に落ちた。いくらかでも財産のある者は国外に投資する。

●オバマや同盟国は増派を企んでいるが、それで治安が保たれる訳ではない。「より多くの兵士は、より多くの流血を意味する。」近隣諸国も緊張する。

では、ザイーフの提案は？ 前章で積み残した課題だが、至極シンプルに、オバマ政権に対しこうアドバイスする、「アメリカは戦争キャンペーンではなく、平和キャンペーンを。戦略の大転換が必要だ。」

そして国内向けには「団結せよ。」

.....

以上が、本書の概略である。著者のザイーフは2012年、UAEに亡命した。アルジャジーラの記事（2012年4月9日付）によると、9.11の記念日に向けテロを企んだとされる2名のアラブ人を支援した事で、アメリカに睨まれたためだという。

そして2021年8月、自らが育てたターリバーンが再び政権につき現在に至っている。

<完>